You, Unlimited

Ryukoku University

Course Guide

履修要項

Graduate School of International Studies
国際学研究科

入学生用

2023

2023 年度　学年暦【大学院】

● 休　日
● 授業日

2023　4

日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	・	・	・	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	・	・	・	・	・	・

1	**学年始**
1	**入学式（深草）**
1,3-6	**履修指導期間（瀬田）**
2	**入学式（瀬田）**
2-6	**履修指導期間（深草）**
7	**第 1 学期授業開始**
21	ご生誕法要（瀬田）
29	昭和の日（授業実施日）

5

日	月	火	水	木	金	土
・	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	・	・	・

3	憲法記念日
4	みどりの日
5	こどもの日
8-12	**履修辞退受付期間**
10	降誕会（5 講時以降休講）
13-14	降誕会（13 全学授業実施日）
15	お逮夜法要（深草）
16	ご命日法要（大宮）
21	創立記念・親鸞聖人降誕会法要
27	5 講時以降 水曜日 6 回目分

6

日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	・	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	18	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	・

15	お逮夜法要（深草）
16	ご命日法要（大宮）
21	ご生誕法要（瀬田）

7

日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	・	・	・	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31	・	・	・	・	・

17	海の日
21	ご生誕法要（瀬田）
22,25	**集中補講日**
27	**第 1 学期授業終了**
28-29,31,8/1-5	**第 1 学期定期試験期間**

8

日	月	火	水	木	金	土
・	・	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	・	・

4-5	**定期試験予備日**
6-9/8	**夏期休業**
7-10	**期間外授業実施可能日**
11	山の日
11-18	**一斉休暇**
21-22	**期間外授業実施可能日**
23-25	**追試験期間（全学部）**
26,28-9/1	**サマーセッション①**

9

日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	・	・	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

2,4-8	**サマーセッション②**
9	**第 2 学期開始**
9-15	**履修指導期間**
15	**9 月学位記授与式・入学式**
16	**第 2 学期授業開始**
18	敬老の日
21	ご生誕法要（瀬田）
23	秋分の日

10

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	・	・	・	・

9	スポーツの日（授業実施日）
9-13	**履修辞退受付期間**
16	ご命日法要（大宮）
18	報恩講（全学終日休講）
28-29	龍谷祭（瀬田）（28 全学終日休講）

11

日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	・	・

3	文化の日
3-5	龍谷祭（深草）（4 全学終日休講）
15	お逮夜法要（深草）
16	ご命日法要（大宮）
21	ご生誕法要（瀬田）
23	勤労感謝の日
25-26	**入試**

12

日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	・	・	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31	・	・	・	・	・	・

15	お逮夜法要（深草）
21	ご生誕法要（瀬田）
26	**集中補講日**
27-1/5	**冬期休業**
29-1/5	**一斉休暇**

2024　1

日	月	火	水	木	金	土
・	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	・	・	・

1	元日
6	**授業再開**
8	成人の日
15	お逮夜法要（深草）
16	**集中補講日**
20	**第 2 学期授業終了**
22-27,2/1	**第 2 学期定期試験期間**
29-31	**入試**

2

日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	・	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	・	・

1	**定期試験予備日**
2-3/31	**春期休業**
2-3,5-8	**期間外授業実施可能日**
11	建国記念の日
12	振替休日
14-15	**入試**
16-17,19	**追試験期間**
23	天皇誕生日

3

日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	・	・	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31	・	・	・	・	・	・

10	**入試**
15	**学位記授与式（瀬田）**
16	**学位記授与式（深草）**
20	春分の日
31	**学年終**

⚠ 注意事項

1. 学年暦は事情により変更することがありますが、その場合は掲示によって連絡します。
2. 授業日の網かけ表示には、集中講義日を含んでいます（補講日および試験日には網かけをしていません）。

国際学研究科ご入学おめでとうございます

高度情報化とグローバル化によって、世界のボーダレス化と一体化が急速に進む一方、地球規模での課題も噴出しています。地域・国家間の激しい対立や摩擦が、移民の排斥や特定の集団に対するヘイトスピーチ、さらには戦争や内戦、種々の紛争に発展するケースも存在します。問題の背景には複数の多様な要因が存在し、それらが相互に複雑に絡み合って新たな問題に発展することもしばしばです。まさに、不安定で不確実な世界に私たちは身を置き、多くの解決すべき問題とともに生きていると言えます。

国際学研究科に入学されたみなさんには、本研究科での学びと経験を通して、混迷を極める現在の世界をより良い方向へと変えていく、その推進力たる人材へと成長されることを心より期待しています。というのも、国際学研究科は、これまでの既存のディシプリンでは対処できない諸問題を、より多角的・多面的に、かつ複眼的に考察することで問題を把捉し、解決に導こうとする領域横断的な研究の場を提供しているからです。

国際学研究科は 2019 年度に新たに創設された研究科ですが、その前身は 2000 年に開設された国際文化学研究科で、同研究科は国際文化学の研究領域を牽引し、修士号および博士号を得た多くの優れた人材を輩出してきた実績があります。国際学研究科では、より専門的な観点から、国際文化学専攻、グローバルスタディーズ専攻、言語コミュニケーション専攻という 3 つの専攻を設けています。修士課程では、国際学の個別的あるいは総合的な領域における研究を通して研究能力を養うとともに、学修の高度化を段階的に促進し、広い視野で学識を深められる教育課程を提供しています。この教育内容によって、自文化への理解を基軸としながら他文化や多様な価値観を理解、尊重し、さらに多様な国際的コミュニケーション能力とすぐれた人格を備えた人材を育成できると考えています。

博士後期課程では、自立した研究者として研究活動を行ないうる高度な研究能力の涵養をめざします。また、グローバルな観点から専門的な研究能力を育成することに加え、その研究能力をさまざまな国際社会・地域社会の場で生かしていくことを目標とします。さらに、研究成果を英語等の外国語によって発信できる日本人研究者、そして日本に関わりながら多様な現象を理解し研究する外国人研究者の育成も図ります。

みなさんの学びを支え、良き助言者となるのは、多くの専門知識と多彩な経験を有し、国内外で各専門領域において活躍する教員だけではありません。みなさんと共に学ぶ多様なバックグラウンドを持った同輩たちも貴重な存在となることは言うまでもありません。教員も学生も、共に学問を極める研究仲間として相互に忌憚なく自由闊達な意見交換を行うことで、より研究の幅を広げられるものと信じています。そのためには、みなさんが決して受け身になることなく、自らが主体性をもって学ぼうとする研究姿勢が求められます。

学問の探究は決して容易なことではありません。みなさんが困難に直面する中でも有意義な研究生活を送ることができるよう、教員をはじめ、本学スタッフはできる限りのサポートをしていきたいと考えています。本研究科での学びや、国内外でのフィールドワークなどの経験の積み重ねが、みなさんの将来への糧となり、人生の宝物となることを願っています。

龍谷大学大学院国際学研究科長
福山　泰子

目　　次

研究科長より入学の挨拶
龍谷大学の「建学の精神」…… 1
学位授与の方針【ディプロマポリシー】…… 2
教育課程編成・実施の方針【カリキュラムポリシー】…… 4
学生支援の方針…… 6
履修の心得
Ⅰ．授業時間…… 9
Ⅱ．履修登録制度…… 9
Ⅲ．履修辞退制度……10
Ⅳ．成績評価……10
Ⅴ．筆答試験……11
Ⅵ．レポート……14
Ⅶ．ＧＰＡ……14
教育課程
教育課程編成の方針……17
教育課程（修士課程）
修士学位取得のためのガイドライン……21
教育課程
修士課程 国際文化学専攻 カリキュラム、授業科目及び修了要件 ……25
修士課程 グローバルスタディーズ専攻 授業科目及び修了要件 ……27
修士課程 言語コミュニケーション専攻 授業科目及び修了要件 ……29
アジア・アフリカ総合研究プログラム 科目一覧及び修了要件 ……31
修士論文の提出要領について……33
９月修了の取扱いについて ……34
「長期履修学生制度」について ……35
修士課程の中間発表・最終発表におけるレジュメの作成方法……36
「京都・宗教系大学院連合」単位互換 ……37
教育課程（博士後期課程）
博士学位取得のためのガイドライン……39
教育課程
授業科目……44
博士後期課程　修了要件……44
課程修了の認定……44
学位の授与……44
国際学研究科 博士後期課程 研究指導要領 ……45
博士論文の提出要領について……46
「長期履修学生制度」について ……47
特別専攻生・研究生
特別専攻生・研究生について……49
諸規程
龍谷大学大学院 国際学研究科 学位論文に関する規程 ……51
龍谷大学大学院 国際学研究科 学位論文審査委員選定基準に関する申し合わせ ……56
龍谷大学大学院国際学研究科生の学部科目履修に関する内規……57
国際学研究科の大学院学則第９条の２に定める既修得科目の取り扱いに関する内規 ……58
大学院国際学研究科特別専攻生規程……59
「研究生」に関する規程 ……60
専任教員プロフィール……63
学修生活
Ⅰ．窓口事務・保健管理センター・障がい学生支援室…… 119
Ⅱ．授業等の休講措置に関する取扱基準…… 120
Ⅲ．学籍の取り扱い…… 121
Ⅳ．留学…… 125
Ⅴ．通学について（自転車・バイク・自動車）…… 126
Ⅵ．こんな場合には？ Ｑ＆Ａ …… 127
付録
深草学舎見取図…… 132
時間割控…… 133

＜国際学部教務課からのお知らせ＞

1．大学から研究科院生の皆さんへの連絡等については、特別な場合を除き、ポータルサイト・manaba コースなどにて行います。必ず確認するようにして下さい。
2．原則として在学生の方からのメール、電話による質問等は受け付けておりません。カリキュラム等で質問のある場合は学生証を持参のうえ、教務課にお越し下さい。

龍谷大学の「建学の精神」

龍谷大学の「建学の精神」は「浄土真宗の精神」です。

浄土真宗の精神とは、生きとし生けるもの全てを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願に他なりません。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみをつくり出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

本学は、阿弥陀仏の願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成します。このことを実現する心として以下 5 項目にまとめています。これらはみな、建学の精神あってこその心であり、生き方です。

・すべてのいのちを大切にする「平等」の心
・真実を求め真実に生きる「自立」の心
・常にわが身をかえりみる「内省」の心
・生かされていることへの「感謝」の心
・人類の対話と共存を願う「平和」の心

龍谷大学の教育理念・目的

建学の精神に基づき「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成する。

学部・研究科の「教育理念・目的」と 3 つの方針（「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」「入学者受入れの方針」）策定の基本方針

龍谷大学の教育理念・目的を実現するために設置された学部・研究科は、広く社会に貢献できる教養教育・専門教育及びより高度な専門教育・研究を体系的かつ組織的に行うにあたり、各学問分野の独自性を活かしつつ、社会の要請等を踏まえた教育理念・目的を掲げ、学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針を一体的に策定する。

国際学研究科の教育理念・目的

建学の精神に基づいて、グローバル化の加速的な進展のなかで、現在の国際社会が直面している諸課題・諸現象と批判的に向き合い、多様な文化が共生する社会の実現に向けて、国際的な舞台でリーダーシップを発揮し活躍できる高度専門職業人・実務家・研究者の養成を目的とする。

学位授与の方針【ディプロマポリシー】

国際学研究科では、以下のようなディプロマポリシーを掲げて、学位授与をおこなう。

【修士課程】

1．修士課程国際文化学専攻

大学院学生に保証する基本的な資質

＜備えるべき能力＞

・日本、共生社会、言語文化、宗教文化、芸術・メディアなどの研究内容について国際的な視野の中で位置づけたうえで理解することができる。
・相互依存が著しく進む現代世界が直面する新たな諸現象・諸問題を、文化の視座から批判的に考察することができる。
・高度な専門的知識と外国語能力を発揮して解決方法を探求することができる。

＜将来発揮することが期待される能力＞

・国際文化学の総合的知識や専門分野の知識を、多角的に活用できる。
・研究を通じて得られた知見を高度の専門的職業人･実務家として発信し、社会に貢献することができる。

学位授与の諸要件

・修士課程に 2 年以上在学すること。
・正規の授業を受け、所定の科目について 30 単位以上を修得すること。
・必要な研究指導を受けたうえ、修士論文を提出してその審査および最終試験に合格すること。

2．修士課程グローバルスタディーズ専攻

大学院学生に保証する基本的な資質

＜備えるべき能力＞

・グローバル化が急速に進展しつつある現代世界を、幅広い視点から複合的かつ批判的に理解することができる。
・特定の課題について既存の研究と比較しながら研究テーマを設定し、その解決方法を探求することができる。

＜将来発揮することが期待される能力＞

・高度な専門的知識と外国語能力を発揮して、現代の国際社会が抱える諸問題の解決方法を探求することができる。
・研究を通じて得られた知見を高度の専門的職業人・実務家として、国際的な舞台でリーダーシップを発揮し提言することで社会的に重要な役割を担うことができる。

学位授与の諸要件

・修士課程に 2 年以上在学すること。

・正規の授業を受け、所定の科目について 30 単位以上を修得すること。
・必要な研究指導を受けたうえ、英語で修士論文を提出してその審査および最終試験に合格すること。

3．修士課程言語コミュニケーション専攻

大学院学生に保証する基本的な資質

＜備えるべき能力＞

・グローバル化が急速に進展する社会における言語およびコミュニケーションの意義や役割を批判的に理解することができる。
・言語コミュニケーションに関する高い専門的知識や英語運用能力を身につけている。

＜将来発揮することが期待される能力＞

・高い語学力・対話力をもってリーダーシップを発揮し、国内外の社会に貢献することができる。
・高度の専門的職業人・実務家として相互理解や多文化理解の推進に貢献することができる。

学位授与の諸要件

・修士課程に 2 年以上在学すること。
・正規の授業を受け、所定の科目について 32 単位以上を修得すること。
・必要な研究指導を受けたうえ、英語で修士論文を提出してその審査および最終試験に合格すること。

【博士後期課程】

1．博士後期課程国際文化学専攻

大学院学生に保証する基本的な資質

＜備えるべき能力＞

・変化の著しい国際社会を、文化の視点を軸として複合的かつ批判的に理解することができる。
・既存の研究と比較して自らの研究テーマを適切に位置づけ、特定の課題についての独自の解決方法を内外に向かって提言することができる。
・多様化する国際社会が抱える諸課題を文化の観点から批判的に理解したうえで独自の視点から説得力ある議論を展開することができる。

＜将来発揮することが期待される能力＞

・高い職業的倫理観と責任感を持って、自立した研究者あるいは高度の専門的職業人として社会に貢献することができる。
・語学力、文献検索能力、フィールドワークの能力などを活かして、日本や世界において活躍することができる。

学位授与の諸要件

・博士後期課程に 3 年以上在学すること。
・所定の科目について 12 単位以上を修得すること。
・必要な研究指導を受けたうえ、博士論文を提出してその審査及び最終試験に合格すること。

2．博士後期課程グローバルスタディーズ専攻

大学院学生に保証する基本的な資質

＜備えるべき能力＞

・グローバル化が急速に進展しつつある現代世界を、幅広い視点から複合的かつ批判的に理解することができる。
・既存の研究と比較して自らの研究テーマを適切に位置づけ、特定の課題についての独自の解決方法を内外に向かって提言することができる。
・先行研究によっても十分解明されていない研究テーマについて、独自の視点から説得力ある議論を英語にて展開することができる。

＜将来発揮することが期待される能力＞

・高い職業的倫理観と責任感を持って、自立した研究者あるいは高度の専門的職業人として社会に貢献することができる。
・グローバル社会が抱える諸課題に対して独自の視点から説得力ある議論を英語で展開することができる。

学位授与の諸要件

・博士後期課程に 3 年以上在学すること。
・所定の科目について 14 単位以上を修得すること。
・必要な研究指導を受けたうえ、英語で博士論文を提出してその審査及び最終試験に合格すること。

教育課程編成・実施の方針【カリキュラムポリシー】

国際学研究科の各専攻は、下記のようなカリキュラムポリシーを掲げて、教育課程を編成し実施する。

【修士課程】

1．国際文化学専攻

・国際文化研究の多様な側面を理解し、その中で自分の方法論を確立していくために、「国際文化学」「調査方法論」を必修として配置する。
・1 年次から演習を配置し、指導に当たる主・副となる教員の指導を受けることで、研究遂行にあたっての基礎知識を修得し、自らの研究テーマに関わる分析力・考察力を養い、修士論文を作成する。
・日本、共生社会、言語文化、宗教文化、芸術・メディアに関連する専門科目を設ける。これらの専門科目においては、各自の研究テーマに必要な語学能力、文献探索能力、フィールドワークの能力などを身に付けられるような授業内容とする。

2．グローバルスタディーズ専攻

・グローバルな舞台で活躍できる人材を育成するために、全ての授業は英語にて提供される。1 年次科目として「Introduction」ならびに「GS Research Methods」を配置し、各自の研究がどのような意義を持ち、

またその遂行にはどのような方法論を選択する必要があるかを修得する。

- 1 年次から演習を配置し、主・副担当教員からの助言と指導をもとに、研究遂行にあたって必要な基礎知識を修得し、自らの研究テーマに関わる分析力・考察力を養い、英語で修士論文を作成する。
- 既存の国際学部グローバルスタディーズ学科に対応し、グローバルスタディーズを「グローバリゼーション」、「コミュニケーション」、「エシックス」の 3 領域からなる研究分野であると定義する。そのうえで、これらの領域が複合的に重なりあう部分に呼応する研究テーマをそれぞれの大学院生が設定し、それらの課題を広さと深さを併せ持つ形で探求するような授業内容とする。

3．言語コミュニケーション専攻

- 1 年次には「第二言語習得」に関わる質的・量的調査法に関わる基礎科目を必修として配置し、研究方法に関する基礎を修得する。
- 「通訳・翻訳」、「英語教育学」、「応用言語学」の 3 領域に関わる重点科目を系統的に配置し、言語教育の研究に関わる理論的・実践的基盤を培う。
- 1 年次から演習を必修として配置し、主・複指導教員の指導・助言を受けながら、研究を遂行する専門的知識や方法を修得し、自らの研究テーマに関わる分析力・考察力を養い、英語で修士論文を作成する。

【博士後期課程】

1．国際文化学専攻

- 演習指導を通じて、専門的知識をさらに深めるのみならず、複合的・学際的視点を用いて、設定したテーマにアプローチできるための幅広い学術的研鑽を積み重ねる。
- 研究科内外での学会や研究会において発表を行い、内外の研究者との交流を深めるとともに、将来自立した研究者となるために必要なさまざまな能力を構築する。
- 先行研究によっても十分解明されていない論点について学術的にも貢献できるように、研究の射程ならびに研究の方法論について独自の視点をもてるようにする。
- 1 年次から演習を配置し、主･副担当教員からの助言と指導をもとに、自らの研究テーマに関わる分析力･考察力を養い、博士論文を作成する。

2．グローバルスタディーズ専攻

- 演習指導を通じて、専門的知識をさらに深めるのみならず、人文学の視座を中心にした複合的・学際的視座から、設定したテーマにアプローチできるための幅広い学術的研鑽を積み重ねる。
- 研究科内外での学会や研究会において発表を行い、内外の研究者との交流を深めるとともに、将来自立した研究者となるために必要なさまざまな能力を構築する。
- 1 年次に「PhD Research Seminar」を配置し、研究成果を効果的に発信するために必要なスキルと方法を学び、自立した研究者となるための能力を涵養する。
- 1 年次から演習を配置し、主･副担当教員からの助言と指導をもとに、自らの研究テーマに関わる分析力･考察力を養い、英語で博士論文を作成する。

学生支援の方針

本学では、修学支援、学生生活支援、キャリア支援の 3 つの方針に基づき、すべての学生に対して支援を行う。

修学支援の方針

本学における修学支援は、全ての学生に等しく教育機会を提供することを目的とし、学生一人ひとりが学修を円滑に進め、継続していくことができるよう、次のような支援を中心に総合的な取り組みを行う。

- 修学に関する相談体制を整備し、教職員が相互に連携して相談・指導に取り組む。また、必要に応じて補習・補充教育を実施する。
- 留年者及び休・退学者の状況把握と分析を行い、関係する各組織が連携して適切な対応策を講じる。
- 障がいのある学生に対して実効性ある支援体制を整備し、それぞれの学生に適した学修環境を実現する。
- 本学独自の奨学金制度を整備し、意欲ある学生に学ぶ機会を提供する。

学生生活支援の方針

本学における学生生活支援は、学生の人権尊重を基本とし、学生一人ひとりが心身ともに健康で、かつ安全で安定した学生生活を送るために必要な基盤を整備するとともに、豊かな人間性を育み、自らが主体的に活動できるよう、「生活支援」「経済支援」「課外活動支援」を柱とした総合的な取り組みを行う。

「生活支援」は、保健管理、事件・事故防止、相談等の学生生活に係わる環境を整備する。

「経済支援」は、学生の家計急変や社会環境の変化等に応じた奨学金、貸付金等の経済的な支援を行う。

「課外活動支援」は、学生の人間的成長に寄与するため、学生が自主的に課外活動・社会活動に参加できるための環境を整備する。

キャリア支援の方針

本学におけるキャリア支援は、学生の社会的・職業的自立に向けて必要となる知識、能力、態度を育むとともに、学生の職業観･勤労観を醸成し、主体的な進路選択、希望する進路の実現を目的として、「キャリア教育」と「進路・就職支援」を二本柱として、全学的および体系的に取り組む。

「キャリア教育」は、学部と各組織が連携し、正課教育および正課外教育を通して、社会で必要となる基礎的･汎用的能力を育成するとともに、職業観・勤労観を醸成し、生涯を通した持続的な就業力が身につくように取り組む。

「進路・就職支援」は、学生が自立し、主体的な進路選択・就職決定ができるよう、多様な支援プログラムを実施するとともに、face to face の面談を重視し、学生の個々の状況を踏まえたきめ細かな支援を行う。

履　修　の　心　得

履修の心得

Ⅰ．授業時間

本学における 1 回の授業時間は 90 分です。また、それぞれの授業時間を「講時」といいます。年間を通して、各講時の時間帯は次のとおりです。※ 2021 年度より全学舎で統一した授業時間割に変更されました。

＜授業時間＞

	1 講時	2 講時	3 講時	4 講時	5 講時	6 講時	7 講時
開始時刻	9：15	11：00	13：30	15：15	16：55	18：35	20：10
終了時刻	10：45	12：30	15：00	16：45	18：25	20：05	21：40

Ⅱ．履修登録制度

履修登録とは、その学期に履修しようとする科目の授業を受けるための手続きです。この登録をしていなければ、仮にその授業に出席していたとしても、試験を受けることや単位認定を受けることはできません。履修登録は、学修計画の基礎となるわけであり、登録が有効に行われるよう**すべて自分の責任において取り組まなければなりません**。また、必ず指導教員等とも相談し、最適な学修計画をたててください。

（1）履修登録の意味

履修登録は、自らの学修計画に従ってその学期に自分が履修しようとする授業を届出る手続きであり、みなさんの学修計画の出発点となるものです。なお、履修登録をしていない科目は履修できません。

（2）履修登録の方法

セメスター制により履修登録は第 1 学期、第 2 学期の年 2 回行われます。国際学研究科（大学院）では第 1 学期履修登録期間に、第 1 学期開講科目に加え、第 2 学期開講科目についても登録（通年分の登録）してください。第 2 学期履修登録では、第 1 学期に履修登録した第 2 学期開講科目の修正や、追加する第 2 学期開講科目の登録をおこないます。

（3）履修計画書の提出

第 1・2 学期に履修登録した開講科目について、学修計画に沿った履修登録となっていることを確認するため、「履修計画書」を提出してください（指導教員による確認が必要です）。

（4）履修登録の期間

履修登録の期間は以下の日程です。

学期	履修登録期間
第 1 学期（前期）	2023 年 4 月 6 日（木）12:00 ～ 4 月12日（水）16:00
第 2 学期（後期）	ポータルサイトで確認をしてください。

※　スケジュールに変更が生じた場合は別途ポータル等で掲示します。

Ⅲ．履修辞退制度

（1）「履修辞退制度」とは

「履修辞退制度」とは、受講者が授業を受けてみたものの、『授業内容が学修したいものと著しく違っていた場合』や『受講者自身が授業について行ける状況にまったくない場合』など、やむを得ない理由がある場合に自分自身の判断で履修を辞退することができる制度のことです。

したがって、受講者のみなさんはこの「履修辞退制度」を安易に利用するのではなく、「履修要項」および「シラバス」を熟読して学修計画をしっかりと立て、慎重な履修登録をするよう十分留意する必要があります。また、大学院では各自の研究計画に影響をおよぼすこともあるため、必ず指導教員とも相談してください。

（2）履修辞退による成績評価のあり方

本学が設定する履修辞退の申出期間中に辞退を申し出た場合、当該授業科目の成績評価は行いません。したがって、履修辞退した科目は平均点や GPA の計算対象から除外されるとともに、成績証明書への記載対象からも除外されます。なお、各学期に配付される個人別の成績表には履修履歴および履修辞退履歴として「J」の記号が記載されます。

（3）履修辞退できない科目

カリキュラムの関係において、**“必修としている授業科目”は「履修辞退制度」の対象としていません（＝履修辞退を認めない）**。履修登録の際、必ず確認してください。

（4）履修辞退の申出期間

履修辞退の申出期間は以下の日程です。

学期	履修辞退受付期間
第 1 学期（前期）	2023 年 5 月 8 日（月）9:00 ～ 5 月12日（金）16:00
第 2 学期（後期）	ポータルサイトで確認をしてください。

※　上記期間において申し出ができない理由を有する学生については、事前に国際学部教務課窓口に相談してください。

※　スケジュールに変更が生じた場合は別途ポータル等で掲示します。

（5）履修辞退の申し出方法

上記、履修辞退の申出期間にポータルサイトの「Web 履修辞退申請」から履修辞退の手続きをしてください。

Ⅳ．成績評価

成績評価は、個々の科目について定められている単位数に相当する量の学修成果の有無やその内容を評価するために行われます。成績評価は、一般的に 100 点満点法で評価され、60 点以上の評価を得られた場合に所定の単位が認定されます。

（1）成績評価の方法

成績評価は、おおよそ次の 4 種類の方法があり、これらのうちのひとつまたは複数を組み合わせて評価されます。各科目の成績評価方法は、その科目の特性に応じて授業担当者によって定められています。その

内容はシラバスに明示されているので参照してください。

① 筆答試験による評価

② レポート試験による評価

③ 実技試験による評価

④ 授業への取組状況や小テストなど、上記試験による評価の他に、担当者が設定する方法による評価

（2）成績評価の基準

① 成績評価は、100 点を満点とし 60 点以上を合格、それを満たさない場合は不合格とします。

② 一度合格点を得た科目（＝既得科目）は、いかなる事情があっても、再度履修して成績評価を受けることはできません。

③ 履修登録した科目の試験を受験しなかった場合、その試験の評価は 0 点となります。ただし、この場合でも、試験による評価以外に授業担当者が設定する方法により評価される場合があります。

④ 段階評価と評点の関係は、次のとおりとします。

段階評価と評点
S（90 ～ 100 点） A（80 ～ 89 点） B（70 ～ 79 点） C（60 ～ 69 点）

上記の段階評価以外に、実習科目はG（合格）・D（不合格）で評価する場合があります。単位認定された科目の場合はN（認定）となります。

⑤ 学業成績証明書は、すべて段階評価で表示し、不合格科目は表示しません。

⑥ 学業成績表は、第 1 学期（前期）分を 9 月下旬、第 2 学期（後期）分を 3 月下旬にポータルサイトよりダウンロードできます。日程の詳細は、別途 manaba、ポータルサイト等でお知らせします。

（3）成績疑義

成績評価について疑義がある場合は、指定された申請方法にもとづいて、申請期間内に国際学部教務課窓口に提出してください。**授業担当者に直接申し出てはいけません**。

なお、申出期間および申請方法については、別途ポータルサイト等で確認してください。

Ⅴ．筆答試験

（1）筆答試験の時期

筆答試験をその実施時期によって分類すると、次の 2 種類になります。

ア 定期試験

個々の科目について定められている授業期間の終了時期（通常の場合は学期末）に実施する筆答試験をいう。

イ 追試験

定期試験欠席者のために、定期試験終了後に改めて実施する筆答試験をいう（追試験の項を参照のこと）。

（2）受験資格

次の各号に定める条件をすべて備えていないと受験資格を失い、受験することができなくなる恐れがあります（追試験については、追試験の項を参照のこと）。

ア その科目について、有効な履修登録がなされていること。

イ 定められた学費を納入していること。

ウ　授業に出席していること。原則として 3 分の 2 以上の出席があること。
エ　授業担当者の求める諸条件を満たしていること。

（3）筆答試験に際しては、次のことを守らなければなりません。
ア　指定された試験場で受験すること。
イ　試験開始 20 分以上の遅刻および 30 分以内の退室は許されない。
ウ　学生証を携帯すること。
エ　学生証は写真欄が見えるよう机上通路側に置くこと。
万一、学生証を忘れた場合には、国際学部教務課窓口で「試験用臨時学生証」の交付を受けておくこと。
オ　答案（解答）用紙が配付されたら直ちに年次、学籍番号、氏名を「ペンまたはボールペン」で記入すること。
カ　参照を許可されたもの以外は、指示された場所におくこと。
［担当教員の指示がない限り、電子機器等の使用を認めない。］
［持ち込み条件が「全て可」であっても、携帯電話、スマートフォン、情報端末等の使用は一切認めない。］
キ　試験開始前に携帯電話等の電源を切り、かばんの中に入れること。
ク　答案（白紙答案を含む）を提出しないで退室しないこと。

（4）次の場合は、その答案は無効となります。
ア　無記名の場合
イ　指定された場所に提出しない場合
ウ　試験終了後、試験監督者の許可なく氏名を書き直した場合
エ　受験態度の不良な場合

（5）筆答試験における不正行為
ア　受験中に不正行為を行った場合は、その学期に履修登録をした全科目の単位認定を行いません。さらに、不正行為の程度により、学則に定める懲戒を加えることがあります。
イ　次に該当する場合は、これを不正行為と見なします。
①　私語や態度不良について注意を与えても改めない場合
②　監督者の指示に従わない場合
③　身代わり受験を行ったとき、または行わせた場合
④　カンニングペーパー等を所持していた場合
⑤　携帯電話、スマートフォン、情報端末等をかばん等にしまっていない場合
⑥　許可された以外のものを参照した場合
⑦　机上等への書き込みをしていた場合
⑧　許可なくして物品や教科書、ノート類を貸借した場合
⑨　答案用紙の交換および見せ合いをした場合
⑩　その他、①～⑨に準じる行為を行った場合

（6）追試験
ア　追試験の受験資格
追試験は次の各号のいずれかの理由により定期試験を欠席し、所属学部が認めると受験することができます。
①　病気、怪我又は試験時における体調不良等

② 親族（原則として 3 親等まで）の葬儀への参列
③ 公認サークルの公式戦への選手としての参加
④ 交通機関の遅延等
⑤ 交通事故、災害等
⑥ 就職活動（説明会、筆記試験、面接等）
⑦ 資格試験（公務員試験、公的資格試験等）の受験
⑧ 単位互換科目の試験受験
⑨ インターンシップ実習（協定型インターンシップ、大学コンソーシアム京都インターンシップ・プログラム）又は博物館実習への参加
⑩ 裁判員（候補者）への選任
⑪ その他、研究科委員会が特に必要と認めた者

追試験受験希望者は、追試験受験願および欠席理由証明書（医師診断書、交通遅延証明書または事故理由書、就職試験等による場合は会社あるいは団体が発行する証明書等）をその科目の試験日を含めて 4 日以内（土・日・祝日は含めない。ただし、土曜日が試験日の場合は試験当日を含む 4 日以内）に国際学部教務課窓口に提出しなければなりません。

交通遅延証明書のうち、Web 発行によるものは本人が乗車したことを証明するものではありませんので、欠席理由の証明書として、本学では取り扱いできません。

交通遅延証明書は従来通り、「本人が乗降した際に各駅にて受け取ることができるもの」のみを証明書として取り扱います。

なお、医師の診断の結果、インフルエンザなどの流感により外出が制限され、定期試験を受験できなかった場合は、追試験申込期限内に国際学部教務課まで連絡してください（電話による連絡可）。

イ 追試験の受験料は、1 科目 1,000 円です。
ウ 実技・実習科目、レポート試験による科目、特別に指定された科目については、原則として追試験は行いません。
詳細については、定期試験前にポータルサイトまた掲示等にて確認してください。

（7）筆答試験時間

筆答試験時間割は、原則として試験の 14 日前にポータルサイトまたは掲示により発表します。試験時間は、次のとおりです。**通常の授業時間帯と異なりますので、注意してください**。

講時	開始時刻	終　了　時　刻
1 講時	9：15	10：15
2-A 講時	10：45	11：45
2-B 講時	12：15	13：15
3-A 講時	13：45	14：45
3-B 講時	15：15	16：15
4 講時	16：45	17：45
5 講時	18：15	19：15
6 講時	19：30	20：30
7 講時	20：45	21：45

（注 1）科目の特性によって、試験時間を変更することがあります。

Ⅵ．レポート・論文提出時の注意

（１）次の各項目に注意して提出してください。

ア　レポートは授業担当者の指示に従って提出すること。（掲示によっても発表を行います）

イ　レポートは指示されたところに提出し、郵送の場合は宛名を確認のうえ、必ず「書留」で発送すること。

ウ　事故を防ぐため、事情の如何を問わず、国際学部教務課では一切取扱いません。

エ　提出期限は厳守すること。（期限を超過したものは受理しません）

オ　その他、指示に従わない場合は無効となります。

（２）レポートの用紙・規格等は次のとおりです。

用紙の大きさ	A４版	上部余白	25～40mm
１頁の文字数	600字	下部余白	20～40mm
１行の文字数	30字	左側余白（製本時綴じしろ）	25～40mm
１頁の行数	20行	右側余白	10～25mm

※修士論文の提出は33ページ以降の「修士論文提出要領について」に従ってください。

（３）学期中に提出されるすべてのレポート（修士論文含む）に剽窃等の不正行為が認められた場合は、当該レポートを無効扱いとし、その学期に履修登録をした全科目の単位認定をおこないません。さらに、不正の程度により、学則に定める懲戒を加えることがあります。

Ⅶ．ＧＰＡ（修士課程のみ）

GPAとは、Grade Point Average（成績加重平均値）のことであり、従来の修得単位数による学修到達度判定に加え、どの程度のレベルで単位を修得したかを一目で表すものとして考えられたものです。

GPAは、各教科の評価点（100点満点）を次表のように換算しなおし、その合計を登録科目の総単位数で割って算出します。

例えば、リサーチセミナーA（２単位）80点、演習Ⅰ（３単位）75点、国際文化学（２単位）88点、日本研究A（２単位）40点を登録科目の結果とした場合、GPAは次のように計算されます。

$$\mathrm{GPA} = \frac{(3 \times 2) + (2 \times 3) + (3 \times 2) + (0 \times 2)}{(2 + 3 + 2 + 2)} = \frac{18}{9} = 2.00$$

$$\mathrm{GPA} = \frac{\sum(\text{科目のグレイドポイント} \times \text{単位数})}{\sum(\text{科目の単位数})}$$

評　点	グレイドポイント
100～90点	4
89～80点	3
79～70点	2
69～60点	1
59点以下	0

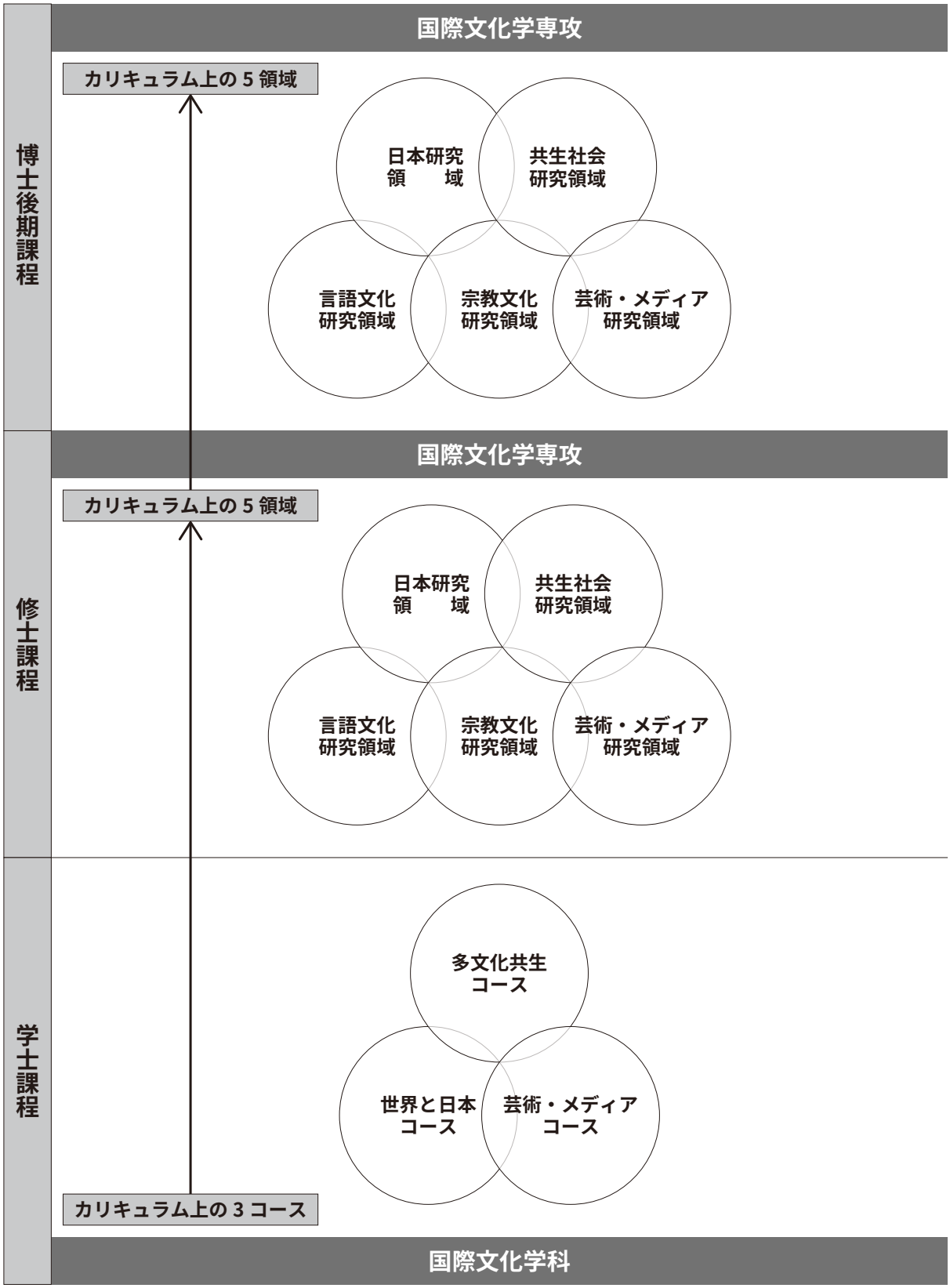
※随意科目、履修辞退した科目については、ここでいう登録科目には含みません。

※成績を評価点（100点満点）で評価しない科目は算入しません。

教　育　課　程

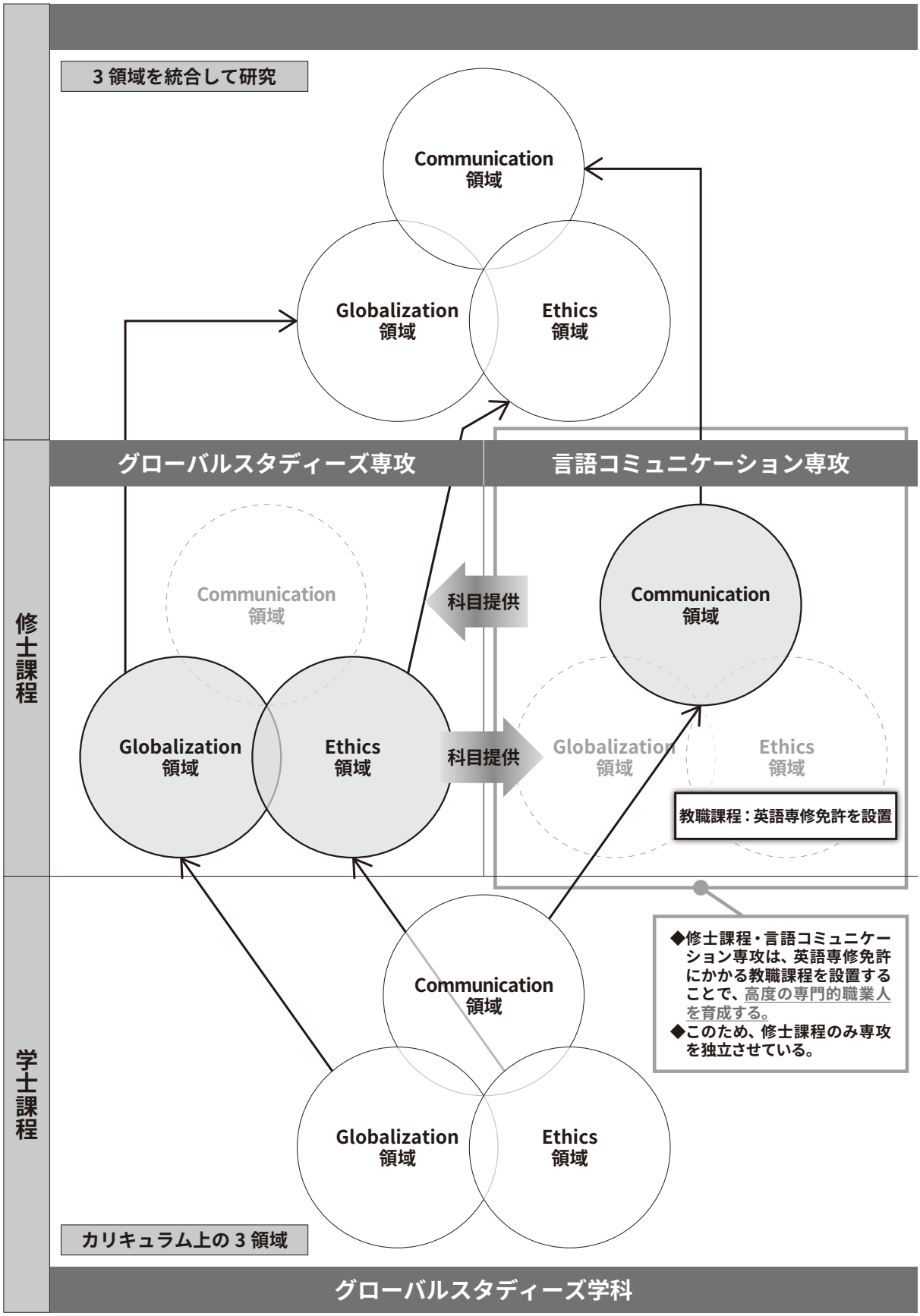
教育課程編成の方針

1．国際文化学系の課程編成



【注記】
○基礎となる学部（国際学部）から修士課程・博士後期課程まで、一貫した教学展開をおこなう。

2．グローバルスタディーズ系の課程編成



【注記】
○基礎となる学部（国際学部）における教育を基盤に、より高度で専門性を備えた人材を修士課程において育成する。
○特に、専修免許課程を併置する「Communication 領域」は、英語による言語コミュニケーションと教職人材の育成に専門特化することから、グローバルスタディーズ専攻から独立した言語コミュニケーション専攻を設置している。
○博士後期課程においては、3 領域すべてを敷衍した研究を行うことで多様で複眼的な視点を育むことを目的に一専攻としている。

教　育　課　程
（修士課程）

修士学位取得のためのガイドライン

1．国際学研究科（修士課程）で授与する学位

修士　国際文化学　＜ Master of Intercultural Communication ＞
　　グローバルスタディーズ　＜ Master of Global Studies ＞
　　言語コミュニケーション　＜ Master of Language and Communication ＞

2．修士課程学位授与までのプロセス (研究指導・審査スケジュール)

年次	セメスター	時期	内　　容	教員による指導・審査
1年次	1セメ	4月	入学式 履修説明会・履修登録指導期間 履修科目登録 履修計画書の提出 演習指導教員選定届の提出	3ポリシー、教育課程等の説明 教員による履修計画指導及び演習教員選定への助言 指導教員・副指導教員の選定
		6月	**研究題目届**の提出	研究指導計画書の策定・指導学生との共有
	2セメ	9月	履修科目修正登録	
		1月	**研究経過報告書**の提出	
2年次	3セメ	4月	履修科目登録／履修計画書の提出	(必要に応じて履修計画指導)
		5月	**修士論文計画書**の提出	研究指導計画書の策定・指導学生との共有
		学期中	修士論文中間発表	助言（指導教員・副指導教員・助言教員）
	4セメ	9月	履修科目修正登録	＜論文審査委員決定＞
		学期中	**修士論文最終発表（公開）**	助言（指導教員・副指導教員・助言教員）
		1月	**修士論文提出** **修士論文口述試験（公開）**	修士論文審査 ⇒修了判定
		2月	**優秀論文発表会（公開）**	
		3月	**学位授与式**	

※＿＿＿は研究科委員会にて承認が必要な書類

3．修士課程に関するスケジュール

（1）履修計画書【第 1 セメスター】

学年始の履修登録の際、当該年度に履修する授業科目について「履修計画書」を作成し、提出してください。

（提出期間）2023年度在 学 生：2023年 4 月 3 日（月）～ 4 月 7 日（金）
2023年 9 月入学生：2023年 9 月下旬（詳細日程は別途案内します）

⚠ アジア・アフリカ総合研究プログラムの履修を希望する学生は、第 1 セメスターの「履修計画書」提出時に「プログラム履修届」を提出してください。

（2）演習指導教員選定届【第 1 セメスター】

国際学研究科では、学生の多様なニーズに対応できるよう、主指導教員と副指導教員による複数指導体制を整備しています。学生の皆さんが多角的な視野から主体的に学びや研究を深めていけるよう指導教員が中心となりサポートしていきます。

第 1 セメスター履修登録の際に「演習指導教員選定届（主指導教員と副指導教員）」を提出してください。選定届を提出する前に必ず主・副指導を希望する当該教員に相談し、了承を得ておく必要があります。

※国際文化学専攻とグローバルスタディーズ専攻は、「演習指導教員選定届」に記入した教員が各セメスター（第 1 ～第 4 セメスター）の演習指導教員になります。

※言語コミュニケーション専攻は、第 1 ～第 4 セメスターのうち、計 3 セメスターを主指導教員が、計 1 セメスターを副指導教員が演習指導教員となります（主・副指導教員の演習担当時期（セメスター）は第 1 セメスター履修登録時に決定します）。

（提出期間）2023年 4 月入学生：2023年 4 月 3 日（月）～ 4 月 7 日（金）
2023年 9 月入学生：2023年 9 月下旬（詳細日程は別途案内します）

（3）研究題目届【第 1 セメスター】

修士課程における研究テーマについて、第 1 セメスターの定められた期間に「研究題目届」を提出してください。

（提出期間）2023年 4 月入学生：2023年 6 月 5 日（月）～ 6 月16日（金）
2023年 9 月入学生：2023年11月20日（月）～12月 1 日（金）

（4）研究経過報告書【第 2 セメスター】

修士課程における 1 年間の研究経過をまとめた「研究経過報告書」について、第 2 セメスター終了までの定められた期間に提出してください。

（提出期間）2023年 4 月入学生：2024年 1 月 9 日（火）～ 1 月19日（金）

（5）修士論文計画書【第 3 セメスター】

修士論文の作成にあたり、「修士論文計画書」（論文題目含む）を第 3 セメスターの定められた期間に提出してください。

（提出期間）2023年 4 月入学生：2024年 4 月中旬（詳細日程は別途案内します）
2023年 9 月入学生：2024年10月中旬（詳細日程は別途案内します）

（6）修士論文の提出【第 4 セメスター】

修士課程の修了に必要となる修士論文について、第 4 セメスターの定められた期日に提出してください。提出にあたっては「修士論文の提出要領について」（33 ページ）を必ず確認してください。

（提出期間）2023年 4 月入学生：2025年 1 月初旬（詳細日程は別途案内します）
2023年 9 月入学生：2025年 6 月中旬（詳細日程は別途案内します）

⚠ 上記の他、研究指導上必要となる提出書類については、授業担当教員や指導教員、国際学部教務課等から別途指示があります。

⚠ 提出期間や提出物等については、manaba、ポータルサイト等で必ず確認してください。内容等が変更となる場合は、manaba、ポータルサイト等を通じて周知します。

⚠ 休学歴のある学生は、上記の提出期間から休学期間を考慮の上、該当するセメスターで提出してください。

4．修士課程 修了要件

開講する授業科目の中から演習を含む必要単位を修得し、修士論文の審査に合格しなければならない。修了するために履修すべき科目については、教育課程（25 ページ以降）を参照のこと。

5．修士論文に求められる要件

修士論文は、広い視野に立つ精深な学識をそなえ、かつその専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を有することを立証するに足るものであることが必要で、2 年間広い視野のもとに専攻分野の研究をした成果に相当するものでなければならない（大学院学則第 12 条 4 項）。

とりわけ、以下の点に留意した修士論文が求められる。

1 ）学問的意義	論文のテーマに本研究科における学問的意義が認められること。またその意義についての認識が明確に示されていること。
2 ）問題設定の適切性	論文のテーマを探求するために適切な問題設定がなされていること。
3 ）論旨の一貫性	論文の記述が整合的で一貫しており、矛盾や混乱がないこと。
4 ）方法の妥当性	論文のテーマや問題設定にふさわしい研究方法が用いられていること。また文献資料・データの取り扱いや分析方法が適切であること。
5 ）先行研究の十分な検討	論文のテーマや問題設定にとって必要と考えられる先行研究・関連文献を十分に踏まえていること。
6 ）独創性・新規性	論文のテーマ、問題設定、研究方法、論旨、あるいは採り入れた文献やデータなどになんらかの独創性または新規性が認められること。
7 ）専門性	当該研究分野における専門的知識を修得し、活用したものと認められること。
8 ）学際性	本研究科における研究が有する広汎性を認識し、広く社会に向けて発信する姿勢が認められること。
9 ）資質・将来性の表出	論文の総体が、国際文化学の研究者またはこれを生かす職業人としての資質・将来性を感じさせるものとなっていること。
10）形式	文献引用などが適切に処理され、学術論文としての形式が整っていること。

6．学位審査（修士）の概要

修士課程を修了し、修士学位を得ようとする者は、所定の修了要件単位を修得することに加え、修士論文に関する以下の要件を満たさなければならない。

（1）修士論文の提出

指導教員から承認を受けた修士論文を研究科が指定する期日までに提出し、審査を受けなければならない。

（2）審査委員会

提出された修士論文は、研究科委員が定める審査委員によって審査される。審査委員は論文内容の検討をおこない、口述試験を実施し、審査結果を研究科が定める基準にもとづき評価する。

（3）修了判定

研究科委員会は審査委員からの報告を受け、修士課程の修了について議決し、議決を学長に報告する。報告を受けた学長は、大学院委員会において課程修了の可否について決定し、修了可とした者に修士学位を授与する。

7．修了判定後の修士論文の取扱いについて

修了が可となった修士論文については製本され、指導教員および研究科が保存するとともに、1 部を提出者に授与する。

8．関連規程

「国際学研究科　学位論文に関する規程」をはじめ、諸規程（51 ページ以降）を参照すること。

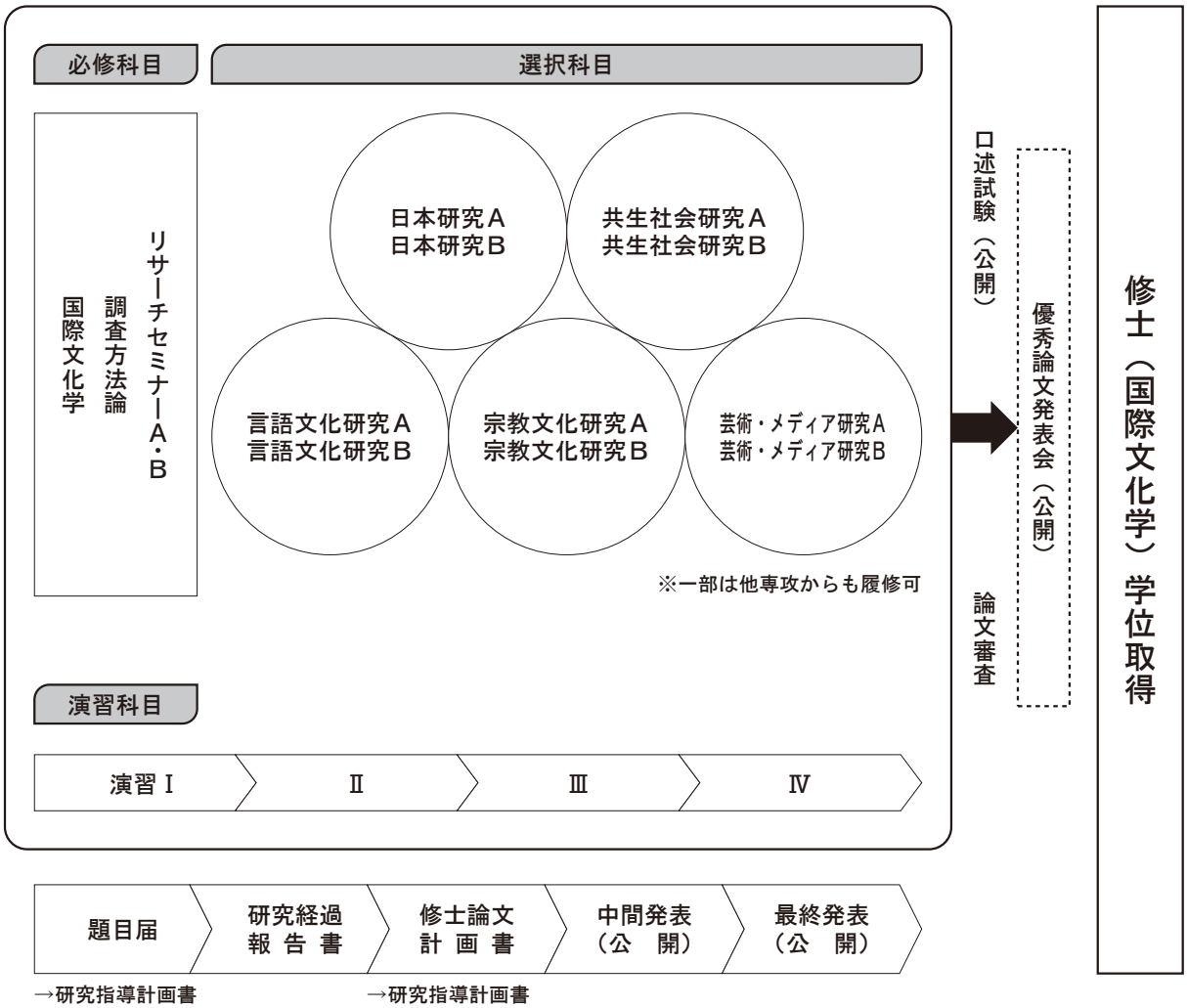
9．修士論文提出に関する各種様式

提出書類様式は、manaba course「国際学研究科・共通コース」のコースコンテンツからダウンロードしてください。

教育課程

1．修士課程 国際文化学専攻 カリキュラム、授業科目及び修了要件

【国際文化学専攻　カリキュラム概念図】



【国際文化学専攻　科目一覧】

科目区分		科目名	単位数	配当年次	必修・選択	講義形態	開講期	曜日	講時	担当者
基　礎		国際文化学	2	1	必修	講義	前期	火	1	徐光輝 / 松居竜五 / デブナールミロシュ
		調査方法論	2	1	必修	講義	後期	木	2	カルロスマリア / 八幡耕一 / 杉本バウエンスジェシカ
		リサーチセミナーA	2	1	必修	講義	前期	木	5	デブナールミロシュ
		リサーチセミナーB	2	1	必修	講義	後期	木	5	松居竜五
演　習		演習Ⅰ	3	1	必修	演習	前期	－	－	〈指導教員〉
		演習Ⅱ	3	1	必修	演習	後期	－	－	〈指導教員〉
		演習Ⅲ	3	2	必修	演習	前期	－	－	〈指導教員〉
		演習Ⅳ	3	2	必修	演習	後期	－	－	〈指導教員〉
応用	日本研究領域	日本研究A	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講
		日本研究B	2	1	選択	講義	後期	木	3	カルドネルシルヴァン / サルズジョナ / 松居竜五
	共生社会研究領域	共生社会研究A	2	1	選択	講義	前期	月	4	友永雄吾 / カルロスマリア
		共生社会研究B	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講
	言語文化研究領域	言語文化研究A	2	1	選択	講義	後期	火	5	泉文明 / 劉虹 / 史彤嵐 / 朴炫国
		言語文化研究B	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講
	宗教文化研究領域	宗教文化研究A	2	1	選択	講義	前期	木	2	嵩満也 / 早島慧
		宗教文化研究B	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講
	芸術・メディア研究領域	芸術・メディア研究A	2	1	選択	講義	後期	金	1	友永雄吾 / 杉本バウエンスジェシカ / 福山泰子 / 徐光輝
		芸術・メディア研究B	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講

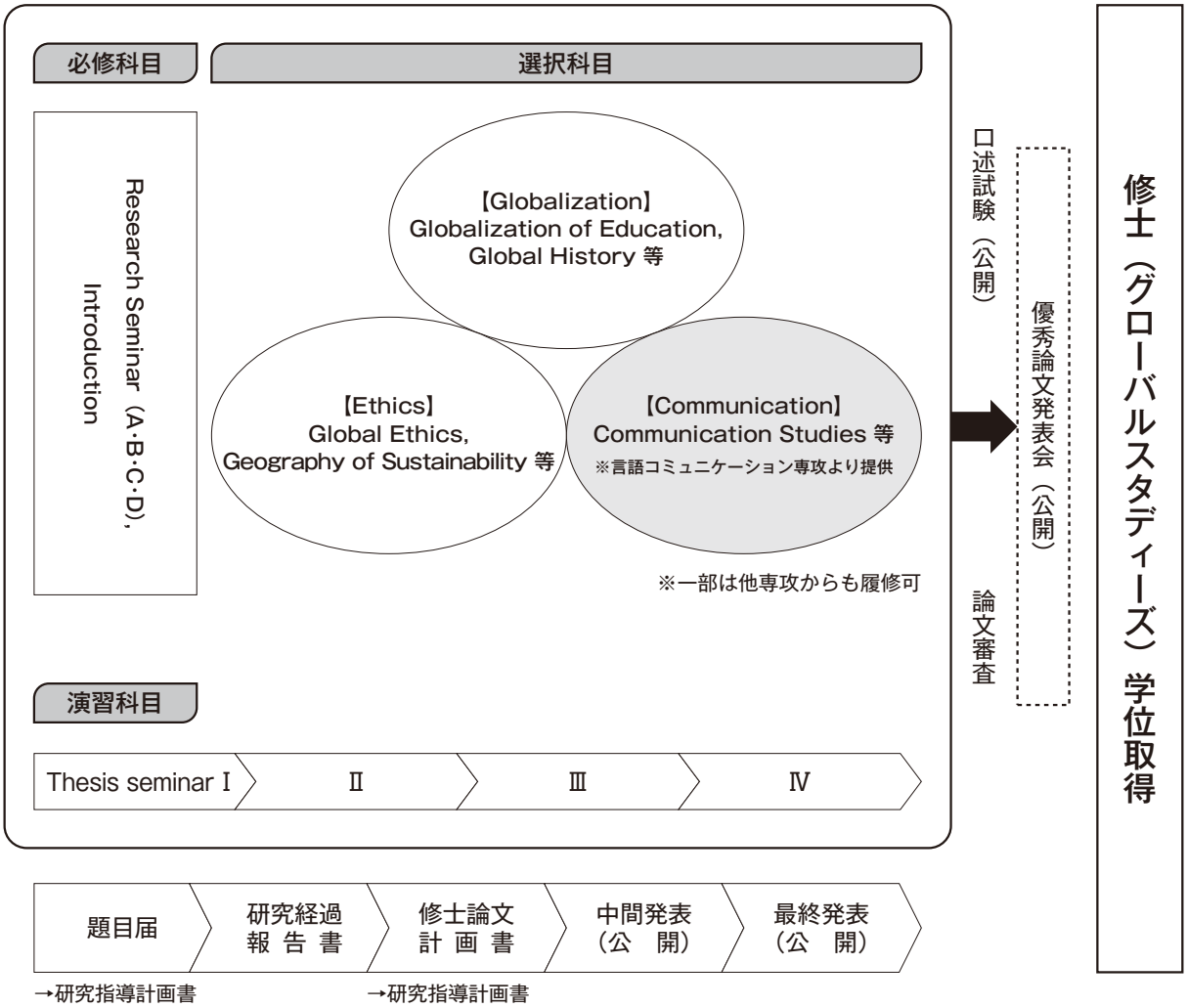
科目群	修了要件単位数	備　　考
基礎科目	8 単位必修	国際文化学、調査方法論、リサーチセミナー A・B〔各 2 単位〕
演習科目	12 単位必修	演習Ⅰ～Ⅳ（各 3 単位）
応用科目	10 単位以上	5 領域（日本研究、共生社会研究、言語文化研究、宗教文化研究、芸術・メディア研究）から 2 領域を選択して重点的に履修し（計 4 科目：8 単位）、その他の領域からの 1 科目（2 単位）も加えて、5 科目（10 単位）以上を修得する
修士論文	―――	修士論文を提出し、審査に合格すること。
合計	30 単位以上	

【他専攻の科目受講について】

国際文化学専攻の学生は、グローバルスタディーズ専攻、言語コミュニケーション専攻の応用科目についても履修することができます。成績評価がなされ、成績表には記載されますが、修了要件には算入されない随意科目として扱われます。

2．修士課程 グローバルスタディーズ専攻 授業科目及び修了要件

【グローバルスタディーズ専攻　カリキュラム概念図】



※専攻開講科目は基本的に英語による開講
修士論文は英語で執筆

【グローバルスタディーズ専攻　科目一覧】

科目区分		科目名	単位数	配当年次	必修・選択	講義形態	開講期	曜日	講時	担当者
基　礎		Introduction	2	1	必修	講義	前期	火	3	ブラドリーウィリアム
		Research Seminar A	2	1	必修	講義	前期	木	5	陳慶昌
		Research Seminar B	2	1	必修	講義	後期	木	5	斎藤文彦
		Research Seminar C	2	2	必修	講義	前期	―	―	―
		Research Seminar D	2	2	必修	講義	後期	―	―	―
演　習		Thesis Seminar Ⅰ	3	1	必修	演習	前期	―	―	＜指導教員＞
		Thesis Seminar Ⅱ	3	1	必修	演習	後期	―	―	＜指導教員＞
		Thesis Seminar Ⅲ	3	2	必修	演習	前期	―	―	＜指導教員＞
		Thesis Seminar Ⅳ	3	2	必修	演習	後期	―	―	＜指導教員＞
応用	Globalization 領域	Global History	2	1	選択	講義	前期	金	4	瀧口順也
		Globalization and Area Studies	2	1	選択	講義	後期	木	2	福山泰子
		Globalization and Social Development	2	1	選択	講義	前期	火	2	中根智子
	Ethics 領域	Global Ethics	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講
		Global Inequality and Sustainability	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講
		Globalization, Conflict and Justice	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講
	Communication 領域	Communication Studies	2	1	選択	講義	後期	木	1	ピゴットジュリアン
		Language, Power & Identity	2	1	選択	講義	前期	火	2	チャプルジュリアン
		Global Communicative Competence Studies	2	1	選択	講義	後期	水	1	チャプルジュリアン

【グローバルスタディーズ専攻　修了要件】

以下の全ての要件を満たすこと。

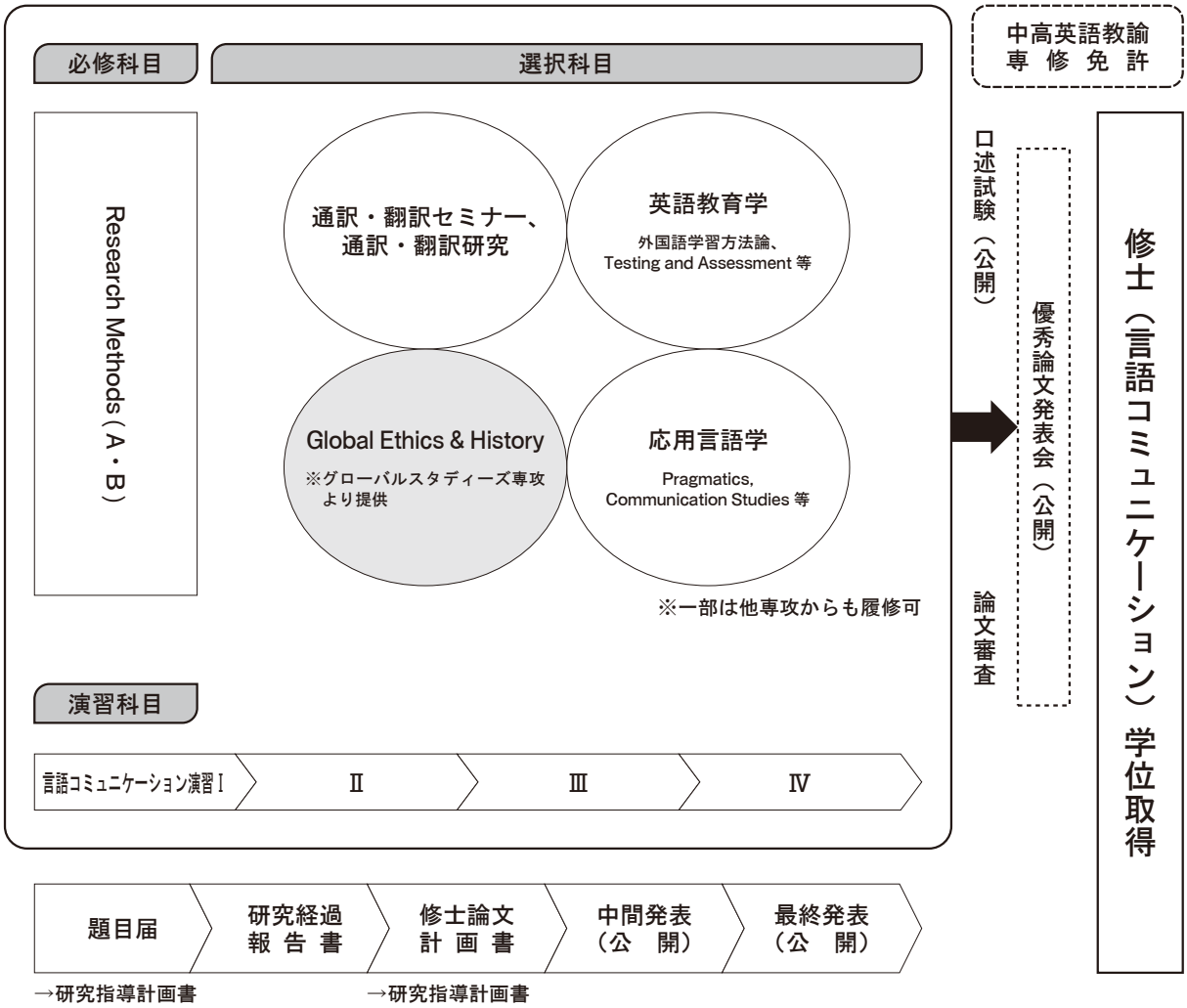
科目群	修了要件単位数	備　　考
基礎科目	10 単位必修	Introduction, Research Seminar A・B・C・D〔各 2 単位〕
演習科目	12 単位必修	Thesis Seminar Ⅰ～Ⅳ（各 3 単位）
応用科目	8 単位以上	Globalization, Ethics, Communication の各領域から 1 科目（2 単位）以上の履修を必修
修士論文	―――	修士論文を提出し、審査に合格すること。
合計	30 単位以上	

【他専攻の科目受講について】

グローバルスタディーズ専攻の学生は、国際文化学専攻、言語コミュニケーション専攻の応用科目についても履修することができます。成績評価がなされ、成績表には記載されますが、修了要件には算入されない随意科目として扱われます。

3．修士課程 言語コミュニケーション専攻 授業科目及び修了要件

【言語コミュニケーション専攻　カリキュラム概念図】



※専攻開講科目は日英または英語による開講
修士論文は英語で執筆

【専修免許状取得条件】

専修免許状（中学・高校）取得の条件は、「言語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ」を除く科目群から合計24単位を取得することです。

専攻の修了要件を満たすことで、自動的に専修免許状取得の条件も満たすことになります。

申請の手続は別途案内をしますので、ポータルサイトのお知らせを確認してください。

【言語コミュニケーション専攻　科目一覧】

科目区分	科目名	単位数	配当年次	必修・選択	講義形態	開講期	曜日	講時	担当者
基　礎	Research Methods A	2	1	必修	講義	前期	火	2	松村省一
	Research Methods B	2	1	必修	講義	前期	金	4	長尾明子
演　習	言語コミュニケーション演習Ⅰ	2	1	必修	演習	前期	－	－	＜指導教員＞
	言語コミュニケーション演習Ⅱ	2	1	必修	演習	後期	－	－	＜指導教員＞
	言語コミュニケーション演習Ⅲ	2	2	必修	演習	前期	－	－	＜指導教員＞
	言語コミュニケーション演習Ⅳ	2	2	必修	演習	後期	－	－	＜指導教員＞
応　用	通訳・翻訳研究 A	2	1	選択	講義	前期	水 金	1 2	瀧本眞人
	通訳・翻訳研究 B	2	1	選択	講義	後期	水	1	瀧本眞人
	日英通訳・翻訳研究	2	1	選択	講義	前期	金	3	瀧本眞人
	通訳・翻訳セミナー	2	1	選択	講義	後期	金	3	瀧本眞人
	Psychology and Language Learning	2	1	選択	講義	後期	木	3	平塚貴晶
	外国語学習方法論	2	2	選択	講義	後期	金	1	長尾明子
	言語政策論	2	2	選択	講義	前期	金	2	長嶺寿宣
	Language Testing and Assessment	2	2	選択	講義	後期	火	2	松村省一
	Pragmatics in Language Learning and Teaching	2	1	選択	講義	後期	火	1	松村省一
	Second Language Teacher Education	2	1	選択	講義	前期	木	3	平塚貴晶
	Communication Studies	2	1	選択	講義	後期	木	1	ピゴットジュリアン
	Language, Power & Identity	2	1	選択	講義	前期	火	2	チャプルジュリアン
	Global Communicative Competence Studies	2	1	選択	講義	後期	水	1	チャプルジュリアン
	Global History	2	1	選択	講義	前期	金	4	瀧口順也
	Global Ethics	2	1	選択	講義	＊	＊	＊	不開講

※注　「通訳・翻訳研究 A」「通訳・翻訳研究 B」は、国際学部科目との合併開講となる為、本学国際学部出身者で学部生の際に単位修得した者は、履修できません。

【言語コミュニケーション専攻　修了要件】

以下の全ての要件を満たすこと。

科目群	修了要件単位数	備　　考
基礎科目	4 単位必修	Research Methods A・B（各 2 単位）
演習科目	8 単位必修	言語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳ（各 2 単位）
応用科目	20 単位以上	
修士論文	―――	修士論文を提出し、審査に合格すること。
合計	32 単位以上	

【他専攻の科目受講について】

言語コミュニケーション専攻の学生は、国際文化学専攻、グローバルスタディーズ専攻の応用科目についても履修することができます。成績評価がなされ、成績表には記載されますが、修了要件には算入されない随意科目として扱われます。

4．アジア・アフリカ総合研究プログラム 科目一覧及び修了要件

アジア・アフリカ総合研究プログラムは、法学研究科・経済学研究科・国際（文化）学研究科の 3 つの研究科が共同で運営する、大学院修士課程プログラムです。それぞれの研究科から、アジア・アフリカ地域研究の専門家を中心とする教員が共通プログラムに参加し、学生を指導します。

国際学研究科においては、国際文化学専攻の学生のみ、本プログラムに参加することができます。

プログラムを修了した学生は、所属する研究科の修士号（法学修士・経済学修士・国際文化学修士）とプログラムの修了証（Certificate of Completion of Graduate Program in Asian and African Studies）を取得することができます。例えば、国際学研究科においてプログラムを修了した学生には、国際文化学修士号とプログラム修了証が授与されます。

⚠ 詳細はパンフレット・ホームページ等を参照してください。

⚠ **プログラムに参加するには、入学当初に当プログラムへの登録が必要です。**

⚠ 他研究科開設の科目内容については、龍谷大学ポータルサイトから Web シラバスを参照してください。

【アジア・アフリカ総合研究プログラム　科目一覧】

科目区分		科目名	単位数	配当年次	開講研究科	開講期	曜日	講時	担当者
特別演習		アジアアフリカ総合研究特別演習	2	1	国際学	前期	月	5	友永雄吾 / 大原盛樹 / 濱中新吾
地域研究科目	アジアⅠ	アジア経済史研究	2	1	経済学	前期	金	1	小瀬一
		アジア政治論研究	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		日本経済論研究	2	1	経済学	＊	＊	＊	不開講
		中国経済論研究	2	1	経済学	前期	月	2	大原盛樹
		日本研究 A	2	1	国際学	＊	＊	＊	不開講
		共生社会研究 A	2	1	国際学	前期	月	4	友永雄吾 / カルロスマリア
		言語文化研究 A	2	1	国際学	後期	火	5	泉文明 / 劉虹 / 史彤嵐 / 朴炫国
		言語文化研究 B	2	1	国際学	＊	＊	＊	不開講
		宗教文化研究 B	2	1	国際学	＊	＊	＊	不開講
		芸術・メディア研究 A	2	1	国際学	後期	金	1	友永雄吾 / 杉本バウエンスジェシカ / 福山泰子 / 徐光輝
		芸術・メディア研究 B	2	1	国際学	＊	＊	＊	不開講
		特殊研究（Asian Politics）	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
	アジアⅡ	アジア経済論研究	2	1	経済学	後期	金	5	島根良枝
		中東政治論研究	2	1	法　学	前期	火	2	濱中新吾
	アフリカ	アフリカ政治論研究	2	1	法　学	前期	金	3	落合雄彦
		アフリカ経済論研究	2	1	経済学	＊	＊	＊	不開講
		アフリカ社会論研究	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		特殊研究（African Politics）	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講

総合研究科　目	政治分野	国際政治経済学研究	2	1	経済学	前期	火	4	原田太津男
		比較政治論研究	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		国家・民族論研究	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		平和・紛争論研究	2	1	法　学	前期	金	2	橋口豊
		外交政策論研究	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		開発援助論研究	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		国際法研究Ⅰ	2	1	法　学	前期	水	2	山田卓平
		国際人権法研究Ⅱ	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		国際環境法研究Ⅰ	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		特殊研究（Comparative Politics）	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		特殊研究（International Human Rights Law Ⅱ）	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
	経済分野	民際学概論	2	1	経済学	後期	火	3	松島泰勝
		民際学理論研究	2	1	経済学	前期	金	4	西川芳昭
		経済協力論研究	2	1	経済学	前期	木	2	神谷祐介
		環境経済論研究	2	1	経済学	＊	＊	＊	不開講
		国際地域経済研究	2	1	経済学	＊	＊	＊	不開講
		農業経済論研究	2	1	経済学	＊	＊	＊	不開講
		フィールド調査研究	2	1	経済学	＊	＊	＊	不開講
		開発経済学研究	2	1	経済学	＊	＊	＊	不開講
	文化社会分野	特殊研究（法政応用英語Ⅰ）	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		特殊研究（法政応用英語Ⅱ）	2	1	法　学	＊	＊	＊	不開講
		特殊研究（法政応用英語Ⅲ）	2	1	法　学	前期	月	2	中川昭
		特殊研究（法政応用英語Ⅳ）	2	1	法　学	後期	月	2	中川昭
		日本研究 B	2	1	国際学	後期	木	3	カルドネルシルヴァン / サルズジョナ / 松居竜五
		共生社会研究 B	2	1	国際学	＊	＊	＊	不開講
		宗教文化研究 A	2	1	国際学	前期	木	2	嵩満也 / 早島慧

【アジア・アフリカ総合研究プログラム　修了要件】

国際文化学専攻の修了要件と併せ、以下の要件を満たすこと。

1．特別演習　2 単位 「アジアアフリカ総合研究特別演習」〔2 単位〕
2．プログラム科目（地域研究科目＋総合研究科目）　10 単位
　（このうち、地域研究科目から 4 単位以上履修のこと。）

なお、当プログラムを履修するためには入学時に登録が必要です。当プログラムに入学当初登録していない国際学研究科修士課程学生は、通常の修士課程学生として上記科目を履修できますが、他研究科の当プログラム科目を履修する場合は「龍谷大学大学院学則」第 9 条による受講となります。また、入学当初に登録していない場合は、当プログラムの修了要件を満たしてもプログラムの修了はできません。

修士論文の提出要領について

1．修士論文計画書（論文題目含む）計画書は、第 3 セメスターの研究科が定めた期日に、所定の様式にて提出してください。また、題目変更が生じた場合は、速やかに届け出てください。

○修士論文計画書提出期日：2024年 4 月中旬（2023年 4 月入学生）
2024年10月中旬（2023年 9 月入学生）

2．論文提出は、指導教員の認可（認印）を必要とし、研究科の定めた期日に提出してください。

○修士論文提出期日：2025年 1 月上旬（2023年 4 月入学生）
2025年 6 月中旬（2023年 9 月入学生）

※論文提出時に、宣誓書（様式指定）もあわせて提出してください。
論文への指導教員認印及び修士論文題目変更届（変更のある場合のみ）に関しては 9 月修了の場合は論文提出期間の 2 週間前までに、3 月修了の場合は 12 月の冬期休業前までをそれぞれ目処に、承認を受けること。

3．論文作成は、次の指定規格様式に従ってください。
＜指定規格様式＞
・用　　紙：Ａ 4 サイズ、上質紙（白／感熱紙不可）、黒字印刷
・書　　式：1 行 40 字× 30 行（ 1 頁：1,200 字詰）横書き、20,000 字以上を標準とする。
・マージン：上および左右の余白 20mm、下余白 25mm
・頁 番 号：下中央（用紙下端より 10mm 程度の位置）
英文等での提出の場合は、12 ポイント、10,000words 以上、その他は上記様式に準じます。

4．修士論文は、各専攻、原則として以下の言語を用いて書くものとします。ただし、指導教員が適切であると認め、研究科委員会が認めた場合には、他の言語を用いて書くことができます。
ＩＣ専攻：日本語
ＧＳ専攻：英語
ＬＣ専攻：英語

5．参考文献目録、付図、付表等は、論文の必要字数に算入しません。

6．論文には、表紙（様式指定）をつけ、指導教員の認印を受けてください。また、表紙に記載する論文題目（副題も含む）は、和文・英文ともに記載してください（英文証明書作成の際に必要となります）。

7．論文には、必ずその要旨を日本語 800 字程度（様式指定／英語の場合 400words 程度）にまとめて添付してください。

8．提出部数は、表紙・要旨・論文とも各 4 部とします（それぞれ 3 部コピー可）。なお、提出した論文は返却しませんので、各自控えを保管しておいてください。

9．提出の際は、表紙・要旨・論文の順にファイルに綴って提出してください。**ファイルは国際学部教務課にて貸し出します**。

10．提出された論文は、大学で製本・保管し、公開を原則とします。

11．論文は、大学院生自身の進路や意図を問わず、社会的に十分通用するものでなければなりません。

12．原則として、IC 専攻の方は「リサーチセミナーＡ・Ｂ」、GS 専攻の方は「Research Seminar A・B・C・D」、LC 専攻の方は「Research Methods A・B」講義内にて、修士論文中間研究発表、修士論文最終研究発表をしていただきます。ただし、年度により変更となる場合があります。当該年度に修士論文を提出する大学院生は、担当教員の指示に従ってください。

13．修士論文の口述試験は、3 月修了の場合は 1 ～ 2 月に、9 月修了の場合は 7 月に予定しています。対象の大学院生は、指導教員からの出校通知に対応できるようにしておいてください。

14．修士論文の優秀論文発表会を、3 月修了の場合は 2 月～ 3 月に、9 月修了の場合は 8 ～ 9 月に予定しています。指導教員からの出校通知に対応できるようにしておいてください。

以上をふまえ、「龍谷大学大学院国際学研究科学位論文に関する規程」を熟読してください。また、あわせて、「修士学位取得のためのガイドライン」を確認してください。

9 月修了の取扱いについて

1．修了資格

下記の 2 つの条件を満たした者は、9 月修了を認められることができる。

（1）所定の期間在学し、定められた単位を修得していること。

（2）修士論文を提出し、研究科委員会において合格の認定を受けていること。

2．修了日付

この取扱による修了日付は、9 月 30 日とする。

3．学位記の書式

学位記の書式は、通常の修了の際のそれと同一とする。

付記事項

9 月修了学生の学費は、前期分のみとする。

「長期履修学生制度」について

2014 年度入学生からを対象とし、職業を有している等の事情により、通常の修了に係る年限では履修が困難な学生を対象に、一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し課程を修了することが出来る「長期履修学生制度」を設けています。

○対象課程

修士課程及び博士後期課程

○対象者

長期履修学生となることを希望できるのは、標準修業年限での修了が困難な次のいずれかに該当する方です。

①職業を有している者

②家事、介護、育児、出産等の諸事情を有する者

③その他当該研究科が相当な事情があると認めた者

※ただし、外国人留学生、地域人材育成学費援助奨学生は対象としません。

○長期履修期間

修士課程、博士後期課程のいずれも上限 6 年

○申請期間及び方法

長期履修学生制度を希望する場合は、長期履修開始年度の学年開始 1 ヶ月前までに教務課に必要書類を提出して下さい。ただし、修了年度の申請は不可です。

○申請期間の変更

原則、申請のあった履修期間内での履修を求めますが、やむを得ない事情等が発生した場合は、短縮・延長のいずれかの 1 回に限り変更を認めます。変更を希望する場合は、必要書類を教務課に提出して下さい。なお、変更の申請については、短縮を希望する場合は変更後の修了年度の学年開始の 1 ヶ月前まで、延長を希望する場合は変更後の修了年度の学年開始の 1 ヶ月前までに行って下さい。

○審査方法（新規申請及び変更）

提出された申請書類等をもとに、当該研究科委員会で審査の上決定します。

○学費等の納入方法

長期履修学生は通常学費を履修期間に応じて均等に分割納入することとなります。

※学費とは別に諸会費が必要となります。諸会費については分割納入にはなりませんので毎年度納入する必要があります。

以　上

修士課程の中間発表・最終発表におけるレジュメの作成方法

国際学研究科委員会
国際学研究科大学院カリキュラム委員会

中間発表会および最終発表の目的は、修士課程 2 年目の学生が、研究科全体に対してそれぞれの研究の進み具合を報告することにある。学生による発表がよりスムーズに行われ、また、教員からより多くのコメントがもらえるために、以下のような形でレジュメを作ることとする。

レジュメの内容

中間発表会は研究の進み具合を報告することが第一の目的であり、研究で取り組むべき問題が明らかになっている必要がある。この時点までに、予備的研究がすでに行われ、研究資料の収集やフィールドワークが開始されていることが望ましい。また、発表では、研究の上での「今後の課題」についても説明することが望まれる。

最終発表は 2 年間の研究の総まとめとして研究成果の報告を行うことが目的である。特に、これまでの研究成果に関する説明と、研究結果の学問的意味づけについても説明があることが望まれる。

望ましいレジュメの体裁

レジュメを作成するか、パワーポイント等のスライドを適宜印刷して配布するかのどちらか一方を指導教員と相談の上で適宜選択すれば良い。いずれの場合も、以下のような内容を含んでいると、配布物としては有効であろう。

（1）研究題目（主題・副題）、氏名、E- メールアドレス、指導教員名、副指導教員名、日付
（2）発表項目（論文の目次に相当）
（3）研究課題（または仮説）の説明
（4）研究方法
（5）結果および考察
（6）結論（中間発表では暫定的結論）
（7）引用文献・参考文献

書式

レジュメないしパワーポイント等のスライド印刷のいずれの場合でも、枚数は A4 用紙縦版で 4 ページ程度が望ましい。フォントやフォーマットについては、聴衆の視点で工夫すること。

レジュメ原稿〆切日

レジュメ原稿はそれぞれの発表会の 3 日前を締め切りとする。教育支援システムに電子データで保存すること。

発表の方法

実際の発表ではパワーポイント等のプレゼンテーションソフトを活用し、学会発表でよく行われるように、グラフ、写真、地図、アンケート結果などをスクリーンに映して説明すると、効果的なプレゼンテーションとなる。

発表の時間は 20 分、質疑応答も含めて全体で 45 分とする。

［質問・不明点などがあれば、指導教員、研究科教務主任、または事務担当者に尋ねること。］

「京都・宗教系大学院連合」単位互換

「京都・宗教系大学院連合」は、大谷大学大学院、高野山大学大学院、種智院大学、同志社大学大学院、花園大学大学院、佛教大学大学院、皇學館大学大学院、龍谷大学大学院（文学研究科・実践真宗学研究科・国際学研究科）が加盟しています。

京都を中心とした宗教系大学の大学院が、それぞれの宗教や宗派の特色を生かし、単位互換を実施しています。詳細については、別に配布する「京都・宗教系大学院連合」のパンフレットを参照してください。

なお、履修した授業科目は、原則として随意科目での単位認定とし、定められた上限単位を超えない範囲で本学国際学研究科において履修したものとみなします（大学院学則第 9 条第 1 項および第 2 項参照）。

※詳細は国際学部教務課にお尋ねください。

（履修登録方法）

前期の履修登録期間に、国際学部教務課で配布する『「京都・宗教系大学院連合」単位互換履修出願票』に必要事項を記入し、提出してください。通年登録のため、前期開講分･後期開講分を一度に登録してください。後期での登録修正はできませんので、計画的に履修登録してください。

教　育　課　程
（博士後期課程）

博士学位取得のためのガイドライン

1．国際学研究科（博士後期課程）で授与する学位

博士　国際文化学　＜ Doctor of Intercultural Communication ＞
　　グローバルスタディーズ　＜ Doctor of Global Studies ＞

2．学位授与までのプロセス

博士後期課程学位授与までのプロセス (研究指導・審査スケジュール)

年次	セメスター	時期	内　　容	主な研究活動	指導内容
1年次	1 セメ	4 月	入学式 履修説明会・履修登録指導期間 履修登録 演習指導教員選定届の提出	研究の論理的枠組みの構築	教員による履修計画及び演習教員選定への助言 指導教員・副指導教員の選定
		5 月	**研究計画書**の提出		
	2 セメ	1 月	**研究経過報告書**の提出	基礎的資料・データの収集、整理	研究指導計画書の策定・共有
2年次	3 セメ	4 月	履修登録		
	4 セメ	1 月	**研究経過報告書**の提出		
		1 月以降	**博士論文提出資格試験**の受験		研究指導計画書の策定・共有 (博士論文提出資格試験の実施)
3年次	5 セメ	4 月	履修登録	関連学会等での研究発表	
		4 月以降	**公開研究発表**		公開研究発表に対する助言
	6 セメ	11 月	**博士論文**の提出		博士論文提出への助言
		1 月以降	受理審査 本審査・論文審査会 (審査は最長 1 年間)	学会誌等への論文投稿	
		3 月	学位授与式		

3．博士後期課程に関するスケジュール

（1）演習指導教員選定届【第 1 セメスター】

国際学研究科では、学生の多様なニーズに対応できるよう、主指導教員と副指導教員による複数指導体制を整備しています。学生の皆さんが多角的な視野から主体的に学びや研究を深めていけるよう指導教員が中心となりサポートしていきます。

第 1 セメスター履修登録の際に「演習指導教員選定届（主指導教員と副指導教員）」を提出してください。選定届を提出する前に、必ず主・副指導を希望する当該教員に相談し、了承を得ておく必要があります。「演習指導教員選定届」に記入した教員が各セメスター(第 1 ～第 6 セメスター)の演習指導教員になります。

（提出期間）2023年 4 月入学生：2023年 4 月 3 日（月）～ 4 月 7 日（金）
2023年 9 月入学生：2023年 9 月下旬（詳細日程は別途掲示します）

（2）研究計画書の提出【第 1 セメスター】

博士論文の作成に関する研究計画書について、第 1 セメスターの定められた期間内に提出してください。

（提出期間）2023年 4 月入学生：2023年 4 月10日（月）～ 4 月21日（金）
2023年 9 月入学生：2023年10月 2 日（月）～10月13日（金）

⚠ 研究指導上、第 1 セメスターでの提出がおこなえない場合は、指導教員から別途指示を受けた期間に提出してください。

（3）研究経過報告書の提出【第 2・第 4 セメスター】

博士後期課程における 1 年間の研究経過をまとめた「研究経過報告書」について、第 2 セメスターおよび第 4 セメスターの終了までの定められた期間に提出してください。

（提出期間）2023年 4 月入学生：2024年 1 月 8 日（月）～ 1 月12日（金）
2023年 9 月入学生：2025年 7 月中旬

⚠ 研究指導上、第 2・第 4 セメスターでの提出がおこなえない場合は、指導教員から別途指示を受けた期間に提出してください。

（4）博士論文提出資格試験の受験【第 4 セメスター以降】

博士論文提出の要件である、博士論文提出資格試験について、第 4 セメスター終了以降の定められた期日に受験してください。

（受験期間）2023年 4 月入学生：2025年 1 月以降
2023年 9 月入学生：2025年 7 月以降

⚠ 試験受験に関する詳細は、指導教員と相談の上決定します。また、研究指導上、第 4 セメスター終了以降の受験ができない場合は、指導教員から別途指示を受けた期間に受験してください。

（5）公開研究発表について【第 5 セメスター以降】

博士論文提出の要件である、公開研究発表について、第 5 セメスター以降に実施してください。

（実施期間）2023年 4 月入学生：2025年 4 月以降
2023年 9 月入学生：2025年 9 月以降

⚠ 研究発表に関する詳細は、指導教員と相談の上決定します。また、研究指導上、第 5 セメスター以降に研究発表ができない場合は、指導教員から別途指示を受けた期間に実施してください。

（6）博士論文の提出【第 6 セメスター】

博士後期課程の修了に必要となる博士論文について、第 6 セメスターの定められた期日に提出してください。提出にあたっては「博士論文の提出要領について」（46 ページ）や関連する諸規程（51 ページ）等を必ず確認してください。

（提出期日）2023年 4 月入学生：2025年11月下旬
2023年 9 月入学生：2026年 5 月下旬

⚠ 研究指導上、第 6 セメスターに博士論文提出をおこなわない場合、指導教員と以降の研究計画について相談してください。

⚠ 上記の他、研究指導上必要となる提出書類については、授業担当教員や指導教員、国際学部教務課等から別途指示があります。

⚠ 提出期間や提出物等については、manaba、ポータルサイト等で必ず確認してください。内容等が変更となる場合は、manaba、ポータルサイト等を通じて周知します。

⚠ 休学歴のある学生は、上記の提出期間から休学期間を考慮の上、該当するセメスターで提出してください。

4．博士後期課程 修了要件

IC 専攻：演習 12 単位を修得し、博士論文の審査に合格しなければならない。

GS 専攻：Thesis Seminar 12 単位および PhD Research Seminar 2 単位を修得し、博士論文の審査に合格しなければならない。

修了するために履修すべき科目については、教育課程（44 ページ）を参照のこと。

5．博士論文に求められる要件

博士論文は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を有することを立証するに足るものでなければならない（大学院学則第 13 条 5 項）。

とりわけ、以下の点に留意した博士論文が求められる。

1 ）学問的意義	論文のテーマに本研究科における学問的意義が認められること。またその意義についての認識が明確に示されていること。
2 ）問題設定の適切性	論文のテーマを探求するために適切な問題設定がなされていること。
3 ）論旨の一貫性	論文の記述が整合的で一貫しており、矛盾や混乱がないこと。
4 ）方法の妥当性	論文のテーマや問題設定にふさわしい研究方法が用いられていること。また文献資料・データの取り扱いや分析方法が適切であること。
5 ）先行研究の十分な検討	論文のテーマや問題設定にとって必要と考えられる先行研究・関連文献を十分に踏まえていること。
6 ）独創性・新規性	論文のテーマ、問題設定、研究方法、論旨などにおいて、自立した研究者として十分な独創性・新規性が認められること。
7 ）専門性	当該研究分野における高度の専門的知識を活用したものと認められること。
8 ）学際性	本研究科における研究が本来的に有する広汎性を認識し、広く社会に向けて発信する姿勢が認められること。
9 ）資質・将来性の表出	論文の総体が、自立した国際文化学研究者としての資質・将来性を感じさせるものとなっていること。
10）形式	文献引用などが適切に処理され、学術論文としての形式が整っていること。

6．博士論文の提出資格要件について

（1）修了要件単位について

博士後期課程の修了要件である科目の必要単位を修得した者、または修得見込みの者

（2）研究計画書について

指導教員の指導のもと、学位論文題目及び研究の意義、内容、方法、参考文献等を記述した研究計画書を作成のうえ提出し、研究科委員会の承認を得なければならない。

（3）博士論文提出資格試験について

以下の 2 種の資格試験に合格しなければならない。

（第 1 種）博士論文研究計画を中心とする試験

（第 2 種）研究に必要な外国語試験

（4）研究発表について

研究科が主催する公開の研究発表会において、博士論文の研究内容を報告しなければならない。

（5）著作・論文の発表について

過去において、一定の条件を満たす著作・論文を発表しなくてはならない。（詳しくは p.51「学位論文に関する規程」の第 2 章博士論文を参照）

7．学位審査（博士）の概要

博士後期課程を修了し、博士学位を得ようとする者は、前項の諸要件に加え、博士論文に関する以下の要件を満たさなければならない。

（1）博士論文の提出

指導教員から承認を受けた博士論文を、研究科が指定する期日までに所定の書類等を添えて提出し、審査を受けなければならない。

（2）博士論文の受理

諸要件を満たして提出された博士論文について、研究科委員会は受理委員会を構成し、博士論文の受理について審査する。

受理委員会は、審査結果を研究科委員会に報告し、研究科委員会において論文の受理について審議し、学長が受理する。

（3）査委員会

受理された博士論文について、研究科委員会は審査委員会を構成し、論文審査をおこなう。審査委員会は論文内容ならびに関連資料等の検討をおこない、口述試験を実施する。審査委員会は、審査結果を研究科委員会に報告する。

（4）修了判定

研究科委員会は審査委員会からの報告を受け、博士後期課程の修了について議決し、議決を学長に報告する。報告を受けた学長は、大学院委員会において課程修了の可否について決定し、修了可とした者に博士学位を授与する。

8．修了判定後の博士論文の取扱いについて

修了が可となった博士論文については製本され、学内外の諸機関にて保存し、閲覧に供するものとする。また、製本１部を提出者に返却する。

なお、学位を授与された博士論文については、論文要旨および審査結果の要旨を公表するものとする。

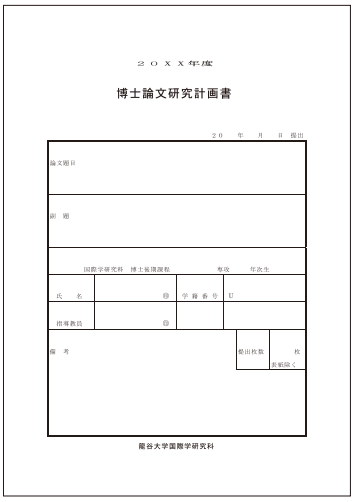
9．関連規程

諸規程（51 ページ以降）を参照すること。

⚠ 博士論文の提出や審査等については、関連する諸規程（龍谷大学大学院学則、龍大学学位規程、国際学研究科学位論文に関する規程等）にもとづき取り扱われます。詳細は、関連規程にて確認するようにしてください。

10．博士論文に関する各種様式

（１）博士論文研究計画書表紙
（２）学位論文審査願
（３）博士論文表紙


２０ＸＸ年度

博士論文研究計画書

２０　年　月　日 提出

論文題目

副題

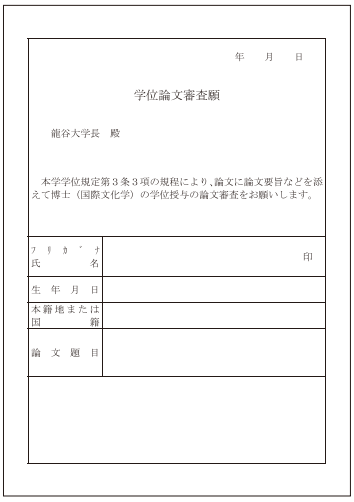
国際学研究科　博士後期課程　　専攻　　年次生

氏名　　印　学籍番号　U

指導教員　　印

備考　　提出枚数　　枚　書紙除く

龍谷大学国際学研究科

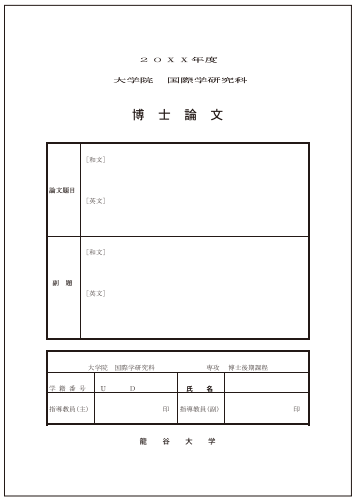

年　月　日

学位論文審査願

龍谷大学長　殿

本学学位規定第３条３項の規程により、論文に論文要旨などを添えて博士（国際文化学）の学位授与の論文審査をお願いします。

フリガナ 氏名	印
生年月日	
本籍地または国籍	
論文題目	


２０ＸＸ年度

大学院　国際学研究科

博　士　論　文

論文題目	〔和文〕 〔英文〕
副題	〔和文〕 〔英文〕

大学院　国際学研究科		専攻　博士後期課程	
学籍番号	U　D	氏名	
指導教員(主)	印	指導教員(副)	印

龍　谷　大　学

提出書類様式は、manaba course「国際学研究科・共通コース」のコースコンテンツからダウンロードしてください。

教育課程

1．授業科目

（1）国際文化学専攻

科目名	配当セメスター	単位数
演習Ⅰ	第 1 セメスター	2
演習Ⅱ	第 2 セメスター	2
演習Ⅲ	第 3 セメスター	2
演習Ⅳ	第 4 セメスター	2
演習Ⅴ	第 5 セメスター	2
演習Ⅵ	第 6 セメスター	2

（2）グローバルスタディーズ専攻

科目名	配当セメスター	単位数
PhD Research Seminar	第 1 セメスター	2
Thesis Seminar Ⅰ	第 1 セメスター	2
Thesis Seminar Ⅱ	第 2 セメスター	2
Thesis Seminar Ⅲ	第 3 セメスター	2
Thesis Seminar Ⅳ	第 4 セメスター	2
Thesis Seminar Ⅴ	第 5 セメスター	2
Thesis Seminar Ⅵ	第 6 セメスター	2

2．博士後期課程　修了要件

（1）以下の単位を修得すること。

ＩＣ専攻：「演習Ⅰ～Ⅵ」（各 2 単位）の合計 12 単位（必修）。

ＧＳ専攻：PhD Reserach Seminar（2 単位）および「Thesis Seminar Ⅰ～Ⅵ」（各 2 単位）の合計 14 単位（必修）。

（2）博士論文提出資格試験に合格し、研究科の主催する公開の研究発表会を行うこと。

（3）所定の期限までに博士論文を提出し、博士論文の審査に合格すること。

以上、（1）～（3）の全てを満たすこと。

3．課程修了の認定

大学院設置基準第 17 条および龍谷大学大学院学則第 5 章に基づき、課程修了の認定を行います。

4．学位の授与

博士（後期）課程を修了した者には、学校教育法第 68 条の 2、学位規則第 4 条、龍谷大学大学院学則第 6 章に基づき、「博士（国際文化学）」または「博士（グローバルスタディーズ）」の学位を授与します。

国際学研究科 博士後期課程 研究指導要領

博士後期課程における研究指導

1．指導教授の選定・研究指導

（1）研究科生は、研究内容に応じて、指導教員を選ばなければならない。
（2）研究経過報告書を指導教員に毎年次提出させ、毎年次その評価を行う。指導教員は研究経過報告書をもとに博士論文の作成指導を行う。
（3）研究科生は、指導教員と協議の上、必要な場合は副指導教員を選び、その指導を受けることができる。その場合は、研究科委員会の承認を得なければならない。
（4）指導教員の転任・退職、研究題目の変更等の事由がある場合には、指導教員の変更が認められる。指導教員を変更しようとする者は、指導教員の同意を得た上、研究科委員会の承認を得なければならない。

2．博士論文研究計画書の作成と承認

（1）博士論文作成にあたっては、指導教員の指導のもとで、研究の目的・内容・方法・参考文献等を記述した博士論文研究計画書を作成しなければならない。
（2）研究計画書は、指導教員の同意を得て、研究科委員会の承認を得なければならない。

3．博士論文提出資格試験

（1）博士論文を提出するためには、博士論文提出資格試験に合格しなければならない。
（2）博士論文提出資格試験は、次の 2 種を実施する。
（第一種）博士論文研究計画を中心とする試験
（第二種）研究に必要な外国語試験

4．博士論文作成に対する研究指導

（1）博士論文提出資格を得た者は、指導教員のもとで必要な研究を行い、論文を作成するものとする。
（2）指導教員は、その研究指導に必要と認めるときは、国際学研究科課程ならびに他の研究科の授業科目等の履修を課すことができる。
（3）博士論文提出資格を得た者は、必要ある場合には、指導教員の同意と研究科委員会の承認を得て、一定の期間に限り、国内外の研究機関等において研究することが認められる。
（4）博士論文提出資格を得た者は、研究科における公開の研究発表会において研究発表を行うものとする。

博士論文の提出要領について

1．提出方法

論文提出は、指導教員の許可（認印）を必要とし、所定の様式により、研究委員会が指定した期日に提出してください。提出後の題目変更はないものとします。

（1）提出期限日：11 月末日（但し、9 月修了の場合は 5 月末日）
（2）提出書類等：
① 学位論文審査願　※様式有り
② 履歴書・研究業績書　※様式任意
③ 博士論文表紙　　※様式有り（指導教員の認印および和文・英文の題目記載が必要）
④ 博士論文要旨　　※用紙規格参照
⑤ 博士論文　　※用紙規格参照
⑥ 博士論文提出済届　※様式有り
⑦ 審査手数料（龍谷大学学位規程第 4 条に該当する者）
⑧ 論文提出に際しての宣誓書　　※様式有り
⑨「学位論文に関する規程」（51 ページ）に定められた条件を満たす著作・論文の写し

以上の①～⑤を各 4 部（それぞれ 3 部コピー可）提出してください。⑥～⑨は 1 部で構いません。
①～⑤の書類は、順に 1 セット単位にファイリングして、4 セット提出してください（ファイルは国際学部教務課にて貸し出します）。
提出された書類は返却いたしません。なお、上記以外の書類の提出を求めることがあります。

2．用紙規格

（1）博士論文要旨
・用　　紙：　A 4 サイズ、縦版、横書き
・字　　数：　2,000 字～ 4,000 字程度
　　ＩＣ専攻は、日本語の博士論文要旨とすること。
　　1 行 40 字× 30 行（1 頁 1,200 字）
・マージン：　上および左右の余白 20 ㎜、下余白 25 ㎜
・頁 番 号：　下中央（用紙下端より 10 ㎜程度の位置）

※参考文献目録、付図、付表などは、字数に算入しない。
※ＩＣ専攻において題目が日本語以外の場合、日本語訳を付けることとする。

（1）博士論文
・用　　紙：　A 4 サイズ、縦版、横書き
・字　　数：　制限なし
　　日本語の場合　1 行 40 字× 30 行（1 頁 1,200 字）
　　アルファベットの場合、12 ポイントの文字サイズを使用すること。
・マージン：　上および左右の余白 20 ㎜、下余白 25 ㎜
・頁 番 号：　下中央（用紙下端より 10 ㎜程度の位置）

※ＩＣ専攻において題目が日本語以外の場合、日本語訳を付けることとする。

なお、口述試験の日時・場所は、後日、提出者に通知いたします。
「龍谷大学大学院国際学研究科学位論文に関する規程」を熟読してください。

「長期履修学生制度」について

2014 年度入学生からを対象とし、職業を有している等の事情により、通常の修了に係る年限では履修が困難な学生を対象に、一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し課程を修了することが出来る「長期履修学生制度」を設けています。

○対象課程
修士課程及び博士後期課程

○対象者
長期履修学生となることを希望できるのは、標準修業年限での修了が困難な次のいずれかに該当する方です。
①職業を有している者
②家事、介護、育児、出産等の諸事情を有する者
③その他当該研究科が相当な事情があると認めた者
※ただし、外国人留学生、地域人材育成学費援助奨学生は対象としません。

○長期履修期間
修士課程、博士後期課程のいずれも上限 6 年

○申請期間及び方法
長期履修学生制度を希望する場合は、長期履修開始年度の学年開始 1 ヶ月前までに教務課に必要書類を提出して下さい。ただし、修了年度の申請は不可です。

○申請期間の変更
原則、申請のあった履修期間内での履修を求めますが、やむを得ない事情等が発生した場合は、短縮・延長のいずれかの 1 回に限り変更を認めます。変更を希望する場合は、必要書類を教務課に提出して下さい。なお、変更の申請については、短縮を希望する場合は変更後の修了年度の学年開始の 1 ヶ月前まで、延長を希望する場合は変更後の修了年度の学年開始の 1 ヶ月前までに行って下さい。

○審査方法（新規申請及び変更）
提出された申請書類等をもとに、当該研究科委員会で審査の上決定します。

○学費等の納入方法
長期履修学生は通常学費を履修期間に応じて均等に分割納入することとなります。
※学費とは別に諸会費が必要となります。諸会費については分割納入にはなりませんので毎年度納入する必要があります。

以　上

特別専攻生・研究生

特別専攻生・研究生について

大学院国際学研究科では、教育課程を修了または退学した後に、龍谷大学大学院学則に基づく「特別専攻生」および「研究生」として、研究を継続することができます。

研究の継続を希望する者は、「特別専攻生規程」および「研究生」に関する規程を熟読の上、以下のとおり手続きしてください。

1．応募資格：

（1）「特別専攻生」の応募資格は、**本学国際学研究科修士課程または博士後期課程の修了者**で、さらに研究の継続を希望する者です。

（2）「研究生」の応募資格は、**本学国際学研究科博士後期課程に 3 年以上在学して退学した者**で、さらに大学院において博士論文作成のための研究継続を希望する者です。

2．申込期間：（2023 年度・後期）2023 年 6 月 12 日（月）～ 7 月 7 日（金）
（2024 年度・前期）2024 年 1 月中旬～ 2 月上旬

3．申込場所：国際学部教務課

4．留意事項：

（1）申込期間に、manaba course「国際学研究科・共通コース」のコースコンテンツにある所定の「特別専攻生願書」または「研究生願書」を提出してください。

（2）「特別専攻生願書」または「研究生願書」には、写真・研究指導を受ける教員の所見、その指導教員の署名捺印が必要です。

（3）願書受付終了後、申込者に対する審査をおこない、「特別専攻生」または「研究生」として許可する者の判定結果を掲示にて発表します。必ず確認してください。

（4）判定の結果、「特別専攻生」または「研究生」と許可された者は、指定された期間に証明書自動発行機にて、研修費 10,000 円（1 学期分）または 20,000 円（1 学年分）を納入し、証明書自動発行機から出力される納入済みの各種申込書を、必ず指定された期日までに国際学部教務課へ提出してください。

（5）留学生については、「特別専攻生」または「研究生」となり、アルバイトを行う場合は、必ず「資格外活動許可書」を取得してください。

（6）さらに研究の継続を希望する者は、期間の更新を願い出ることができます。ただし、通算して 3 年（特別専攻生の博士後期課程修了者は 5 年）を越えることはできません。

◇　利用できる設備等

・図書館利用内容は大学院生と同様です。
・パソコン実習室を使用できます。ID 取得などは、情報メディアセンター事務部が窓口となります。
・学校学生生徒旅客運賃割引証（学割証）は交付できません。

◇　学位授与の申請について

・研究生は博士論文作成のために研究継続を希望する方のための制度ですが、研究生が申請できるのは龍谷大学学位規程第 3 条第 4 項（論文博士）の学位です。学位規程第 3 条第 3 項の学位（課程博士）授与を希望する方は、博士後期課程に再入学する必要があります。

諸　規　程

龍谷大学大学院 国際学研究科　学位論文に関する規程

制　　定　2019 年 3 月 15 日
一部改正　2021 年 3 月 17 日

この規程は、龍谷大学大学院国際学研究科修士・博士後期両課程における研究指導と学位論文の作成・提出・審査などについて定めたものである。

ただし、本学大学院学則第 17 条第 3 項または本学学位規程第 3 条第 4 項に規定された博士学位論文（いわゆる論文博士）に関しては、「龍谷大学学位規程」によるものとする。

第 1 章　修士論文

第 1 節　研究指導

（指導教員）

第 1 条　修士課程の学生は、第 1 セメスター開始時に指導教員 1 名を選ばなければならない。

2　指導教員については、当該教員の承諾を得た上で、所定の様式により研究科委員会が定めた期日までに届け出を行い、研究科委員会の承認を得なければならない。

（副指導教員）

第 2 条　副指導教員については、研究科委員会が当該学生の指導教員に諮った上で人選し、各学生について 1 名以上を指名する。副指導教員は、当該学生の指導において指導教員と意見交換しながら、これを補佐する。

（指導教員・副指導教員の変更）

第 3 条　指導教員を変更しようとする者は、新・旧指導教員の承認を得た上で、所定の様式により届け出を行い、研究科委員会の承認を得なければならない。変更の期限は、原則として第 1 セメスターまでとする。

2　副指導教員の変更については、研究科委員会が当該学生の指導教員に諮った上で人選し、決定する。

（研究経過報告書・修士論文計画書）

第 4 条　修士課程の学生は、研究活動を記述した「研究経過報告書」を作成し、第 2 セメスター終了時までに指導教員に提出しなければならない。

2　修士課程の学生は、指導教員の指導のもとに、学位論文予定題目および研究の内容・方法・参考文献・発表予定などの概要を記述した「修士論文計画書」を作成し、第 3 セメスター開始時に指導教員に提出しなければならない。修士論文計画に大幅な変更を加える必要が生じた場合には、その都度指導教員に報告しなければならない。

3「研究経過報告書」および「修士論文計画書」は、指導教員が研究科委員会に報告し、その承認を得るものとする。

第 2 節　学位論文の内容・様式及び提出手続き

（学位論文の内容）

第 5 条　修士課程の修了要件としての学位論文は、本学大学院学則第 12 条 4 項に規定された内容を具備したものでなければならない。

（論文の提出資格）
第 6 条　修士課程の学生が、修士論文を提出するためには、次の各号のすべてを満たしているものとする。
（1）所定の単位を修得した者または修得見込みの者
（2）「研究経過報告書」および「修士論文計画書」を提出し、研究科委員会の承認を得た者
（3）修士論文の提出期限以前に研究科の主催する修士論文最終発表会において発表した者

（修士論文の提出）
第 7 条　修士課程を修了しようとする者は、指導教員の承認を得た上で、修士論文、修士論文要旨各 4 部（3 部はコピー可）および電子データを本学大学院学則第 12 条の規定により課程の修了が可能な学期で、研究科委員会が定めた期日に提出しなければならない。
2　修士論文の字数は、研究科所定の用紙規格にて日本語の場合は 20,000 字以上、英語の場合は 10,000words 以上を標準とし、修士論文要旨の字数は、研究科用紙規格にて日本語の場合は 800 字程度、英語の場合は 400words 程度とする。ただし、参考文献目録、付図、付表等は、字数に算入しない。
3　修士論文が日本語・英語以外の言語で書かれた場合には、論文及び同要旨の字数は前項に準じるものとする。

第 3 節　学位論文の審査

（学位論文の審査）
第 8 条　学位論文の審査は、研究科委員会の定める審査委員会がこれを行う。

第 9 条　修士論文の審査委員会は、修士論文提出までに研究科委員の中から指導教員が推薦し、研究科委員会で承認された審査委員 3 名以上（うち 1 名は指導教員）によって構成される。
2　研究科委員会は、前項の規定に関わらず、必要に応じて学内外の専門家を修士論文の審査委員に選ぶことができる。
3　審査委員長は、審査委員会でこれを互選する。

（修士論文の審査方法）
第 10 条　修士論文の審査委員会は、論文内容の検討と口述試験の結果にもとづき、研究科が定める基準（S・A・B・C・D評価、Dは不合格）をもって当該論文を評価する。

（学長への報告）
第 11 条　研究科は、本学学位規程第 10 条第 2 項にもとづき、前条の議決を文章にて学長に報告しなければならない。

第 4 節　学位論文の公表

（学位論文の公表）
第 12 条　修士論文の内容は学術雑誌『龍谷大学大学院国際文化研究論集』掲載等によって印刷・公表されることを原則とする。

第 2 章　博士論文

第 1 節　研究指導

（指導教員）

第 13 条　博士後期課程の学生は、入学後すみやかに指導教員 1 名を選ばなければならない。

2　指導教員は、当該課程の演習を担当する専任教員であることを原則とする。演習を担当する専任教員は研究科委員会が定めることとする。

3　指導教員については、当該教員の承諾を得た上で、所定の様式により研究科委員会が定めた期日までに届け出を行い、研究科委員会の承認を得なければならない。

（副指導教員）

第 14 条　副指導教員については、研究科委員会が当該学生の指導教員に諮った上で人選し、各学生について 1 名以上を指名する。副指導教員は、当該学生の指導において指導教員と意見交換しながら、これを補佐する。

（指導教員・副指導教員の変更）

第 15 条　指導教員を変更しようとする者は、新・旧指導教員の承諾を得た上で、所定の様式により届け出を行い、研究科委員会の承認を得なければならない。

2　副指導教員の変更については、研究科委員会が当該学生の指導教員に諮った上で人選し、決定する。

（研究計画書）

第 16 条　博士後期課程の学生は、指導教員の指導のもとに、学位論文予定題目及び研究の意義・内容・方法・参考文献などを記述した「研究計画書」を作成し、指導教員の同意を得て提出しなければならない。研究計画に大幅な変更を加える必要が生じた場合には、その都度指導教員に報告しなければならない。

2 「研究計画書」は、指導教員が研究科委員会に報告し、その承認を得るものとする。

第 2 節　学位論文の内容・様式及び提出手続き

（学位論文の内容）

第 17 条　博士後期課程の修了要件としての学位論文は、本学大学院学則第 13 条 5 項に規定された内容を具備したものでなければならない。

（論文の提出資格）

第 18 条　博士後期課程の学生が、博士論文を提出するためには、次の各号のすべてを満たしているものとする。

（1）所定の単位を修得した者または修得見込み者

（2）第 13 条の「研究計画書」の承認を得た者

（3）本研究科博士後期課程に在学中または研究生の時に次の 2 つの博士論文提出資格試験に合格した者

①第 1 種　博士論文研究計画を中心とする試験

②第 2 種　研究に必要な外国語試験

（4）　博士論文の研究内容を研究科の主催する公開の研究発表会において報告した者

（5）過去において以下の①～④に相当する著作 1 点以上を発表した者、または現在においてその発表が決定している者。

①国際的または全国的規模の学会誌等に審査を経て掲載された単著論文

②国際的または全国的規模の学会誌等に審査を経て掲載された、自らを筆頭著者とする共著論文
③上記①②に準ずる水準と認められる、単著による学術的な著作
④上記①②に準ずる水準と認められる、共著による学術的な著作において分担執筆した論文相当の著述

（博士論文の提出）

第 19 条　博士後期課程を修了しようとする者は、指導教員の承認を得た上で、学位論文審査願、博士論文、博士論文要旨、履歴書、研究業績書、前条第 5 項が要求する著作各 4 部（3 部はコピー可）および電子データを本学大学院学則第 13 条の規定により課程の修了が可能な学期で研究科委員会が定めた期日に提出しなければならない。研究科長は、必要な場合、博士論文の提出者に対して、上記以外の資料の提出を求めることができる。

2　博士論文は、研究科所定の用紙規格にて作成し、字数の制限は設けない。博士論文要旨の字数は、研究科所定の用紙規格にて日本語で 2,000 字以上 4,000 字程度、英語で 1,000words 以上 2,000words 程度とする。

3　博士論文が日本語以外の言語で書かれた場合には、博士論文および同要旨の字数は前項に準じるものとする。ただし、それぞれの題目には、日本語訳を付けることとする。

4　本学学位規程第 3 条第 4 項による博士論文の提出には、研究科委員会委員 3 名からの推薦を必要とし、本条第 1 項に定める提出書類の他に、推薦者それぞれによる推薦書を提出しなければならない。この場合の論文等の提出期日は、本条第 1 項に定める期日と同日とする。

第 3 節　学位論文の受理および審査

（学位論文の受理）

第 20 条　前節の諸要件を満たした博士後期課程の学位論文が提出された場合、研究科委員会は受理委員会を設置し、論文受理に関する審査を行う。

2　受理委員会は研究科委員会委員 3 名以上によって構成される。受理委員には原則として指導教員または推薦者を含むものとする。

3　研究科委員会は、前項の規定に関わらず、必要に応じて学内外の専門家を受理委員に選ぶことができる。

4　受理委員会は、受理審査の結果を研究科委員会に報告し、研究科委員会にて受理の可否を決定する。研究科委員会の議を経た博士論文は、学長が受理する。

5　博士後期課程を退学し、かつ第 15 条の各号の要件をすべて満たす者で、本学学位規程第 4 条第 2 項により、研究生として在学し、所定の審査手数料を納めて論文を提出した者は、本学学位規程第 3 条第 4 項による学位を請求する論文を提出することができる。

（学位論文の審査）

第 21 条　学位論文の審査は、研究科委員会の定める審査委員会がこれを行う。

（博士論文の審査委員会の構成）

第 22 条　博士論文の審査委員会は、研究科委員の中から選ばれた審査委員 3 名以上（うち 1 名は指導教員または推薦者）によって構成される。審査委員は、受理委員が兼ねることができる。

2　研究科委員会は、前項の規定に関わらず、必要に応じて学内外の専門家を博士論文の審査委員に選ぶことができる。

3　審査委員長は、審査委員会でこれを互選する。

（博士論文の審査方法）

第 23 条　博士論文の審査委員会は、論文内容ならびに関連資料の検討と口述試験を行う。

（博士論文の合否の議決）

第 24 条　研究科委員会は、前条の審査委員会の審査結果の報告を受けて、本学学位規程第 9 条第 2 項、第 3 項および第 4 項にもとづいて当該論文の合否の議決を行わなければならない。

（学長への報告）

第 25 条　研究科は、本学学位規程第 10 条第 2 項にもとづき、前条の議決を文章にて学長に報告しなければならない。

第 4 節　学位論文の公表

（博士論文要旨・論文審査概要の公表）

第 26 条　本学学位規程第 12 条により、本学から博士の学位を授与したときは、当該博士の学位を授与した日から 3 月以内に当該博士の学位に係る論文の内容の要旨および論文審査の結果の概要が公表される。

（学位論文の印刷公表）

第 27 条　本学学位規程第 13 条により、本学から博士の学位を授与された者は、当該博士の学位を授与した日から 1 年以内にその論文を印刷公表するものとする。ただし、当該学位を授与される前にすでに印刷公表したときは、この限りでない。また、やむを得ない事由がある場合には、本学の承認を受けて、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものをもってかえることができる。この場合、本学はその論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとされる。

付　則

この規程は、2019 年 4 月 1 日から施行する。

付　則（第 7 条、第 19 条改正）

この規程は、2021 年 3 月 17 日から施行する。

龍谷大学大学院 国際学研究科
学位論文審査委員選定基準に関する申し合わせ

制　　定　2019 年 3 月 15 日

1．修士論文の審査委員は、修士以上の学位を有する者または過去において以下の①～④に相当する著作 1 点以上を発表した者でなければならない。

①国際的または全国的規模の学会誌等に審査を経て掲載された単著論文

②国際的または全国的規模の学会誌等に審査を経て掲載された、自らを筆頭著者とする共著論文

③上記①②に準ずる水準と認められる、単著による学術的な著作

④上記①②に準ずる水準と認められる、共著による学術的な著作において分担執筆した論文相当の著述

2．博士論文の審査委員は、博士の学位を有する者または審査会の期日を起点として遡る過去 10 年の間に以下の①～④に相当する著作 2 点以上を発表した者でなければならない。

①国際的または全国的規模の学会誌等に審査を経て掲載された単著論文

②国際的または全国的規模の学会誌等に審査を経て掲載された、自らを筆頭著者とする共著論文

③上記①②に準ずる水準と認められる、単著による学術的な著作

④上記①②に準ずる水準と認められる、共著による学術的な著作において分担執筆した論文相当の著述

3．上記 1，2 における③④の著作の水準の認定は、研究科委員会がこれを行う。

付　則

この申し合わせは、2019 年 4 月 1 日から施行する。

龍谷大学大学院国際学研究科生の学部科目履修に関する内規

制　定　2019 年 3 月 15 日

（資　　格）

第 1 条　龍谷大学大学院国際学研究科に在籍し、国際学部開設科目の履修を志願するものの取扱いはこの内規による。

（出願手続）

第 2 条　学部開設科目の履修を志す者は、所定の願書に受講希望科目を記入し、国際学部教務課を経て、国際学研究科長に提出する（科目等履修生の出願手続に従うこと）。

（許　　可）

第 3 条　国際学研究科長は、前条の願書を受け付けたときは、国際学研究科委員会の議にもとづき、国際学部教授会の承認を経て、これを科目等履修生として許可する。

　ただし、学部開設科目の履修は、年間上限 5 科目（教職課程および資格取得課程は除く）とし、随意科目扱いとする（修了要件単位に算入しない）。

（履修料等）

第 4 条　履修料等は、1 単位につき 7,500 円とし、単位の計算方法は学則に準じる。

（履修料等免除）

第 5 条　入学時に国際学研究科委員会が教育指導上、修了の条件として在学中に単位修得するように指定した学部開設科目は履修料等を免除する。ただし、随意科目扱いとする（修了要件単位に算入しない）。

（科目等履修料免除）

第 6 条　中学校教諭一種免許状、高等学校教諭一種免許状を取得するに必要な科目を聴講する場合、教職に関する科目は履修料を免除し、教科に関する科目は有料とする。

　ただし、教職専門科目「介護等体験」「教育実習指導ⅡA（教育実習：中一種免必修）」「教育実習指導ⅡB（教育実習：高一種免必修）」の履修は、龍谷大学科目等履修生出願要項に準ずる（教育実習費については別途納入するものとする）。

2　国際学部において設置されている資格取得課程（教職課程を除く）の科目履修については、必修科目のみ履修料を免除する（実習費については別途納入するものとする）。

（履修対象外科目）

第 7 条　国際学部の定めるところにより、履修対象外科目は次のとおりとする。

（1）「演習」「語学」関係の授業科目

（2）前項で定める科目の他、科目の性格上履修を認めない科目

（3）本研究科入学前に既に単位を修得している科目

（単位認定・証明書発行）

第 8 条　聴講した科目の試験に合格した者は、その科目の所定の単位を与え、願い出により証明書を発行する。

付　則

　この内規は、2019 年 4 月 1 日から施行する。

国際学研究科の大学院学則第 9 条の 2 に定める
既修得科目の取り扱いに関する内規

制　　定　2019 年 3 月 15 日
一部改正　2021 年 3 月 17 日

第 1 条　龍谷大学大学院学則第 9 条の 2 の規定により、本学または他大学の大学院研究科を修了または退学し、国際学研究科に入学した者について教育上有益と認めるときには、すでに当該の大学院で修得した単位（以下「既修得単位という」。）を国際学研究科において修得したものとして認定することができる。

第 2 条　既修得単位の認定を希望する者は、単位認定願、認定を希望する科目が記載された学業成績証明書およびそのシラバスなどを指定の期日までに提出しなければならない。

第 3 条 既修得単位の認定は、15 単位を上限とし、国際学研究科委員会の議により決定する。

第 4 条 認定対象科目は、当該学生の専攻を考慮し、国際学研究科教務主任および認定対象科目担当教員が協議の上、認めた科目に限る。

付　則

この内規は、2019 年 4 月 1 日から施行する。

付　則（第 3 条改正）

この内規は、2021 年 4 月 1 日から施行する。

令和 2 年度以前の入学生については、従前の内規が適用され、第 3 条の既修得単位の認定は、10 単位を上限とする。

大学院国際学研究科特別専攻生規程

制　　定　2018 年 12 月 19 日

第 1 条　龍谷大学大学院学則第 36 条の 9 の規程により国際学研究科に特別専攻生制度をおく。

第 2 条　龍谷大学国際学研究科において特別専攻生として研究を継続できる者は、龍谷大学大学院国際学研究科の修士課程もしくは博士後期課程を修了した者、または国際文化学研究科の修士課程もしくは博士後期課程を修了した者で、さらに研究継続を希望する者とする。

第 3 条　特別専攻生となることを希望する者は、所定の願書に研究計画その他必要事項を記載し、国際学研究科長に願い出なければならない。
2　特別専攻生の許可は、国際学研究科委員会にて行う。

第 4 条　特別専攻生の期間は、1 学期間とする。
2　研究の継続を希望する者は、期間の更新を願い出ることができる。ただし、通算して 3 年を越えることはできない。

第 5 条　特別専攻生は、研修費として 1 学期 1 万円を大学に納入しなければならない。

第 6 条　特別専攻生は、国際学研究科委員会の定めるところにより、次の待遇を受けることができる。
(1)　担当教員の指導を受けること。
(2)　大学院学生の研究を妨げない範囲で、研究施設を利用すること。

第 7 条　特別専攻生には、身分証明書を交付する。

第 8 条　特別専攻生については、国際学研究科委員会において別に定めるところによるほか、龍谷大学大学院学則を準用する。

付　則
1　この規程は、2019 年 1 月 1 日から施行する。

「研究生」に関する規程

研究生の取扱いは、次の「大学院学則第 9 章の 2」に定める研究生の項によります。

第 36 条の 2　本学大学院博士後期課程に 3 年以上在学して退学した者で、さらに、大学院において博士論文作成のための研究継続を希望する者は、研究生として研究を継続することができる。

第 36 条の 3　研究生となることを希望する者は、所定の願書に研究計画その他必要事項を記載し、当該研究科長に願出なければならない。
2　研究生は、当該研究科委員会の選考により、学長が決定する。

第 36 条の 4　研究生の期間は、1 学年間又は 1 学期間とする。
2　研究の継続を希望する者は、期間の更新を願出ることができる。ただし、通算して 3 年を超えることはできない。

第 36 条の 5　研究生は、研修費として年額 2 万円を大学に納入しなければならない。ただし、理工学研究科については、年額 3 万円とする。
2　1 学期間在籍の場合、研修費については、前項に定める年額の 2 分の 1 の金額を納入する。

第 36 条の 6　研究生は、当該研究科委員会の定めるところにより、次の待遇を受けることができる。
（1）教授の指導を受けること。
（2）大学院学生の研究を妨げない範囲で、研究施設を利用すること。
（3）大学院学生の研究を妨げない範囲で、特定の科目を聴講すること。

第 36 条の 7　研究生には、身分証明書を交付する。

第 36 条の 8　研究生については、別に定めるところによるほか、本学則を準用する。ただし、第 17 条はこれを除く。

専任教員プロフィール

	教　員　氏　名	修士所属	博士所属	研究室	掲載頁
あ	泉　文明	IC	IC	和 - 410	63
か	Cardonnel, Sylvain	IC	IC	和 - 411	64
	Carlos, Maria Reinaruth Desiderio	IC	IC	和 - 415	66
	河合　沙織	GS	GS	和 - 426	68
さ	斎藤　文彦	GS	GS	和 - 434	69
	佐野　東生	IC	IC	和 - 408	70
	Salz, Jonah	IC	IC	和 - 403	71
	澤西　祐典	IC	IC	和 - 421	73
	史　彤嵐	IC	IC	和 - 406	74
	清水　耕介	GS	GS	和 - 431	75
	徐　光輝	IC	IC	和 - 418	77
	杉本バウエンス・ジェシカ	IC	IC	和 - 422	78
	鈴木　滋	IC	IC	和 - 412	79
た	瀧口　順也	GS	GS	和 - 432	80
	瀧本　眞人	LC	GS	和 - 436	81
	嵩　満也	IC	IC	和 - 413	82
	Terhune, Noel Mitchell	IC	IC	和 - 402	83
	Chapple, Julian	LC	GS	和 - 437	84
	陳　慶昌	GS	GS	和 - 433	86
	DEBNAR, Milos	IC	IC	和 - 405	88
	友永　雄吾	IC	IC	和 - 401	89
な	中根　智子	GS	GS	和 - 435	91
	長尾　明子	LC	GS	和 - 427	92
	長嶺　寿宣	LC	GS	和 - 424	96
は	朴　炫国	IC	IC	和 - 428	98
	林　則仁	IC	IC	和 - 430	99
	早島　慧	IC	IC	和 - 407	100
	Pigott, Julian	LC	GS	和 - 438	102
	久松　英二	IC	IC	和 - 420	104
	平塚　貴晶	LC	GS	和 - 429	106
	Furmanovsky, Michael	IC	IC	和 - 416	109
	福山　泰子	GS	GS	和 - 425	110
	古川　秀夫	IC	IC	和 - 419	111
	Bradley, William S.	GS	GS	和 - 440	112
ま	松居　竜五	IC	IC	和 - 423	113
	松村　省一	LC	GS	和 - 439	115
や	八幡　耕一	IC	IC	和 - 417	116
ら	劉　虹	IC	IC	和 - 404	117

IC …… 国際文化学専攻
GS …… グローバルスタディーズ専攻
LC …… 言語コミュニケーション専攻
和 …… 和顔館

泉（いずみ）　文明（ふみあき）

略　歴

博士（文学）国際交流基金等による日本国内外の日本語教育に従事。1996 年本学国際文化学部に講師として着任。2000 年本学国際文化学部助教授に就任（後に文部科学省令により“准教授”と職位名称変更）。2008 年本学国際文化学部（現国際学部）教授に就任。国際交流基金・国立国語研究所・国際文化フォーラムと連携して、日本語の研究と教育に携わる。京都府・京都市と連携して、京都学講座の企画・実践・推進及び出版に携わる。

研究テーマ

日本語学・日本語教育研究・文化と表現・日本文化論・京都研究

所属学会

日本語教育学会･韓国日本語教育学会･日本国際文化学会･日本比較文化学会･国際文化フォーラム・ことわざ学会・日本語誤用例研究会・京都民俗学会・近代語研究会・国語史研究会

最近の研究業績

《著　書》

『京ことばとその周辺』2012. 晃洋書房。

『葵祭に行くっ』2017『祇園祭に行くっ』2018『時代祭に行くっ』2019（以上 3 部京都市産業観光局 MICE より継続的に出版中）。

『京ことばの心髄にせまる．宗教部報りゅうこく連載中』。「京都とアジア : いにしえからの交流をひもとく」（『文化交流のエリアスタディーズ』所収）．2011 ミネルヴァ書房。

『日本語学を学ぶ人のために』（共）．2009 世界思想社。

『新しい日本語研究を学ぶ人のために』（共）．2009 世界思想社』。

『韓国語 動詞と形容詞の使い方辞典』（共）2008, 三省堂。

『基礎から学ぶ語学シリーズ 大きく書いてしっかり覚える韓国語入門』2007, 学研。

『すぐに役立つ韓国語会話・フレーズ―旅と暮らしの日常語』2007, 学研。

《論　文》

「京都の寺社にまつわる言い回し 2021（『ことわざ学会誌 9』）。

「日ロ言語教育交流小考」2017（『国際文化研究』17）。

「植民地支配下および解放後の日本語教育 : 日本語教科書と聞取りをてがかりに．（『龍谷紀要 29』）」。

「日本語教師という職業 : 概要と道のり」2012（『国際文化ジャーナル 16』）。

「海外日本人学校に期待される文化理解力養成についての考察（『国際文化研究 16』）。

「京都の社会的可変性と不変性の考察」2012（『比較文化研究 101』）。

「京ことばの婉曲表現に関する考察」2011（『比較文化研究 96』）。

「似て非なる漢字・漢語」2003（『国際文化フォーラム通信誌』）。

「仮名の機能とハングルの機能」（『表現学会 & 韓国日本文化学会』）。

「情報伝達と漢字仮名」（『日本文化研究 6』）。

「高校国語教科書に見る複表記」2007（『比較文化研究 76』）。

《事典・辞典》

『新版日本語教育事典』（共）2005 大修館書店。

『キャリア開発ビジネスサポート 5 言語対応辞典』（共）2007 英光社。

《教科書》

『大学大学院総合日本語』（共）2002．学研。

『日本語Ⅰ』（共）2015 韓国高等学校国定教科書。

『日本語Ⅱ』（共）2015 韓国高等学校国定教科書。

『中国中高校日本語教師研修テキスト』（共）2001．国際文化フォーラム。

《報告書》

『東アジア地域における 1945 年以降の日本語教育の自律と変容に関する調査研究．文部科学省科学研究費研究成果報告書 2008』。

『中国語朝鮮語話者の日本語漢語語彙の学習を支援するための基礎的研究．文部科学省科学研究費研究成果報告書 2004』。

Cardonnel, Sylvain（カルドネル シルヴァン）

略　　歴	文学修士号（哲学）〔パリ第 12 大学〕。 博士号（哲学）〔トゥールーズ・ル・ミライユ大学〕
研究テーマ	西田幾多郎哲学、京都学派の（再）評価、風土学、近代の超克 フランス語圏文学における日本文化論、日本に対する言説の変成 赤瀬川原平が提言した超芸術トマソンにおける「他力思想」及び「日本的」美意識
最近の研究業績	＜論　文＞ *Anatomie du tomason, observation urbaine et état de conscience modifié,*（トマソンの解剖学、路上観察と意識の変化）雑誌 TRANSES（ 6 号）DUNOD 出版、France、2019 年 *Le récit par Paul Nicolas Bouvier du voyage de la Suisse au Japon à travers articles et photographies parus dans des revues japonaises* (1955-56) (ニコラ・ブーヴィエの 1955 – 56 年の間に日本の雑誌に掲載された記事及び写真をまとめたスイスから日本までの旅行記について) 国際文化研究 (19 号) 2015 年 *Nishida contre Numa : Le Japon et les démons de la modernité* 3/4 国際文化研究 (16 号) 2012 年 *Nishida contre Numa : Le Japon et les démons de la modernité* 2/4 国際文化研究(14 号) 2010 年 *Nishida contre Numa : Le Japon et les démons de la modernité* 1/4 国際文化紀要 (13 号) 2009 年 「欧米社会における CM の表現様式の変化―ポストモダンの視点から―」、ミネルヴァ書房、2009 年 ＜翻訳　仏訳＞ Nishida Kitarô, *Logique du lieu et vision religieuse du monde,* (essai, 1999, Éditions Osiris) en collaboration avec Sugimura Yashuhiko. Murakami Ryu, *Lignes* (roman, 2000, Éditions Philippe Picquier) Murakami Ryu, *Parasites* (roman, 2002, Éditions Philippe Picquier) Murakami Ryu, *Ecstasy*, (roman, 2003, Éditions Philippe Picquier) Murakami Ryu, *Melancholia*, (roman, 2003, Éditions Philippe Picquier) Ikeda Kayoko, *Si le monde était un village de 100 personnes* (essai, 2006, Éditions Philippe Picquier) Murakami Ryu, *Love & Pop* (roman, 2009, Éditions Philippe Picquier) Murakami Ryu, *Chansons populaires de l' ère Showa* (roman, 2011, Éditions Philippe Picquier) Tsuji Hitonari, *En classe tôt le matin*, et autres nouvelles (4 nouvelles, 2003, magazine « Je Bouquine », Fayard) Murakami Ryu, La fille au nez tordu (novella, 2005, Éditions Inventaire/Invention). Oé Kenzaburô, « Les ambiguités de la nostalgie » (table ronde, 2005, in *Nostalgie et autres labyrinthes*, Cécile Defaut. Numa Shôzo, *Yapou, bétail humain*, volume 1 (roman, 2005, Éditions L. Viallet). Numa Shôzo, *Yapou, bétail humain*, volume 2 (roman, prix Sade 2006, 2006, Éditions L. Viallet). Numa Shôzo, *Yapou, bétail humain*, volume 3 (roman, 2007, Éditions L. Viallet). Egawa Tatsuyo, *Yapou : bétail humain #1* (manga, 2007, Éditions Kami). Levy Hideo, *Stars and Stripes*, (roman, 2010, Japanese Literature project publishing). Motoya Yukiko, *Naufrage* (théatre, 2010, Éditions de l' Association des auteurs-dramaturges japonais (*nihongekisakkakyokai shuppan*)).

Takahashi Genichirô, *La centrale en chaleur* (roman, 2013, Books Editions).
Maekawa Yutaka, *Creepy* (roman, 2017, Éditions d' Est en Ouest).
Enjoe Toh, *Arlequinus arlequinus* (roman, 2020, Éditions de la ronde de Nuit).
Enjoe Toh, *Chronique de Matsunoe* (roman, 2020, Éditions de la ronde de Nuit).
Yorifuji Bunpei, *Le dessin et les mots* (essai, 2021, Éditions B42).

＜新聞記事等＞
「トマソンは観光を変えるか」、京都新聞、2019 年 2 月 15 日
「消滅する京町家、街並み、トマソン、実在」京都新聞、新年号 2021 年
https://pr.kyoto-np.jp/campaign/nwc_wise/message/culture/k11.html
Kyoto-tomason: the hunt for hidden Hyperart , in Kyoto Journal (100 号), Japan, 2021 年
https://www.kyotojournal.org/kyoto-notebook/kyoto-tomason-the-hunt-for-hidden-hyperart/

Carlos, Maria Reinaruth Desiderio
（カルロス　マリア　レイナルース　デスィデリオ）

略　　歴	1994 年　神戸大学大学院経済学研究科博士前期課程修了（経済学修士） 1995 年　デ・ラ・サール大学経済学部教員兼ユチェンコ日比関係研究所（現ユチェンコセンター）研究員に就任 1998 年　神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程編入 2001 年　神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程修了（博士「経済学」） 2001 年　神戸大学大学院国際協力研究科に助教授として着任 2003 年　本学国際文化学部に助教授として着任 2012 年　本学国際文化学部　教授
研究テーマ	国際労働移動の経済分析 （１）高齢社会日本における外国人労働者の受け入れ （２）東南アジア・日本間の国際労働移動 （３）在日フィリピン人労働者（とりわけ介護士と英語教師） （４）在日フィリピン人コミュニティーの課題（高齢化など）
所属学会	経済政策学会
最近の研究業績	(主な論文) (1) Carlos, M.R.D. and Plantilla, J. (Forthcoming in 2022) Where do overseas Filipinos intend to retire? The case of Filipinos in Chugoku Region, Japan. *Asian and Pacific Migration Journal* Sage Publication. (2) Carlos, M. R. D. and Y. Suzuki (2020), 'Japan' s Kaigoryugaku Scheme: Student Pathway for Care Workers from the Philippines and Other Asian Countries' , in Tsujita, Y. and O. Komazawa (eds.), *Human Resources for the Health and Long-term Care of Older Persons in Asia.* Jakarta: ERIA, pp. 1-33. (3) Carlos, Ma. Reinaruth D. and Jefferson R. Plantilla (2020) "COVID-19 Crisis and Filipinos in Kansai" in *Asia-Pacific Human Rights Center FOCUS* September 2020 Volume 101, https://www.hurights.or.jp/archives/focus/section 3/2020/09/covid-19-crisis-and-filipinos-in-kansai.html. (4) Carlos, M.R.D. (2014) " Multiculturalism as a Determinant of the Transit and Final Destinations in the Stepwise Migration of Filipino Nurses" in *Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific Migration, Language and Politics*, (Shimizu, S. and Bradley, W. eds), Palgrave Macmillan, pp. 162-189. 2014. (5) Carlos, M.R.D. (2013) "The Stepwise International Migration of Filipino Nurses and Its Policy Implications for Their Retention in Japan," *Afrasia Working Paper Series no.23 (2013)*, Afrasian Research Centre, Ryukoku University, 24p. (6) Carlos, M.R.D. (2010)「日本の労働市場におけるフィリピン人介護労働者の三つの軌跡」(Title in English: "Three Pathways of Filipino Careworkers' Participation in Japan' s Labor Market") in『越境するケア労働』*Careworkers Across Borders* (Sato, M. ed.) Nihon Keizai Hyouronsha Publishing, pp. 39-60.

(7) Carlos, M.R.D., Elizabeth R. Roxas and Yurika Suzuki (2017) “Human Resource Development and International Mobility of Professional Nurses: The Philippine Perspective” in *Human Resource Development and the Mobility of Skilled Labour in Southeast Asia: The Case for Nurses* (Tsujita, Y. ed). JETRO-Bangkok and IDE- Jetro Bangkok Research Center (BRC) Research Report No. 19, pp. 6-96. Downloadable from http://www.ide.go.jp/library/English/Publish/Download/Brc/pdf/19.pdf

(8) Carlos, M.R.D. (2017)「フィリピンにおける人身取引と法――予防・取締りの法体制と実態”」(青木理恵子訳) (Title in English: Human Trafficking in the Philippines and the Law - Trends in Prevention, Prosecution and Legal Provisions” translated by Aoki, Eriko) in『人の国際移動と現代日本の法 : 人身取引・外国人労働・入管法制』*Labor Mobility and Laws in Contemporary Japan* (Okubo, S., Hashizume, M. and Yoshida, M. eds). Nihon Hyouronsha Publishing, pp.137-160.

(9) Carlos, M.R.D. (2014) “Multiculturalism as a Determinant of the Transit and Final Destinations in the Stepwise Migration of Filipino Nurses” in *Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific Migration, Language and Politics*, (Shimizu, S. and Bradley, W. eds), Palgrave Macmillan, pp. 162-189. 2014.

(10) Carlos, M.R.D. (2013) “The Stepwise International Migration of Filipino Nurses and Its Policy Implications for Their Retention in Japan,” *Afrasia Working Paper Series no.23* (2013), Afrasian Research Centre, Ryukoku University, 24p.

(11) Carlos, M.R.D.(2013) “The Philippines’ Experiences as a Migrant-Sending Country: Trends, Issues and Challenges,” in Pauline Kent, Ma. Reinaruth D. Carlos, Masako Otaki and Shincha Park (eds.), *International Migration and (Re) Integration Issues in the Philippines, Research Series 3 (2013)*, Afrasian Research Centre, Ryukoku University, 2013, pp.1-21.

河合（かわい）　沙織（さおり）

略　　歴	2004 年　東京外国語大学 外国語学部 卒業 2006 年　神戸大学大学院 国際協力研究科 博士課程前期課程 修了 修士（経済学） 2006 年　独立行政法人国際協力機構（JICA）技術協力プロジェクト「東北ブラジル健康なまちづくりプロジェクト」ブラジル連邦共和国ペルナブコ連邦大学 公衆衛生社会開発センター インターン 2010 年　在ブラジル日本国大使館 専門調査員（経済班） 2014 年　神戸大学大学院 国際協力研究科 博士課程後期課程 修了 博士（学術） 2015 年　龍谷大学 国際学部（講師）着任
研究テーマ	ラテンアメリカ経済，ブラジル地域研究
所属学会	ラテン・アメリカ政経学会，日本ラテンアメリカ学会，日本国際経済学会
最近の研究業績	「ブラジル経済の新しい秩序と進歩」，近田亮平編『躍動するブラジル－新しい変容と挑戦－』，アジア経済研究所，アジ研選書 No.43，pp.53-78，2013 年（浜口伸明との共著）。 「ブラジルの地域間格差と労働市場」，博士論文，2013 年。 「ブラジル正規労働市場の拡大と地域的特徴」『ラテン・アメリカ論集』，ラテン・アメリカ政経学会，第 46 号，pp.19-36，2012 年。 「ブラジル北東部の雇用－ RAISMigra にもとづく検証－」『ラテンアメリカ・レポート』，アジア経済研究所，第 28 号，pp.25-40，2011 年。 「ブラジルにおける労働市場柔軟化の影響に関する実証分析」『ラテン・アメリカ論集』，ラテン・アメリカ政経学会，第 43 号，pp.55-72，2009 年。 「リオデジャネイロ州の産業集積と都市の成長」『ラテン・アメリカ論集』，ラテン・アメリカ政経学会，第 40 号，pp.21-38，2006 年（浜口伸明との共著）。

斎藤（さいとう）　文彦（ふみひこ）

略　　歴	1961 年生まれ 1984 年　同志社大学法学部法律学科卒業　法学士　杉本峰子スカラー（成績優秀賞） 1984 年　アメリカ　アマースト・カレッジ　新島スカラーとして 3 年生に編入 1986 年　アメリカ　アマースト・カレッジ（Amherst College）アメリカ研究学部卒業 B.A. ファイ・ベタ・カパ賞並びにマグナ・クム・ラウデ賞（共に成績優秀賞）受賞 1986 年　アメリカ　イェール大学大学院（Yale University）国際関係論修士課程入学 アマースト大学、イェール大学大学院奨学生 1988 年　アメリカ　イェール大学大学院国際関係論卒業開発経済政策専攻修士号 M.A. 1996 年　龍谷大学　国際文化学部に着任 2002 年　龍谷大学　経済学研究科　博士号授与 2006 年　龍谷大学　国際文化学部教授に就任
研究テーマ	国際開発論、開発倫理学、国際協力研究、サスティナビリティー研究
所属学会	日本国際開発学会会員、日本アフリカ学会会員、国際公共政策学会会員
最近の研究業績	＜著　書＞ 『現場から考える国際援助：国際公務員の開発レポート』単著 日本評論社 1995 年 『参加型開発：貧しい人々が主役となる開発へ向けて』編著 日本評論社 2002 年 『Decentralization and Development Partnerships: Lessons from Uganda』単著 Springer-Verlag, Tokyo 2003 年、2004 年度日本国際開発学会賞受賞 『国際開発論：ミレニアム開発目標による貧困削減』単著　日本評論社　2005 年 4 月 『Foundations for Local Governance: Decentralization in Comparative Perspective』編著 Heidelberg, Germany: Physica-Verlag 2008 年 1 月 「Decentralization」in『Sage Handbook of Governance』edited by Mark Bevir, pp 484-500. 2010 年 12 月 『「多文化共生」を問い直す－グローバル化時代の可能性と限界』権五定・斎藤文彦編著 日本経済評論社　2014 年 10 月 ■ Web サイト 斎藤文彦研究室　Office of Fumihiko SAITO http://www.world.ryukoku.ac.jp/~fumis96/index.html

佐野（さの）　東生（とうせい）

略　　歴

1965 年生まれ
1988 年　慶應義塾大学文学部卒業
1994 年　ハーヴァード大学中東研究科修士課程修了
1995 年　在イラン日本大使館専門調査員就任
1999 年　財団法人中東調査会研究員就任
2001 年　慶應義塾大学文学研究科博士課程単位取得
　　外務省国際情報局専門分析員（非常勤）就任
2002 年　龍谷大学国際文化学部助教授就任
2007 年　トルコ国立ボアジチ大学客員研究員
2011 年　博士（法学）取得（龍谷大学）
　　龍谷大学国際文化学部教授

研究テーマ

イスラーム地域研究、西アジア近現代史

所属学会

日本オリエント学会、日本中東学会、日本宗教学会、International Society for Iranian Studies

最近の研究業績

＜著　書＞
『近代イラン知識人の系譜』　ミネルヴァ書房　2010 年
＜共編著＞
“Proceedings of the First AFC International Symposium” Nobuko Nagasaki, Hisashi Nakamura and Tosei Sano, eds., The International Context of Conflicts in the Middle East and Asian Approaches to Conflict Resolution, 4-5 March 2006, Afrasian Centre for Peace and Development Studies, Ryukoku University
『文化交流のエリアスタディーズ』　ミネルヴァ書房　2011 年
Tosei Sano Shin Nomoto Kei Takahashi(tr.) “Farzardam chonin Bash”『我が子よ、かくあれ』（『雄弁の道』手紙第 31 番・聖アリーの訓戒のアラビア語から翻訳）Bonyad-e Nahj-ol-Balagheh（雄弁の道研究所）　コム　2015（予定）
＜論　文＞
「イラン大統領選におけるハータミー師の勝利―その前後の状況と同師の思想を巡って―」『イスラム世界』52 号 pp.86-99（社）日本イスラム協会　1999 年 2 月
「国勢調査に基づくイラン社会の変化」『中東研究』451 号 pp.26-33（財）中東調査会　1999 年 5 月
「タキーザーデとイラン立憲思想（上）（下）」『史学』69 巻 2・3・4 号 pp.95-114, pp.127-154 慶應義塾大学三田史学会　2000 年 3・5 月
「米国の対イラン政策」『国際資源』308 号 pp.15-19 外務省　2000 年 8 月
「イラン第一次立憲制期（1906 － 1908）におけるタキーザーデの政治活動」『国際文化研究』7 号　龍谷大学国際文化学会　2003 年 3 月
「イラン立憲革命期に至るアルメニア人イェプレム・ハーンの活動―イラン立憲制の起源と展開におけるマイノリティの役割に関する一考察」『国際社会文化研究所紀要』9 号 pp.265-288　2007 年 5 月　龍谷大学
「イラン立憲革命再考―第二次立憲制期（1909-11）におけるタキーザーデの活動をめぐって」『イラン研究』5 号　pp.217-233　2009 年 3 月　大阪大学
「タジキスタンのイスラーム化とタジク文化の創生について―中央アジア（タジキスタン）における仏教と異思想の交渉に関する調査･研究―」科学研究費補助金「中央アジア（タジキスタン）における仏教と異思想の交渉に関する調査・研究」の助成による成果報告『ミトラ仏と覩貨邏の仏教』pp.73-84　2009 年 3 月
＜その他＞
「文明間の対話」『世界』679 号 pp.71-76 岩波書店　2000 年 9 月
「イランの内政と外交」『CISTEC ジャーナル』73 号 pp.13-29 CISTEC（安全保障貿易情報センター）2001 年 9 月
“A Field Note on the Shi'ite World from Central Asia to Turkey”,『国際文化ジャーナル』9 号　2005 年 3 月
Book Review : “The Promised Savior in Buddhism” by Abu al-Qasem Ja,fari

コメント

　イスラーム期のイラン文化を基に、イラン近現代史を中心に研究しています。これに関わるイスラーム文化地域研究にも関心が深いです。

Salz, Jonah（サルズ ジョナ）

略歴	1985 年　M.A. New York University, Performance Studies 1993 年　Visiting professor, Franklin & Marshall College, Lancaster, PA USA 1996 年　本学国際文化学部に助教授として着任 1997 年　Ph.D. New York University, Performance Studies, USA 2002 年　本学国際文化学部教授に着任 2003 年　Research fellow, Center for the Humanities, Wesleyan University, USA 2008 年　Visiting research fellow, School for African & Asian Studies (SOAS), London, UK 2016 年　Visiting scholar, U. California, Berkeley, USA
研究テーマ	伝統芸能の国際化；通訳／翻訳，intercultural theatre
所属学会	Association for Theatre in Higher Education/Association for Asian Performance、日本演劇学会、Association for Asian Studies, International Federation for Theatre Research Association for Asian Studies Performance Studies International
最近の研究業績	＜著　書＞ *Roles of Passage: Coming of Age as a Kyogen Actor.* Ph.d. dissertation, UMI publications, 1997. *A History of Japanese Theatre* (Editor), Cambridge, 2016. ＜論　文＞ “Pidgin Creole Performance Experiment and the Emerging Entre-Garde,” in *Noh and Kyogen in the Contemporary World*. James R. Brandon, ed. Honolulu: University of Hawaii Press, 1997: 210-242. “Beyond Tradition: Transmission, Reconstruction, Innovation in Traditional Japanese and Korean dance and theatre,” Intercultural Studies No. 3（1999）: 178-193. “Samuel Beckett’s Act Without Words in Kyogen Style,” in Ian Watson, ed. *Actor Training Interculturally.* London: Harwood, 2001: 133-152. “Moulding clay, bottling bubbles: Actor training systems compared.” International Society and Culture Review No. 6（2004）: 1-23. “Subtitles subtleties: Translating Noh and Kyogen in New York” Intercultural Studies 9（2005）. 「狂言の笑いをどう英訳するか――翻訳喜劇のさまざまな戦略」『芸術メディアのカルチュラルスタディーズ』佐々木英昭、松居竜五編集　京都　ミネルヴァ書房　2009 年 : 87-111. Jonah Salz, Asako Soga, Masahito Shiba (2010) “Tradition meets Technohlogy: Integrating Japanese Noh & New Technology in Shakespeare’s Macbeth.” BST: Body, Space, & Technology Journal (8.2) http://people.brunel.ac.uk/bst/vol0802/cover.html “Translating Traditional Transmission: Challenges of Interpreting Noh Practice.” *Translation Studies in the Japanese Context.* Nana Sato-Rossberg and Kozo

Watanabe, ed. Ritsumeikan University Ars Vivendi No. 15: 46-53.

Kyôgen comedies' embedded dramaturgy: 13 lessons for theater practitioners 狂言の深いトラマツルキー―役者への十三の教え― Ryukoku University Intercultural Studies No. 18 (2013): 31-44.

"Noh-kyogen influence, dramaturgy and mise-en-scene in the short plays of Samuel Beckett" in Kevin Wetmore, ed. Resonances and Influences, Irish and Japanese theatre. Mellen Press: 69-117 (2014).

"Japanese traditional theatre," "Japanese intercultural theatre," Routledge Handbook to Asian Theatre, Siyuan Liu, ed. 2016.

"Conflicted loyalties: in "English Kabuki" : Portland's English Kabuki The Revenge of the 47 Samurai (Kanadehon Chushingura) Asian Theatre Journal 35:1 (Spring 2018): 133-153.

＜翻訳・PLAYS＞

『熊野』"Japannequins: a New Bilingual Kyogen Based on the Traditional Kyogen Roku Jizo (Six Jizo)" Asian Theatre Journal 24:1 (2007): 124-143.

"*Mikazuki* (Winnowing Love)." Translation and introduction. Asian Theatre Journal 24:1 (2007): 61-73.

『スーパー狂言』*Mudskippers (Mutsugoro)*, co-translated with Tomoko Onabe, in *Towards a Modern Japanese Theatre Revisited*, Keiko McDonald, David Jortner, and Kevin Wetmore ed., Kentucky: Lexington Books, 2006: 269-269.

Lap-singing (Neongyoku), translation of traditional kyogen, in Intercultural Review No. 9 (2005): 48-52.

Yuya, a modern noh play by Yukio Mishima, co-translated with Laurence R. Kominz, in J. Thomas Rimer and Van Gessell, ed. *The Columbia Anthology of Modern Japanese Literature: From 1945 to the Present* (Modern Asian Literature Series) ed. Columbia University 2007: 491-501.

＜その他＞

Translation and Adaptation, videos *This is Noh* (Kyoto Noh Association), *This is Kyogen* (Shigeyama Akira International Projects)

能法劇団主宰、1981-

Traditional Theatre Training Program Director, Kyoto 1984-2015

澤西（さわにし）　祐典（ゆうすけ）

略　　歴	2010 年　京都大学 文学部 卒業 2012 年　京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士前期課程修了 修士（人間・環境学） 2015 年　京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程修了 博士（人間・環境学） 2015 年　別府大学文学部専任講師（日本近現代文学） 2019 年　龍谷大学 国際学部（講師）着任
研究テーマ	日本近代文学、比較文学、芥川龍之介
所属学会	日本近代文学会、国際芥川龍之介学会
最近の研究業績	＜著　書＞ 『芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚』（柴田元幸との共編訳）岩波書店、2018 年 『芥川龍之介ハンドブック』（共著）鼎書房、2015 年 『芥川龍之介と切支丹』（共著）翰林書房、2014 年 ＜論　文＞ 「江戸東京博物館所蔵芥川龍之介関連資料解題（5）「プロレタリア文芸」について」（共著）『芥川龍之介研究』第十二号、2018.7 「江戸東京博物館所蔵芥川龍之介関係資料解題（4）「誘惑」原稿翻刻と校異・翻刻者ノート」（共著）『芥川龍之介研究』第十一号、2017.7 「江戸東京博物館所蔵芥川龍之介関連資料解題（1）「馬の脚」自筆原稿」（単著）『芥川龍之介研究』第十号、2016.8 「英文との対照から見た芥川龍之介の文体：三人称代名詞「彼 / 彼女 / 彼等」、文末詞「である」について」（単著）『国語国文』第八十五巻第六号、2016.6 「カリフォルニア大学バークレー校 C. V. スター東アジア図書館所蔵・芥川龍之介「母」原稿について」（単著）『別府大学国語国文学』第五十七号、2015.12 「芥川龍之介と卒業論文'Young Morris'――旧蔵書中のウィリアム・モリス関連書籍を手掛かりに――」（単著）『京都大学 国文学論叢』第三十四号、2015.9 「The Modern Series of English Literature について――テクストの特色、第七・八巻の出典、「近頃の幽霊」・「南京の基督」との関わりを中心に――」（単著）『芥川龍之介研究』第八号、2014.7 「芥川龍之介旧蔵書の洋書調査・補遺」（単著）『芥川龍之介研究』第七号、2013.9 「芥川龍之介におけるバーナード・ショー受容について――受容遍歴・東京帝国大学時代・「西方の人」を中心に――」（単著）『国語国文』第八十一巻第四号、2012.4

史　彤嵐（しとんらん）

略　　歴	1968 年生まれ 1991 年　北京語言大学言語文学学部外国人に対する中国語教育学科卒業 1998 年　大阪外国語大学大学院外国語学研究科東アジア語学専攻修士課程修了（修士） 2001 年　関西大学大学院文学研究科中国文学専攻博士後期課程単位修得退学 2001 年　関西大学で中国語非常勤講師として勤務 2003 年　本学国際文化学部に専任講師として着任 2006 年　関西大学大学院文学研究科中国文学専攻博士後期課程　修了　博士（文学）学位取得 2007 年　本学国際文化学部准教授 2014 年　本学国際文化学部教授
研究テーマ	中国語学、日本人に対する中国語教育
所属学会	日本中国語学会、日本中国語教育学会、現代中国語研究会
最近の研究業績	＜著　書＞ 『ちょっとまじめに中国語』（共著）　同学社　2001 年 『动作行为性状与结果的表达方式研究』　好文出版　2008 年 『北京びより』中級中国語テキスト　共著　好文出版　2009 年 ＜論　文＞ 「ＡＶ格式与ＶＡ格式的语义差别」『範疇語法論文集』No.1　1998 年 「Ｖ得Ａ構文について」『中国語学』第 246 号　1999 年 「与重音有关的句法现象」『現代中国語研究論集』　1999 年 「形容詞と関連のある命令表現」『関西大学中国文学会紀要』第 22 号 2001 年 「「Ｖ得Ｃ」構文における“得”の文法機能」『中国語学』第 248 号　2001 年 「形容詞と“一点儿”をめぐって」『関西大学中国文学会紀要』第 23 号 2002 年 「关于“她笑得像朵正开的花儿”类Ｖ得Ｃ」『関西大学中国文学会紀要』第 24 号　2003 年 「试说“他的汉语说得很好”和“他汉语说得很好”」『龍谷大学国際文化研究』第 8 号　2004 年 「描写型Ｖ得Ａ与评价型Ｖ得Ａ」『関西大学中国文学会紀要』第 26 号　2005 年 「形容词重叠式作“得”后补语和状语－由“她把茶沏得酽酽的。”及“她酽酽地沏了一杯茶。”两类句式说起」『中国語学』第 252 号　2005 年 「从认知语言学的角度看现代汉语中“生气”的表达方式」『龍谷大学国際文化研究』第 10 号　2006 年 「“玩个痛快”“忙得个不亦乐乎”类补语考察」『中国語教育』第 4 号　2006 年 「试论“笑弯了腰”类“ＶＣ了”与“笑得弯下腰来”类“Ｖ得Ｃ”的功能差异」『走向世界的汉语教学探索――第四届对外汉语国际学术研讨会论文集』　北京语言大学对外汉语研究中心编　2008 年 「试考察“好＋一＋量词＋ＮＰ”类感叹句式」『龍谷大学国際文化研究』第 13 号　2009 年 「试论“除非”句的语篇功能」《中国語教育》第 8 号，p203-211，日本中国語教育学会　2010 年 「试论“对面有一对男女走过来”类表“出现”的“有”字句」《中国語学》第 257 号，p147-160，日本中国語学会　2010 年 「汉日言语行为的文化差异分析―以问候、致谢及道歉为例―《国際文化研究》第 17 号，p35-40，龍谷大学国際文化学会　2013 年 「关于表“可能”的过去否定式」《中国語文法研究》2013 年卷，中国語文法研究会 p115-128，朋友書店　2013 年 「关于“肯”的语义语用特点及与“愿意”的区别」《中国語教育》第 13 号，P131-146，中国語教育学会　2015 年 「谈“不好意思”及相关教学」《中国文学会紀要》第 37 号，p107-119，関西大学中国文学会　2016 年 「现代汉语中对陌生人的称呼」《中国語文法研究》2018 年卷，中国語文法研究会 p257-272，朋友書店　2018 年

清水（しみず）　耕介（こうすけ）

略　　歴	1965 年生まれ 1993 年　西南学院大学大学院経済学研究科修士課程修了　（経済学修士） 1998 年　ニュージーランド国立ヴィクトリア大学政治学国際関係学大学院博士課程修了（Ph.D. in International Relations） 1998 年　関西外国語大学短期大学部専任講師 1999 年　関西外国語大学国際言語学部専任講師 2004 年　関西外国語大学国際言語学部助教授 2005 年　本学国際文化学部助教授 2011 年　本学国際文化学部教授
研究テーマ	国際政治経済理論、グローバル市民社会論、ジェンダー論、ポスト構造主義
所属学会	日本政治学会、日本国際政治学会、日本平和学会、International Studies Association（US）, British International Studies Association（UK）
最近の研究業績	＜論　文＞ Kosuke Shimizu (2021), ‘Buddhism and the Question of Relationality in International Relations’ , *Uluslararasi Iliskiler* 18(70): 29-44 Kosuke Shimizu and Sei Noro (2021), ‘Political Healing and Mahāyāna Buddhist Medicine: a critical engagement with contemporary international relations’ , *Third World Quarterly*, (online first) Kosuke Shimizu and Sei Noro (2021), ‘An East Asian Approach to Temporality, Subjectivity, and Ethics: bringing Mahayana Buddhist Ontological ethics of Nikon into international relations’, *Cambridge Review of International Affairs* (online first) Tamara A Trownsell, Arlene B Tickner, Amaya Querejazu, Jarrad Reddekop, Giorgio Shani, Kosuke Shimizu, Navnita Chadha Behera, Anahita Arian (2021), ‘Differing about Difference: Relational IR from around the World’. *International Studies Perspectives* (online first) Marcos S. Scauso, Garrett FitzGerald, Arlene B. Tickner, Navnita Chadha Behera, Chengxin Pan, Chih-yu Shih and Kosuke Shimizu (2020), ‘COVID-19, Democracies, and (De)Colonialities’, *Democratic Theory: An Interdisciplinary Journal* 7(2), 82-93 Ching Chang Chen, Kosuke Shimizu (2019), ‘International relations from the margins: the Westphalian meta-narratives and counter-narratives in Okinawa-Taiwan relations’, *Cambridge Review of International Affairs* 520-539 Kosuke Shimizu (2019), ‘Do Time and Language Matter in IR?: Nishida Kitaro's non-Western discourse of philosophy and politics’, *Korean Journal of International Studies* 16(1) 99-119 清水 耕介 (2018),「日常性と国際関係」『国際政治 192』129-137 Kosuke Shimizu (2018), ‘The Genealogy of Culturalist International Relations in Japan and Its Implications for Post-Western Discourse’, *All Azimuth* 7(1) 121-136

Kosuke Shimizu (2017), 'Reflection, the Public, and the Modern Machine: An Investigation of the Fukushima Disaster in Relation to the Concepts of Truth and Morality', *Japanese Journal of Political Science*, 18(4) 536-551

Kosuke Shimizu (2015), 'Materializing the 'non-Western': two stories of Japanese philosophers on culture and politics in the inter-war period', *Cambridge Review of International Affairs*, 28(1) 3-20

Kosuke Shimizu (2014), 'The Ambivalent Relationship of Japan's Soft Power Diplomacy and Princess Mononoke: Tosaka Jun's philosophy of culture as moral reflection', *Japanese Journal of Political Science*, 15(4) 683-698

Kosuke Shmizu (2011), 'Nishida Kitaro and Japan's interwar foreign policy: war involvement and culturalist political discourse', *International Relations of the Asia-Pacific*, 11(1) 157-183

＜出版図書＞

Kosuke Shimizu (2022), *The Kyoto School and International Relations: Non-Western attempts for a new world order*, (Abingdon: Routledge)

Kosuke Shimizu ed, (2019), *Critical International Relations Theories in East Asia: Relationality, Subjectivity, and Pragmatism*, London: Routledge

Kosuke Shimizu and William S. Bradley (2014), *Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific: Migration, Language, and Politics,* Basingstoke: Palgrave Macmillan

＜分担執筆＞

Kosuke Shimizu (2020), 'Beyond the West and East', in Takashi Inoguchi ed, *The SAGE Handbook of Asian Foreign Policy*, London: Sage

Kosuke Shimizu (2019), 'Buddhism, Cosmology, and the Great East Asia Co-prosperity Area: Multiculturalism and Nationalism in the Pre-war period Japan.' In Giorgio Shani and Takeshi Kibe (eds.), Religion and National in Asia. (London: Routledge)

Kosuke Shimizu (2018), Hayao Miyazaki as a political thinker: culture, soft power, and Traditionalism beyond Nationalism in Felix Rösch and Atsuko Watanabe eds., Modern Japanese Political Thought and International Relations, (London: Rowman & Littlefield)

Kosuke Shimizu (2014), 'Who Owns Our Tongue? English, Academic Life, and Subjectivity.' In Kosuke Shimzu and William S. Bradley eds., *Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific: Migration, Language, and Politics*, Basingstoke: Palgrave Macmillan

徐（じょ）　光輝（こうき）

略　歴	1961 年　中国生まれ 1983 年　吉林大学歴史学系考古学専業卒業（歴史学学士） 1989 年　吉林大学大学院考古学研究科博士前期課程修了（歴史学修士） 1993 年　吉林大学大学院考古学研究科博士後期課程単位取得退学 1983 年　吉林大学歴史学系考古学研究室助教 1988 年　吉林大学考古学科専任講師 1996 年　龍谷大学国際文化学部専任講師 2000 年　龍谷大学国際文化学部助教授 2005 年　龍谷大学国際文化学部教授 2015 年　龍谷大学国際学部教授
研究テーマ	集落から都市（先史時代から古代国家）への変容過程研究、仏教考古学研究、東アジア地域文化とその交流史の研究
所属学会	日本中国考古学会、日本考古学研究会、日本東方学会、中国考古学会等
最近の研究業績	＜論　文＞ 1．「論中国東北系銅剣的起源問題－以遼東地区的考古学資料為中心」『辺疆考古研究』第 1 輯（吉林大学編）科学出版社　北京　2002 2．「古代の防御集落と青銅器文化の交流」『東アジアと「半島空間」－山東半島と遼東半島』（千田稔・宇野隆夫編）思文閣　京都　2003 3．「中国の農耕集落」『東アジアと日本の考古学Ⅴ　集落と都市』（後藤直・茂木雅博編）同成社　東京　2003 4．「長江流域の農耕集落について」（共著）『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 6 号 大津　2004 5．「関于星星哨石棺墓地陶器編年的幾個問題」『慶祝張忠培先生七十歳論文集』（吉林大学編）科学出版社　北京　2004 6．『東北アジア古代文化論叢』（編著）北九州中国書店出版　2008 7．「聚落形態演変的考古学研究」『旅順博物館学苑』　2008 8．「論長川 1 号墓前室壁画的性質問題」『林澐先生七十周歳紀念文集』（吉林大学編）科学出版社　北京　2009 9．「曹操墓の発見」『海でつながる倭と中国－邪馬台国の周辺世界』（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編）新泉社　東京　2013 10．「北魏墓葬絵画與佛教信仰－以此岸彼岸観為中心」『慶祝張忠培先生八十歳論文集』（吉林大学編）科学出版社　北京　2014 11．「日本の考古学に何を求めるのか」『日本考古学研究会 60 周年記念誌－考古学研究 60 の論点』　岡山　2014 12．「山東境内北朝時期的丈八仏」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 19 号　2017 13．「魏志倭人伝における諸国の里程問題について」『東シナ海と弥生文化』（安田喜憲・七田忠昭編、立命館大学環太平洋文明叢書 6）　雄山閣　東京　2018、など。 14．「北魏時代の浄土信仰－北魏墓の壁画と棺の板画を中心に」『大和文華』第 138 号 大和文華館　奈良　2021 年 15．「遼寧地方の集落考古学研究」　季刊『古代文化』第 73 巻第 2 号（通巻第 625 号）古代学協会　京都　2021 年 16．「邪馬台国里程戸数再考」『民俗学の射程』（須藤護他編著）　晃洋書房　京都　2022 年

杉本（すぎもと）バウエンス・ジェシカ

略　歴

1972 年　ベルギー生まれ
1995 年　ルーヴァンカトリック大学日本学科修士課程修了
1997 年　ルーヴァンカトリック大学社会・文化人類学科修士課程修了
2001 年　大阪大学大学院人間科学研究科環境社会学修士課程修了
2007 年　大阪大学人間科学博士課程修了
2002 年　兵庫医科大学医学部非常勤講師
2004 年　大阪大学 21 世紀 COE プロジェクト研究員
2006 年　京都精華大学マンガ学部助教授
2007 年　京都精華大学マンガ学部准教授
2011 年　京都精華大学国際マンガ研究センター PD 研究員
2012 年　龍谷大学国際文化学部、関西学院大学国際学他非常勤講師
2014 年　龍谷大学国際文化学部に専任講師として就任
2015 年　龍谷大学国際外部専任講師就任
2017 年　龍谷大学国際学部准教授就任

研究テーマ

社会学、マンガ比較文化論、大衆文化論、映像論など

所属学会

日本マンガ学会、記号学会、日本国際文化学会、表象文化論学会、Popular Culture Association

最近の研究業績

Bauwens-Sugimoto (forthcoming in 2021) “Creating Happy Endings: Yaoi Fanworks as Audience Response to Kaworu and Shinji’ s Relationship” . In: José Andrés Santiago Iglesias, Jaqueline Berndt (eds.) *Anime Studies: Media-Specific Approaches to Neon Genesis Evangelion.* Stockholm: Stockholm University Press.

〈共訳〉（with Patrick W. Galbraith）（2020）*Erotic Comics in Japan: An Introduction to Eromanga.*（永山薫の『エロマンガ・スタディーズ――増補版』の英訳）Amsterdam: Amsterdam University Press.

Bauwens, Jessica. (2019) Yoko Tsuno and Franco-Belgian Girl Readers of Bande Desinée. In Ogi Fusami, et al. (eds.) *Women’ s Manga in Asia and Beyond: Uniting Different Cultures and Identities* (pp.181-198). Palgrave McMillan.

Bauwens-Sugimoto, Jessica. (2017) Negotiating religious and fan identities: “Boys’ Love” and *fujoshi* guilt. In: Mark McLelland ed. *The End of Cool Japan――Ethical, legal, and cultural challenges to Japanese popular culture*. Routledge. (pp. 184-195)

杉本＝バウエンス・ジェシカ（2017）「坂本眞一の作品における『モンストラス・フェミニン』」、『国際文化研究』、第 22 号、pp. 3-16.

Bauwens-Sugimoto, Jessica. (2016) *Queering Black Jack. A look at how the manga and TV anime industry adapts to changing audience demographics.* In: Jaqueline Berndt and Gunnar Jinmei Lindner (eds.). Proceedings from the 2016 NAJAKS conference at. Stockholm University. (pp. 111-142)

「海外レポート：ル・ジャポンがカッコいいフランスで受容される日本のポップカルチャー」『ムーブ叢書 8 ポップカルチャーとジェンダー』北九州市立男女共同参画センター 2011.

“Subverting masculinity, misogyny, and reproductive technology in SEX PISTOLS”, *IMAGE&NARRATIVE Online Magazine of Visual narrative*, Vol. 12 (1) 2011, np.

共　書：Nora Renka, “Fanboys and ‘Naruto’ Epics － Exploring New Ground in Fanfiction Studies”. Jaqueline Berndt and Bettina Kummerling-Meibauer (eds.) *Manga's Cultural Crossroads*. 2013, Routledge, London, pp. 191-207.

鈴木（すずき）　滋（しげる）

略　歴	1989 年　京都大学大学院理学研究科修士課程修了　(学術修士) 1993 年　日本学術振興会特別研究員 1997 年　京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了（博士（理学）） 1997 年　日本学術振興会海外特別研究員・エディンバラ大学客員研究員 2000 年　京都大学大学院理学研究科助手 2004 年　本学国際文化学部に助教授として着任 2016 年　本学国際学部教授就任
研究テーマ	ニホンザルの社会構造、ゴリラとチンパンジーの種間関係、人類進化論
所属学会	日本霊長類学会、日本人類学会、日本アフリカ学会、日本生態人類学会、International Primatological Society
最近の研究業績	＜論　文＞ Suzuki, S., Noma, N. and Izawa, K., 1998. Inter-annual variation of reproductive parameters and fruit food in two populations of Japanese macaques. *Primates*, 39: 313-324. Suzuki, S., Hill, D. A. and Sprague. D. S., 1998. Intertroop transfer and dominance rank structure of male Japanese macaques in Yakushima, Japan. *Int. J. Primatol.*, 19: 703-722. Sugiura,, H., Agetsuma, N. and Suzuki, S., 2002. Troop extinction and female fusion in wild Japanese macaques in Yakushima. *Int. J. Primatol*., 23: 69-84. Hashimoto, C., Suzuki, S., Takenoshita, Y., Yamagiwa, J., Basabose, A.K. & Furuichi, T., 2003. How fruit abundance affects the chimpanzee party size: a comparison between four study sites. *Primates*, 44: 77-81. 鈴木滋、2001. 現生霊長類の種間関係の研究と人類進化論―現状と課題―. 進化人類学ニューズレター、2：36-42. 鈴木滋、2001. サルの出産と豊作不作. 季刊「生命の島」56：57-60. 鈴木滋、2002. 調査初期におけるアフリカ大型類人猿の直接観察の方法.「熱帯林の霊長類研究のためのハンドブック」霊長類研究、18：314-319. 鈴木滋、2007.「サルからみた里山」『里山学のすすめ―＜文化としての自然＞再生にむけて』丸山徳次・宮浦富保編、昭和堂、京都. pp.272-288. 鈴木滋、2008.「社会構造の系統的安定性：ニホンザルの順位と性から考える」『日本の霊長類学 2 中大型哺乳類・霊長類』高槻成紀・山極寿一編、東京大学出版会、東京. pp.200-220. 鈴木滋、2012. 十二支考のサルたち. 季刊民族学、139：60-65. 鈴木滋、2013. 同所的に生息するゴリラとチンパンジーの種間関係を探る. 生物科学、64：85-94. 鈴木滋、2014.「ヒトによる『共生』は可能か－生物学との関係をさぐる－」『「多文化共生」を問い直す－グローバル化時代の可能性と限界－』権五定・斎藤文彦編著、日本経済評論社、東京. pp. 1-16. 鈴木滋、2017.「現代進化論と宗教」『多文化時代の宗教論入門』久松英二・佐野東生編著、ミネルヴァ書房、京都. pp.83-104.
コメント	自然や自然とともに生きる人々や、文化と進化をめぐるさまざまな現象を対象として、現代社会の深層にひそむ問題を考えています。世界のサルやアフリカの地域社会のフィールドワークが私の思考の原点です。

瀧口（たきぐち）　順也（じゅんや）

略　　歴	1980 年生 2003 年　明治大学政治経済学部卒業 2004 年　マンチェスター大学人文学研究科修士課程修了 （MA in Modern European History） 2009 年　マンチェスター大学人文科学研究科博士課程修了（Ph.D. in History） 2010 年　北海道大学スラブ研究センター研究員 2012 年　龍谷大学国際文化学部専任講師 2016 年　龍谷大学国際学部准教授
研究テーマ	近現代ヨーロッパ史、ソ連・ロシア研究、国際共産主義運動史
所属学会	ロシア史研究会、現代史研究会、British Association for Slavonic and East European Studies (BASEES) [UK]、Study Group on the Russian Revolution [UK]
最近の研究業績	＜論　文＞ “Stalinist Political Spectacle and the Defeat of the Opposition: The Fifteenth Congress of the Soviet Communist Party in 1927”, *History: The Journal of the Historical Association,* 2023 「初期イギリス共産党の党員訓練 ―『規律ある党』と『大衆政党』のはざまで―」『西洋史学』272 号、2021 年 「ソ連史研究者としての E･H･カー」佐藤史郎･三牧聖子･清水耕介（編）『E･H･カーを読む』ナカニシヤ出版、2022 年 「イギリス共産党とスターリン・カルト ― 1930 年代なかばのイギリスにおけるスターリン表象」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』23 号、2021 年 “Spreading the Revolution, Assembling Information and Making Revolutionaries: The Bolshevik Party Congress, 1917- 1922” in Christopher Read et al.(eds.), *Russia's Home Front: The Struggle for the State, Slavica Publishers*, 2018. 「スターリニズムの表象と社会動員」浅岡善治・中島毅（編）『人間と文化の革新：ロシア革命とソ連の世紀　第 4 巻』岩波書店、2017 年 “The Projection of Stalinism at the Comintern Congress in the 1930s”, Afrasian Research Centre, Working Papers series, vol. 33, 2016. 「歴史としての個人史 ― 伝記、自叙伝、主体の混乱」『国際文化研究』19 号、2015 年 「スターリニズムの演出と舞台装置 ― ボリシェヴィキ党大会（1927 ― 1934）」『ロシア史研究』90 号、2012 年 “Projecting Bolshevik Unity, Ritualising Party Debate: The Thirteenth Party Congress, 1924”, *Acta Slavica Iaponica*, vol. 31, 2012. ＜入門書・事典項目＞ 「指導者（皇帝）崇拝」『ロシア文化事典』丸善出版、2019 年 「共産党の支配 ―『党＝国家体制』の成立と党内政治」下斗米伸夫（編）『ロシアの歴史を知るための 50 章』明石書店、2016 年

瀧本（たきもと）　眞人（まさと）

略　　歴	1961 年生 1986 年　筑波大学地域研究研究科修士課程修了（国際学修士） 2001 年　クイーンズランド大学日本語通訳翻訳研究科修士課程修了（MA） 2008 年　モナシュ大学人文社会学研究科博士課程修了（PhD） 2013 年　龍谷大学国際文化学部（教授）着任 2015 年　龍谷大学国際学部（教授）
研究テーマ	通訳・翻訳研究、異文化間コミュニケーション、日本語教育、英語教育
所属学会	日本通訳翻訳学会、オセアニア教育研究学会、異文化間教育学会、オーストラリア学会、Applied Linguistics Association of Australia、Japanese Studies Association of Australia
最近の研究業績	＜論　文＞ Takimoto, M. 2012. Interpreters' involvement in multi-party interactions: The nature of participation as listener and speaker. *Multilingua*. 31-1 Takimoto, M and Hashimoto, H. 2011. Intercultural language learning through translation and interpreting: A study of advanced-level Japanese learners. *Babel*. 45(2/3): 11-16. 瀧本眞人・橋本博子 . 2010.「大学および教員・研究員の国際化をめぐる課題：オーストラリアの大学における FD（教育資質開発）を事例として」『オセアニア教育研究』16: 22-36. Takimoto, M. and Hashimoto, H. 2010. An "Eye-opening" learning experience: Language learning through interpreting and translation. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*. 7(1): 86-95. Takimoto, M. 2009. Characteristics of an interpreted situation with multiple participants: Implications for pedagogy. *International Journal of Interpreter Education.* 1:33-44. Takimoto, M. and Koshiba. K. 2009. Interpreter's non-rendition behaviour and its effect on interaction: A case study of a multi-party interpreting situation. *Translation and Interpreting: The International Journal of Translation and Interpreting Research.* 1(1): 15-26. 瀧本眞人 . 2006.「AUSIT 倫理規定と通訳者の行動―ビジネス分野におけるダイアログ通訳の場合」『通訳研究』6:143-154.

嵩（だけ）　満也（みつや）

略　　歴	1958 年生まれ 1986 年　龍谷大学大学院文学研究科博士前期課程修了　（文学修士） 1989 年　龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学 1995 年　龍谷大学短期大学部助教授に就任 1996 年　本学国際文化学部助教授に着任 2002 年　本学国際文化学部教授に就任 2014 年　現代南アジア研究センター・センター長就任（～現在）。
研究テーマ	近代日本仏教の国際化、親鸞思想、アジアのエンゲイジド・ブディズム
所属学会	日本宗教学会、日本印度学仏教学会、真宗学会、国際真宗学会
最近の研究業績	＜著　書＞ 『In Search of Well-being: Genealogies of Religion and Politics in India』（編者）、龍谷大学現代インド研究センター、2014 年 3 月 『変貌と伝統の現代インド』（編著者）、法蔵館、2018 年 『仏教英書伝道のあけぼの』（編著者）、法蔵館、2018 年 『国際社会と日本仏教』（編著者）、丸善出版、2020 年 『日本仏教と西洋世界』（編者）、法蔵館、2020 年 ＜論　文＞ “The Discourses of Birth in Modern Shin Buddhist Studies in Early 20th Century”、『真宗学』133 号、2015 年 3 月 「現代アメリカ社会における仏教の動向―アメリカの仏教からアメリカ仏教へ」『国際社会文化研究所紀要』第 17 号、2015 年 「エコロジー・共生思想そして仏教―国際文化学への視角との関連において」『グローバル化する世界と共生―権五定先生退職記念論集』（斎藤文彦編）、2014 年 “Shin Buddhist Ecology: Grounded upon Tension between the Actual and the Ideal”、『真宗学』122 号、2010 年 3 月 「浄土真宗本願寺派による初期ハワイ開教と非日系人開教使の誕生」『国際社会文化研究所紀要』第 10 号、2008 年 6 月 「近代における東西本願寺のアジア開教について」『国際社会文化研究所紀要』第 8 号、2006 年 5 月 「スリランカにおける宗教の受容と変容」、『国際社会文化研究所紀要』第 6 号、2004 年 3 月

Terhune, Noel Mitchell
（ターヒュン　ノエル　ミチェル）

略　　歴	1981 年　オレゴン州立大学　経済学部卒業 1988 年　テンプル大学日本校　教育学修士課程修了
研究テーマ	Teaching English as a foreign language ／ Computer assisted language learning
所属学会	PacCALL ／ Japan Association of Language Teachers ／ EUROCALL
最近の研究業績	＜論　文＞ Terhune, N. M. & Shawback, M. (2002), Online interactive courseware: using movies to promote cultural understanding in a CALL environment, *ReCALL*, Cambridge University Press, vol. 14, no. 1, pp. 85-95. Terhune, N. M. (2006), Writing fluency in English as a second language, *Kokusaibunka Kenkyu*, Ryukoku University, vol. 10, pp. 117-126. Terhune, N. M. (2009), Designed for the Task: A look at the design of some task-based CALL materials, *Kokusaibunka Kenkyu*, Ryukoku University, vol. 13, pp. 59-72. Terhune, N. M. (2013), Learning to Learn Digitally: Getting Students on the Road to Autonomy, *International Journal of Computer-Assisted Language Learning and Teaching*, IGI Global, vol. 3, no. 4, pp. 9-24. Terhune, N. M. (2014), Comprehensible Input: Some Practical Aspects Language Learners Should Know, *Kokusaibunka Kenkyu*, Ryukoku University, vol. 18, pp. 45-52. Terhune, N. M. (2015), Language learning going global: Linking teachers and learners via commercial Skype-based CMC, *Computer Assisted Language Learning*, Taylor and Francis, DOI:10.1080/09588221.2015.1061020.

Chapple, Julian（チャプル ジュリアン）

略　　歴	1971 年生まれ 1997 年　国立ヴィクトリア大学大学院政治科学学科修士課程修了（MIR） 1997 年　笹川平和財団国際教育奨学センター　プログラムコーディネーター 1998 年　国立ヴィクトリア大学アジア言語学科専任講師として着任 2000 年　全国市町村国際文化研修所教務部語学室教員に就任 2001 年　京都産業大学語学教育研究センター　契約講師に就任 2002 年　国立ヴィクトリア大学大学院政治科学学科博士課程単位取得（Ph.D.） 2005 年　本学国際文化学部に専任講師として着任 2010 年　本学国際文化学部准教授に就任 2016 年　本学国際学部教授に就任
研究テーマ	国際政治、言語教育、移民政策、言語政策など
所属学会	全国語学教育学会（JALT）、ニュージーランドアジア研究学会
最近の研究業績	＜著　書＞ “Finally Feasible or Fresh Façade? Analyzing the Internationalization Plans of Japanese Universities,” *International Journal of Research in Education*. Vol. 3, No. 4, pp.15-28. Consortia Academia, 2014. “Global *Jinzai'*, Japanese Higher Education and the Path to Multiculturalism: Imperative, Imposter or Immature?,” in Shimizu, K., & Bradley, W. (Eds.) (2014) *Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific*. pp.213-228. “Japan's Immigration Intimations and their Neglected Language Policy Requisites,” *Asian and Pacific Migration Journal.* Vol.23, No. 3,(2014), pp. 345-360. “Teaching in English is not Necessarily the Teaching of English,” *International Education Studies*, Vol. 8, No. 3,2015, pp. 1-13. Canadian Center of Science and Education. (2022). “Diversity and Inclusion or Excluding Diversity - Which way forward for Japan?” in 村田和代 (編), 超境者との共存に向けて [Towards a Future with Border-Crossers], Tokyo: Hituzi , 237-261. (2022). “Teacher Diversity Training in Japan: Doing nothing is no longer enough.” INTED2022, pp. 8402-8410. doi: 10.21125/inted.2022.2165 (2022). A Tentative Proposal for Inclusivity Education Training for Japanese School Teachers Based on the Needs of Migrants and Returnees. International Conference on Education and New Developments 2022 Proceedings, pp. 328-332. (2022).「レジリエンスの再評価と教育の再考、日本とニュージーランドにおける COVID-19 パンデミックの体験」[Reasserting Resilience and Rethinking Education: New Zealand and Japan' s experiences with the COVID-19 Pandemic] in 村田和代 (編), レジリエンスから考えるこれからのコミュニケーション教育. Tokyo: Hituzi, 139-164. Šlogar, T. & Chapple, J. (2022). “The Whiteness of Internationalization in Japanese Higher Education: Examining the Contradictions.” International Conference Proceedings of the 33rd International Conference on Education, Humanities, Social Sciences and Arts, pp. 22-28.

＜学会発表＞

“Raising EFL Teachers’ Awareness of Pragmatic Elements of L2 Teaching - A study of Japanese elementary school teachers” PAC-KOTESOL International Conference, Korea, 2010 での発表

“Non-specialist English Teachers in Japan and their Impact on Elementary Student Attitudes” The Fourth CLS International Conference CLaSIC, Singapore 2010 での発表

“The Hidden ‘Dangers’ Inherent in the Use of Native Assistant Language Teachers (ALTs) in the Japanese Classroom” 2011 Hawaii International Conference on Education 2011 での発表

“Japanese, Foreign Languages and Global Jinzai; connections, communities and complications” presented July 11, 2014, at the International Conference on Japanese Language Education, University of NSW, Sydney, Australia.

Matsumura, S. & Chapple, J. “Should English be taught in English? A critical assessment of the teaching policy in Japanese high schools” presented November 24, 2015, at the 4th International Conference on Language, Education and Diversity, Auckland University, New Zealand.

Matsumura, S. & Chapple, J. “Teaching English in English: A Critical Examination of the Policy in Japanese High Schools” presented June 17, 2015, at Bridging Language Acquisition and Language Policy Symposium, Lund University, Sweden.

陳（チェン）　慶昌（チンチャン）

略　　歴	1976 年生まれ 国立台湾大学法学部政治学科卒業（1998 年 6 月） 中華民国陸軍少尉（1998 年 7 月～ 2000 年 4 月） 台湾国立政治大学大学院外交学研究科修士課程修了　法学修士（2003 年 9 月） 英国ウェールズ大学アベリストウィス校（現アベリストウィス大学）大学院国際政治研究科修士課程修了　国際政治学修士（2004 年 9 月） 英国ウェールズ大学アベリストウィス校（現アベリストウィス大学）大学院国際政治研究科博士課程修了　国際政治学博士（2008 年 11 月） 立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部助教（2009 年 9 月～ 2012 年 9 月） 立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部准教授（2012 年 9 月～ 2015 年 3 月） 龍谷大学国際学部准教授着任（2015 年 4 月） 米国ニュースクール大学スクール・フォー・パブリックエンゲージメント客員研究員（2019 年 3 月～ 2020 年 3 月） 龍谷大学国際学部教授（2022 年 4 月）
研究テーマ	批判的安全保障論、東アジアにおける国際関係、ポスト西洋型国際政治理論、脅威認知とアイデンティティ、東洋医学と紛争解決
所属学会	日本国際政治学会、日本政治学会、国際研究学会（米国）、European International Studies Association
最近の研究業績	＜著　書＞ With Shih, Chih-yu et al. (2019) *China and International Theory: The Balance of Relationships*. London: Routledge. Chen, Ching-Chang. (2019) “Sinophone and Japanese International Relations Theory.” In *Oxford Bibliographies* in International Relations, edited by Patrick James. New York: Oxford University Press. Chen, Ching-Chang.（2017）“The Diaoyutai/Senkaku Islands Dispute: An Ethos of Appropriateness and China’s ‘Loss’ of Ryukyu.” In *Asia in International Relations: Unlearning Imperial Power Relations*, edited by Pinar Bilgin and L.H.M. Ling, 74-84. London: Routledge. Chen, Ching-Chang. (2017) “Taiwan’s Inconsistent Involvement in China’s Maritime Disputes under the ‘One China’ Institution.” In *Regional Institutions, Geopolitics and Economics in the Asia Pacific*, edited by Steven B. Rothman, Utpal Vyas, and Yoichiro Sato, 75-92. London: Routledge. Chen, Ching-Chang. (2016) “East Asia: Understanding the Broken Harmony in Confucian Asia.” In *The Palgrave Handbook of Disciplinary and Regional Approaches to Peace*, edited by Oliver Richmond, Sandra Pogodda and Jasmin Ramovic, 350-362. London: Palgrave. Chen, Ching-Chang, and Cho, Young Chul. (2016) “Theory.” In *Critical Imaginations in International Relations*, edited by Aoileann Ni Mhurchu and Reiko Shindo, 245-261. London: Routledge.

＜論　文＞

Krickel-Choi, Nina C., and Chen, Ching-Chang. (2023). “Defending the Islands, Defending the Self: Taiwan, Sovereignty, and the Origin of the Diaoyu/Senkaku Islands Dispute as Ontological Security-Seeking.” *Pacific Review*. Advance online publication. Doi: 10.1080/09512748.2023.2166978

Krickel-Choi, Nina C., Chen, Ching-Chang, and Bukh, Alexander. (2022). “Embodying the state differently in a Westphalian world: an ontological exit for the Diaoyu/Senkaku Islands dispute.” *Third World Quarterly*. Advance online publication. Doi: 10.1080/01436597.2022.2152789

Agarwal, Amya, Chen, Ching-Chang, et. al. (2022). “Forum: Searching for a Global Solidarity: A Collective Auto-Ethnography of Early-Career Women Researchers in the Asia-Pacific.” *International Studies Perspectives*. Advance online publication. Doi: 10.1093/isp/ekac007

Chen, Boyu, and Chen, Ching-Chang. (2021). “Rethinking China–Taiwan relations as a yin–yang imbalance: political healing by Taiwanese Buddhist organisations.” *Third World Quarterly*. Advance online publication. Doi: 10.1080/01436597.2021.1960158

Chen, Ching-Chang, and Lin, Wan-Ping. “Reflections on Confucian Cosmology and the Chinese School of IR,” *E-International Relations*, 3 March, 2020.

Chen, Ching-Chang, and Shimizu, Kosuke. “International relations from the margins: the Westphalian meta-narratives and counter-narratives in Okinawa-Taiwan relations,” *Cambridge Review of International Affairs*, 32, no. 4 (2019): 521-540.

Chen, Ching-Chang. “History as a Mirror: What Does the Demise of Ryukyu Mean for the Sino-Japanese Diaoyu/Senkaku Islands Dispute?” Perceptions: Journal of International Affairs 19, no. 1 (2014): 87-105.

Chen, Ching-Chang. “The Im/Possibility of Building Indigenous Theories in a Hegemonic Discipline: The Case of Japanese International Relations.” Asian Perspective 36, no. 3 (2012): 463-492.

Chen, Ching-Chang. “The Absence of Non-Western IR Theory in Asia Reconsidered.” International Relations of the Asia-Pacific 11, no. 1 (2011): 1-23.

Chen, Ching-Chang. “The Political Economy of Cross-Strait Security: A Missing Link.” Journal of Chinese Political Science 15, no. 4 (2010): 391-412.

Chen, Ching-Chang. “When Is China’s Military Modernization Dangerous? Constructing the Cross-Strait Offense-Defense Balance and U.S. Arms Sales to Taiwan.” Issues & Studies 45, no. 3 (2009): 69-119.

DEBNAR, Milos（デブナール ミロシュ）

略　　歴	1979 年生まれ 2006 年　コメニウス大学文学部修士課程修了 2010 年　京都大学大学院文学研究科社修士課程修了 2014 年　京都大学大学院文学研究科社博士課程修了　博士（文学） 2014 年　同志社大学社会学部助教着任 2017 年　龍谷大学国際学部講師着任 2022 年　龍谷大学国際学部准教授
研究テーマ	移民・国際移動、エスニシティ、人種、日本社会
所属学会	日本社会学会、関西社会学会、International Sociological Association, European Association of Japanese Studies
最近の研究業績	＜著　書＞ 『Migration, Whiteness, and Cosmopolitanism: Europeans in Japan』Palgrave MacMillan, 2016 年（単著） 「私のインタビュー戦略―現在の生活を理解するインタビュー調査」、前田拓也他編、『最強の社会調査入門』、ナカニシヤ出版、pp. 25-37、2016 年（単著） 「Contemporary family in Slovakia: demography, values, gender and policy」in Z. T. Rajkai ed.,『Family and social change in socialist and post-socialist countries』, Brill, pp. 164-209, 2016 年（共著） ＜論　文＞ 「グローバル化時代の移民現象における動機の多様化・複雑化・偶発化―在日ヨーロッパ人移住者の経験から」、『同志社社会学研究』、第 19 巻、pp. 1-14、2015 年（単著） 「Compétences et "blancheur de la peau" des immigrés européens au Japon」(Skills and whiteness of European migrants in Japan)、『Migrations Société』, Vol. 27(157), pp. 71-95、2015 年（単著） M.Debnar, D.Yasui, H.Taromaru、「Global cities and social polarization in Japan: industries, occupations and inequality in comparison with other regions」、『京都社会学年報』、第 22 号、pp. 23-48、2014 年（共著） 安井大輔、デブナール・ミロシュ、太郎丸博、「グローバル・シティと賃金の不平等―産業・職業・地域」、『社会学評論』、第 64 巻 2 号、pp. 152-168、2013 年（共著） 「在日外国人の多様化と日本社会への参加―在日チェコ人とスロバキア人の事例から見えるもう一つの可能性」、『ソシオロジ』、第 57 巻 2 号、pp. 37-53、2012 年（単著）

友永　雄吾（ともなが　ゆうご）

略　　歴	1975 年生まれ 2011 年　総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了　博士（文学） 2012 年 - 2014 年　国立民族学博物館外来研究員 日本学術振興会特別研究員 2015 年 -　龍谷大学国際学部　准教授
研究テーマ	オーストラリア先住民の伝統知と環境管理、日本とオーストラリアにおける多文化・多民族共生
所属学会	オーストラリア学会、Australian Anthropological Society、日本国際理解教育学会、文化人類学会
最近の研究業績	＜書　籍＞ 『国際人権法・国際社会とオーストラリア先住民族』関根政美・塩原良和その他編 『オーストラリア多文化社会論：移民・難民・先住民族との共生をめざして』法律文化社 2020 年　pp.65-78（共著） 『スタディツアーの理論と実践』明石書店 2019 年（単著） 『考えたくなる人権教育キーコンセプト』（公）世界人権問題研究センター 2019 年（共編著） Rethinking Interaction between Indigenous Traditional Knowledge and Modern Knowledge, アインズ株式会社 2018 年（共編著） 『オーストラリア先住民の土地権と環境管理』明石書店　2013 年（単著） ＜論　文＞ 「オーストラリアにおける先住民族の遺骨・副葬品の返還と再埋葬」『オーストラリア研究』34 号、2021 年、pp45−59（単著） “Comparative Study on Environmental Management of Catchment and Forest as the Water Source in Australia and Japan”（国際社会文化研究所紀要　第 21 号、2019 年、pp.79-90）（単著） 「自己決定権と先住民」『国際文化学研究』23.19、2019 年、pp3-16（単著） “Study on Sustainable Water Resource Conservation：Toward Deepening of Homo Environmentics” (Journal of Water Resource and Protection, 10, pp.327-368, 2018) 「オーストラリア先住民運動：普遍性の主張と差異の承認をめぐる政治」『国際文化研究』21.17, 2017 年、pp.17-29.（単著） 「アイヌ民族教育と先住民族教育」『研究紀要』第 21 号、2016 年、pp.107-122（単著） 〈学会発表〉 Tomonaga, Y（2021/12/01）"Study Tour at Australia Indigenous community in the south-east Australia: a Case of Compulsory class in a private University in Japan" in Indigenous studies in the university: achieving decolonisation of the disciplines?, The annual conference of the Australian Anthropological Society 2021 (Virtual Conference) Tomonaga, Y（2021/8/27）“Study Tour for Mutual Understanding between Japan and Australia” in Call and Response in Indigenous Research: Cases from Japan and Australia (convenor Yugo Tomonaga), The 12th International Convention of Asia Scholars (Virtual Conference).

Tomonaga, Y (2019/7/18)Historic Legacy and Diversity of Australian Indigenous Peoples and Asian Immigrant Relations in Diversity in Migration to Japan and Pacific Region – Theoretical and Policy Challenges (convenor Yugo Tomonaga), The 11th International Convention of Asia Scholars, Leiden Univeristy, Leiden

Tomonaga, Y（2018/12/05）“Disputation after the Yorta Yorta Native title case”, Australian Anthropological Society 2018 Conference, James Cook University, Cairns

Tomonaga, Y（2018/02/21）“Inweaving indigenous and immigrant histories in Australia” Global Migrations Hosted by the Centre for Global Migrations University of Otago, Dunedin

Tomonaga, Y (2017/04/23) “Two Way Collaborative Management Approaches for Conserving River Quality in Japan and Australia”. Anthropology of Japan in Japan Spring Workshop 2017

Tomonaga, Y (2016/12/14) “Sustainable Collaborative Managemnt for Conserving River Water Quality in Japan and Australia”, Australian Anthropological Society 2016 Conference , University of Sydney, Sydney

中根　智子（なかね　さとこ）

略　　歴	博士（国際関係学） 2011 年　龍谷大学国際文化学部（講師）着任
研究テーマ	インドの貧困問題、児童労働、貧困の世代間連鎖、スラムの生活環境　など
所属学会	ISPCAN（International Society for the Prevention of Child Abuse and Neglect） 日本南アジア学会
最近の研究業績	「ストリート・チルドレン」（2015）粟屋利江・井坂理穂・井上貴子編『現代インド 5 周縁からの声』東京大学出版会 「グローバル化が進める子どもの貧困」（2016）松下冽・藤田憲編著『グローバルサウスとは何か』ミネルヴァ書房 「子どもの貧困と貧困の連鎖」（2016）中村都編著『新版・国際関係論へのファーストステップ』法律文化社 Child Marriage in South Asia: An Act of Gender-Based Violence（2017）Women in Asia Conference 2017 (The University of Western Australia, Perth） School by Day, Shelter by Night: Education For and Through Human Rights (2017) The International Symposium on Strengthening Peace through Education (Crowne Plaza Hotel, Nagasaki)

長尾　明子（ながお　あきこ）

略　　歴	2006 年　名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科英語コミュニケーション専攻修士課程修了（英語・英語教育学修士） 2008 年　アデレード大学大学院人文学部言語学学科修士課程修了（M.A. in Applied Linguistics） 2008 年　名古屋外国語大学外国語学部英語教育学科教育助手として着任 2010 年　国士舘大学、名古屋国際中学校・高等学校非常勤講師として着任 2011 年　香川大学大学教育開発センター特命非常勤講師として着任 2012 年　立命館大学言語教育センターに嘱託講師として着任 2015 年　近畿大学生物理工学部に特任講師として着任 2016 年　熊本大学大学院社会文化科学研究科英語教授学領域専攻博士課程修了（文学博士） 2016 年　本学国際文化学部に講師として着任
研究テーマ	英語教育、Communities of Practices, Systemic Functional Linguistics, Genre-based Language Teaching
所属学会	全国語学教育学会、日本質的心理学会
最近の研究業績	＜論　文＞ Nagao, A. (2012). Language Learning Through Interactions in Classroom Communities, *Bulletin of the Japan Association of College English Teachers Chyugoku-Chikoku Chapter,* 9, 19-34. 長尾明子 (2012).「香川大学全学共通科目英語カリキュラムにおける e-learning の実践」『香川大学教育研究』9, 143-152. Nagao, A. (2012). Meaning-Making Process in a Classroom Community: How new comers become experienced learners through interactions, *The Japan-Britain Association for English Teaching Journal*, 16, 95-106. Nagao, A. (2012). Rhetorical Unit Analysis of Classroom Discourse: an exploratory study, *Bulletin of Shikoku English Language Education Society*, 32, 43-55. 再録：論説資料保存会（編）(2014)『英語学論説資料第 49 号第 6 分冊（語用論・言語文化・英学・語法)』611-617）. Nagao, A. (2013). Discourses Analysis in an ESL Community of Practice, *the 38th Japan Association for Language Teaching Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition Conference Selected Proceedings,* 130-139. Nagao, A. (2014). How newcomer English as Second Language learners become experienced learners through socialization in classroom communities, *The Journal of Asia TEFL,* 11(2), 93-125. Nagao, A. (2014). Communities of Practice in EFL: How First-year Japanese University Students Become Experienced Learners, Asia TEFL T*he 12th International Conference and 23rd MELTA International Conference Selected Proceedings*, 66-78. Nagao, A. (2014). Classroom as Community of Practice, The Japanese Associations for Language Teaching, *the 12th PanSIG 2013 Conference, Conference Selected Proceedings,* 214-220.

Nagao, A. (2014). Learners' awareness as Core, Active, and Peripheral Members: How First-Year Japanese University Students, *Bulletin of Shikoku English Language Education Society*, 34, 42-55.

長尾明子 (2015)「日本人英語学習者が参加する実践共同体の機能の変容に関する考察」『熊本大学社会文化研究』13, 101-133.

Yamamoto, Y. & Nagao, A. (2015). Work-study Conflict of Undergraduate Students in Japan, *The Asian Conference on Second Language Acquisition and Teacher Education 2015 Official Conference Proceedings,* 115-121.

Nagao, A. (2015). Identifying the Functions of Communities of Practice in an EFL Classroom, *Learning, Working and Communicating in a Global Context, Proceedings of the 47th Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics,* 85-100.

Nagao, A. (2015). Exploring an EFL classroom as a Community of Practice in Higher Education, *The Asian Conference on Second Language Acquisition and Teacher Education 2015 Official Conference Proceedings,* 97-102.

長尾明子 (2016)「新人から経験ある英語学習者への移行と実践共同体の生成・発達に関する研究―大学での英語学習活動を通して―」『熊本大学大学院社会文化科学研究科博士論文』1-298.

＜学会発表＞

Nagao, A. (October 14, 2012). *A Meaning Making Process: Rhetorical Unit Analysis*, at the 38th Japan Association for Language Teaching Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition, Granship Shizuoka, Shizuoka Japan.

Nagao, A. (May 19, 2013). *Classroom as Community of Practice*, Paper Presented at The Japanese Associations for Language Teaching, the 12th PanSIG 2013 Conference, Nanzan University, Aichi, Japan.

Nagao, A. & Rose, O. (August 30, 2013). *Student usage and reaction to the 'Lex' Vocabulary Game Application,* Paper presented at the 52nd Internal Convention of the Japan Association of College English Teachers (JACET Convention 2013), Kyoto University, Kyoto, Japan.

Nagao, A. (August 14, 2014). *Classroom as Community of Practice: How do ESL learners as newcomers become experienced learners.* Paper presented at 17th World Congress of the International Association of Applied Linguistics (AILA), Brisbane Convention and Exhibition Centre, Brisbane, Australia.

Nagao, A. (August 30, 2014). *Communities of Practice Model in English as a Foreign Language Classes*: Becoming Experienced Learners through Participation. Paper presented at the 12th International Asia TEFL Conference and 23rd MELTA International Conference, Borneo Convention Centre Kuching, Sarawak, Malaysia.

Nagao, A. (September 4, 2014). *Communities of Practice Model in English as a Foreign Language Classes*: A Case Study How First-Year Japanese University Students Become Experienced Learners Through Participation in a Language Classroom. Paper presented at the 47th British Association for Applied Linguistics 2014, University of Warwick, Coventry, U.K..

Nagao, A. (November 22, 2014). *Communities of Practices and Language Learners.* Paper presented at the 40th Japan Association for Language Teaching Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition, Tsukuba International Congress Center, Ibaraki, Japan.

Nagao, A. (February 28, 2015). *Language learning classrooms as communities of practices.* Paper presented at the 11th Annual CamTESOL Conference on English Language Teaching English: Building Skills for Regional Cooperation and Mobility, Institute of Technology of Cambodia, Phnom Penh, Cambodia.

Nagao, A. (March 24, 2015). *A Community of Practice as an EFL Language Classroom: How First-Year Japanese University Students Become Experienced Learners from Novices.* Paper presented at the 2015 joint conference of the American Association for Applied Linguistics (AAAL) and L'Association Canadienne de Linguistique Appliquée/Canadian Association of Applied Linguistics (ACLA/CAAL), Fairmont Royal York, Ontario, Canada.

Nagao, A. (May 1, 2015). *A Study of Functional Transformation in a Community of Practice Consisting of Japanese Learners of English.* Paper presented at IAFOR The Asian Conference on Language Learning 2015 and The Asian Conference on Technology in the Classroom, Art Center of Kobe, Kobe, Japan.

Yamamoto, Y. & Nagao, A. (August 3, 2015). *Work-study Conflict of Undergraduate Students in Japan*. Paper presented at The Asian Conference on Second Language Acquisition and Teacher Education, The Mitsui Garden Hotel, Hiroshima, Japan.

Nagao, A. (August 3, 2015). *Transitions of EFL learners as Novices in Japan: Through the Lends of Communities of Practice.* Paper presented at The Asian Conference on Second Language Acquisition and Teacher Education, The Mitsui Garden Hotel, Hiroshima, Japan.

Nagao, A. (November 23, 2015). *Becoming a Student in Communities of Practice.* Paper presented at the 41st Japan Association for Language Teaching Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition, Granship Shizuoka, Shizuoka Japan.

Yamamoto, Y., & Nagao, A. (April 30, 2016). Exploring EFL learners' strategies of how they improve the process of their writing assignments, The Asian Conference on Language Learning 2016, Art Center of Kobe, Kobe, Japan.

Nagao, A. (May 14, 2016). *Creating a Classroom as an EFL Community of Practice: Genre-based Approach of Language Learning,* Paper presented at 6th International Conference on Foreign Language Teaching and Applied Linguistics and International Forum on Sociolinguistics, International Burch University, Sarajevo, Bosnia and Herzegovina.

西条正樹・長尾明子 (2016)「SFL ジャンルベーステキストとその活用事例報告」『第 17 回日本機能言語学会研究会』日時 : 2016 年 7 月 31 日 , 場所 : 上智大学 .

Kamijyo, T., Nishijyo, M., & Nagao, A. (August 5, 2016). *Assessment of L2 Learners' Higher-level Cognitive Strategies Using Strategy Portfolios Based on Sociocultural Theory*, Paper presented at The International Conference on the Globalization of Second Language Acquisition and Teacher Education, Hotel Clio Court Hakata, Fukuoka, Japan.

Nagao, A. (August 25, 2016). *An EFL Classroom as a Community of Practice: The marriage between theory and practice,* Paper presented at 26th Annual Conference of The European Second Language Association, the University of Jyvaskyla, Jyvaskyla, Finland.

Nagao, A. (November 16, 2016). *Self-reflection on Peer Essay Analysis in an EFL Community of Practice*, Paper presented at 2016 KOTESOL International Conference, Sookmyung Women's University, Seoul, South Korea.

Nagao, A. (January 9, 2017). *The Transformation of EFL Classrooms to Communities of Practice.* Paper presented at the IAFOR International Conference on Language Learning, The Hawai'i Convention Center, Honolulu, Hawaii, U.S.A.

Nagao, A. (February 4, 2017). Introducing the SFL Genre-Based Approach of Language Learning into EFL Classroom Communities, SOJO University Teaching and Learning Forum 2017, Sojo University, Kumamoto, Japan.

上條武・西条正樹・長尾明子 (2017)「社会文化理論による Communities of Practice とは : ジャンルアプローチと L2 ストラテジーの実践研究」『言語教育エキスポ 2017』日時 : 2017 年 3 月 5 日 , 場所 : 早稲田大学 .

長嶺　寿宣（ながみね　としのぶ）

略　　歴	1973 年生まれ 2000 年　ケンタッキー州立マーレイ大学大学院 修士課程修了（M.A.） 2002 年　ペンシルバニア州立インディアナ大学文学部 専任講師 2003 年　宮崎市立東大宮中学校 常勤講師 2004 年　国立八代工業高等専門学校一般科 専任講師 2006 年　熊本県立大学文学部 専任講師 2007 年　ペンシルバニア州立インディアナ大学大学院 博士課程修了（Ph.D.） 2008 年　熊本県立大学文学部・大学院文学研究科 准教授 2013 年　熊本大学教育学部・大学院教育学研究科 准教授 2017 年　熊本大学教職大学院 兼担教員 2018 年　熊本大学大学院人文社会科学研究部 准教授 2020 年　龍谷大学国際学部 准教授
研究テーマ	英語教師の実践知獲得プロセス、言語教師の認知・情動、外国語教育政策、学校教育に係る諸課題
所属学会	Asia TEFL、大学英語教育学会（JACET）、関西英語教育学会
最近の研究業績	＜著　書＞ 『小学校英語教育ハンドブック：理論と実践（小学校英語教育学会 20 周年記念誌）』, 東京書籍, 2020（共著） 小学校英語科検定教科書『NEW HORIZON Elementary English Course 5, 6』, 東京書籍 , 2020（共編） 小学校英語科検定教科書別冊教材『Picture Dictionary』, 東京書籍 , 2020（共編） 『Emotions in Second Language Teaching : Theory, Research and Teacher Education』, Springer, 2018（共著） 『ことばを編む』, 開拓社 , 2018（共著） 『Native and Non-Native Teachers in English Language Classrooms』, De Gruyter Mouton, 2017（共著） 中学校英語科検定教科書『NEW HORIZON English Course 1, 2, 3』, 東京書籍 , 2015 ; 2021（共編） 『言語教師認知の動向』, 開拓社 , 2014（共編著） ＜論　文＞ The Impact of Teachers' Self-efficacy Beliefs on Instructional Strategy Choice in Teaching English: A Study of Elementary School Teachers in Japan, *Journal of the Socio-Cultural Research Institute, Ryukoku University: Society and Culture,* (23), pp.79-86, 2021（共著） 「個の概念から対人コミュニケーションの概念への発達における主体性の再考：Lev Vygotsky の枠組みを中心として」『KELES ジャーナル』, 6, pp.24-30, 2021 「Facilitating Reflective Learning in an EFL Teacher Education Course : A Hybrid/Blended-Learning Approach」『英語学論説資料 英語教育（TEFL）』(46 Part 6), pp.439-450, 2014

Emotionality and Language Learning : Forging Bonds by Sharing Emotions, *English Language Teaching World Online : Voices from the Classroom* (Special Issue on Bonding 2014), pp. 1-10, 2014

Aspects of Japanese EFL Teacher Cognitions on Communicative Language Teaching (CLT) [JACET-SIG on LTC], *JACET The 51st International Convention Proceedings*, pp.375-382, 2012（共著）

A Metaphor Analysis of Preservice EFL Teachers' Beliefs Regarding Professional Identity, *The Asian EFL Journal : Special Issue on Teacher Education, Identity and Development, 14*(2), pp.141-171, 2012

「教育実習生の成長及び認知」『JACET 言語教師認知研究会 研究集録 2011』, pp.13-28, 2011

Effects of Hyper-Pronunciation Training Method on Japanese University Students' Pronunciation, *The Asian EFL Journal : Professional Teaching Articles, CEBU International TESOL Conference Edition, 53*(3), pp.35-50, 2011

＜その他＞

「「当たり前」を疑い「不確実性」を受け入れる」『英語教育』（熊本県中学校英語教育研究会会誌），2021

「小学校英語教育の「成功のカギ」とは？」『Junior Horizon 小学校英語の広場 Let's Open Topic 玉手箱』, 2018

「英語教育改革 FAQ」『英語教育』(熊本県中学校英語教育研究会会誌）(47), pp.15-18, 2017

「英語科授業はサイエンスか」『平成 27 年度鹿児島県中学校教育研究会英語部会会誌』(53), pp. 2-7, 2016

「BICS・CALP の観点と英語教育改革」『New Horizon Newsletter』3, p. 8, 2015

「「共感」が「希望」を創る」（書評：『英語教師は楽しい：迷い始めたあなたのための教師の語り』；編著：柳瀬陽介・組田幸一郎・奥住桂；ひつじ書房),『英語教育』(大修館）63(10), pp.90-90, 2014

「ポスト教授法の時代と教師文化」『英語教育』(熊本県中学校英語教育研究会会誌）(44), pp.13-16, 2014

「言語教師認知の探求方法」『英語教育』(大修館）58(13), pp.54-55, 2010（共著）

朴（ぼく）　炫国（ひょんぐっく）

略　　歴	1961 年生まれ 1986 年　圓光大学校師範大学国語教育科卒業（学士） 1988 年　忠南大学校大学院国語国文学科卒業（碩士） 1992 年　中央大学校大学院国語国文学科卒業（文学博士） 1986 年　圓光大学校師範大学国語教育科、民俗学研究所助教 1989 年　又石大学、圓光大学、中央大学、百済大学非常勤講師 1994 年　群長大学教養科講師 1996 年　本学国際文化学部助教授に就任 2012 年　本学国際文化学部教授
研究テーマ	韓国文学、民俗学
所属学会	国語国文学会、韓国民俗学会、比較民俗学会、口碑文学会、民謡学会、韓国言語文学会、東アジア比較文化研究会、朝鮮学会、日本民俗学会、日本国際文化学会、日本昔話学会
最近の研究業績	＜著　書＞ 『韓国空間説話研究』国学資料院、1995 年 『銅雀区の民俗文学』民俗苑、1997 年 『韓国語の発音と演習』白帝社、2004 年 ＜論　文＞ 「御田植の現場論的考察」、『国際文化研究』第 2 号、龍谷大学国際文化学会、1998.5 「バリテキ巫歌考察」、『比較民俗学』第 15 号、比較民俗学会、1998.5 「韓国踊りの伝統と復活」、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 2 号、2000.11 「日中稲作文化の比較研究 - 雲南の少数民族を訪ねる旅から」、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 3 号、2001.2（共著） 「沖縄と韓国の綱引き比較研究」、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 4 号、2002.3 「日･中･韓漢字反対語の比較研究」、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 4 号、2002.3（共著） 「近江八幡の左義長とバリのオゴオゴ行進」、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 4 号、2002.3 「時間・空間、生と死を越した彼岸に立って - 朴忠植の詩世界につい」、『論文集』第 10 号、群長大学、2003.8 「日・中・韓漢字語の比較研究」,『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 8 号 , 龍谷大学国際社会文化研究所 , 2006.5. 「近江八幡の左義長祭りについて」,『比較民俗学会第』33 輯 , 比較民俗学会 , 2007.2, 「韓国語とキチェ語の /h(?)/ 音の比較研究 ,『龍谷紀要 29 巻 第 2 号 , 龍谷大学龍谷紀要編集会 , 2008.1 「韓国霊山綱引きについて」,『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 10 号 , 2008.6. 「日吉大社の山王祭の祭儀構造」,『日本研究』27, 中央大学日本研究所 , 2009.8. 「鵲の報恩談考察」,『西江人文論叢』25, 西江大学人文科学研究所 , 2009.6. 「韓国の小盤工芸」,『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 11 号 , 2009.6.

林（はやし）　則仁（のりひと）

略　歴	1978 年生まれ 2004 年　ロンドン大学東洋アフリカ研究院（SOAS）　学士課程卒業（B.A.） 2005 年　ロンドン大学東洋アフリカ研究院（SOAS）　修士課程修了（M.A.） 2012 年　龍谷大学大学院国際文化学研究科　博士後期課程修了　博士（国際文化学） 2012 年　国立民族学博物館　館外研究員 2013 年　京都造形芸術大学　芸術学部芸術教養学科　非常勤講師 2014 年　本学国際文化学部に専任講師として着任 2018 年　本学国際学部　准教授
研究テーマ	イスラーム美術史・建築史、東西美術文化交流史
所属学会	美術史学会、日本オリエント学会、民族藝術学会、Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, Historians of Islamic Art Association, The British Institute of Persian Studies
最近の研究業績	＜著　書＞ 『中東・オリエント文化事典』（項目執筆）丸善出版　2020 年 『この世のキワ＜自然＞の内と外』（共著）勉誠出版　2019 年 『多文化時代の宗教論入門』（共著）ミネルヴァ書房　2017 年 『＜驚異＞の文化史　中東とヨーロッパを中心に』（共著）名古屋大学出版会　2015 年 『アジアの芸術史　造形篇 II　朝鮮半島・西アジア・中央アジア・インド』（共著）幻冬舎　2013 年 ＜論　文＞ “Some Observations on the Illustrations of Monsters: The Earliest Images of Monsterous Races appeared in the al-Qazwini’s Wonders of Creation,” *国際社会文化研究所紀要（22）*, 2020 年 “Scientific or Narrative? The Tradition of Illustration of the al-Qazwini’s Ajaib al-Makhlugat in the late 15th Century Persian Manuscripts,” *Advanced Science Letters*, vol.23, No. 5, 2017. 「ペルシア細密画にみる『創造物の不思議』－イギリス王立アジア協会所蔵・トゥルクマーン王朝時代の写本より－」『民族藝術』vol.28 2012 “The Turkman Commercial Style of Painting: Origins and Developments reconsidered,” *Orient,* vol.XLVII 2012 F*ormation and Stylistic Development of Turkman paniting: A Study of Pictorial Tradition of Persian Miniature Painting from Western and North Western Iran Between A.D. 1419 and A.D. 1504,* 学位請求論文　龍谷大学　2012 （その他） 「ステファノ・カルボニ著『被造物の驚異と絵画の珍奇：イル・ハーン朝ロンドン本の研究』」『オリエント』第 59 巻 2 号　2017 年 「文化の交差路としての地中海　－西洋に渡ったイスラーム世界の芸術文化－」『国際文化ジャーナル』第 16 号　2012

早島（はやしま）　慧（さとし）

略　　歴	1983 年生まれ 2010 年　龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了（文学修士） 2014 年　龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程修了（博士（文学）） 2017 年　龍谷大学文学部講師に就任（2020 年 准教授） 2023 年　龍谷大学国際学部准教授に着任
研究テーマ	インド仏教学、大乗仏教思想
所 属 学 会	日本印度学仏教学会、日本仏教学会、龍谷大學佛教學會、 International Association of Buddhist Studies
最　近　の 研 究 業 績	＜単行本共著＞ 『『大乗荘厳経論』第 II 章の和訳と注解 : 大乗への帰依』、法藏館、2020 年。 『時空を超えたメッセージ : 龍谷の至宝』法藏館、2019 年。 『戒律辞典を知るための小辞典』永田文昌堂、2014 年。 『『大乗荘厳経論』第 XVII 章の和訳と注解：供養・師事・無量とくに悲無量』、自照社出版、2013 年。 ＜論　文＞ 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(7)：界と処の設定など」、『インド学チベット学研究』26、2022 年。（共著） 「瑜伽行派における六種散乱の変遷：初期瑜伽行派文献の成立順序に関する試論」、『佛教學研究』77・78、2022 年。 「『大乗荘厳経論』安慧釈の撰述問題：“rgya gar skad du”という表現に注目して」、『印度學佛教學研究』70(1)、2021 年。 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(6)：アーラヤ識の存在論証」、『インド学チベット学研究』25、2021 年。（共著） 「*Prajnāpradīpa-ṭīkā* 第 XXIV 章テキストと和訳 (4)：uttarapakṣa 3」、『インド学チベット学研究』24、2020 年。（共著） 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(5)」、『インド学チベット学研究』24、2020 年。（共著） 「Some Characteristics of Sthiramati's Commentary in The *Ta-sheng Chung-kuan Shih-lun*」、『龍谷大学論集』495、2020 年。 「『大乗荘厳経論』「種姓品」における *Akṣarāśisūtra*：何故「多界修多羅」と訳されたのか」、『印度學佛教學研究』68(1)、2019 年。 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(4)」、『インド学チベット学研究』23、2019 年。（共著） 「『出定後語』・『摑裂邪網編』における経論引用について：『出定後語』第一章を巡る論争を中心として」、『宗学院論集』91、2019 年。 「The Influence on *Prajñāpāramitopadeśa* by the Literatures of the Early Yogācāra : Focusing on the Theory of Three Natures (Trisvabhāva)」、『インド学チベット学研究』22、2018 年。 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(3)」、『インド学チベット学研究』22、2018 年。（共著） 「*Prajnāpradīpa-ṭīkā* 第 XXIV 章テキストと和訳 (3)：uttarapaksa 2」、『インド学チベット学研究 』22、2018 年 12 月。（共著） 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(2)」、『インド学チベット学研究』21、2017 年。（共著）

「A Study of the Concept of the Absolute Truth (Paramārtha) from the Perspective of the Analysis of the Compound」、『佛教學研究』73、2017 年。

「*Ālayavijñāna in the Prajñāpāramitopadeśa*」、『印度學佛教學研究』65(3)、2017 年。

「梵文和訳『阿毘達磨集論』：安慧による冒頭偈」、『インド学チベット学研究』20、2016 年。（共著）

「『大乗荘厳経論』ゴル寺旧蔵貝葉の翻刻と校訂：第 32 葉：第ＸＩ章 65-71 偈」、『龍谷大学仏教文化研究所紀要』55、2016 年。（共著）

「梵文和訳『阿毘達磨集論』(1) 」、『インド学チベット学研究』19、2015 年。（共著）

「『大乗荘厳経論』「真実品」における advaya の一考察」、『印度學佛教學研究』64(1)、2015 年。

「『根本中論頌』第 XXIV 章「観四諦品」における二諦説解釈」、『印度學佛教學研究』63(1)、2014 年。

Pigott, Julian（ピゴット ジュリアン）

学　　位	博士（応用言語学）
専門分野・主な研究テーマ	第二言語学習の動機付け・日本での第二言語教育 言語教育・教育・メディア論
主な担当授業科目	言語習得論・応用言語学・Communication Studies
略　　歴	1978 生まれ 2000 年　University of Birmingham 音楽部卒業 2003 年　来日 2008 年　University of Birmingham 英語学大学院応用言語学修士課程終了 2011 年　立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師として勤務 2015 年　龍谷大学国際学部に専任講師として着任 2016 年　University of Warwick, Centre for Language Studies 博士課程修了 2019 年　龍谷大学国際学部　准教授
研究テーマ	第二言語学習の動機付け・日本での第二言語教育
所属学会	HESTIA (Higher education, sociopolitical trends, and international affairs).
最近の研究業績	(2022) Language learning, drives, and context: A grounded theory of learning behavior. World Academy of Science, Engineering and Technology International Journal of Cognitive and Language Sciences 16(3) pp. 95-101. (2021) Less is more: Education for uncertain times. Globalisation, Societies and Education 20(3) pp. 251-261. (2020) Tribes of the Internet. The Heterodox Review, 1, pp. 3-14. (2020) Terraforming the Internet: The media's plan for the Overton Window 2.0. The Iconoclast 1(1) pp. 1-6. (2020) Trump and the new inquisition: Media coverage, past and present. The Iconoclast 1(1). pp. 1-6. (2019) Staying sane in an era of information overload: How heuristics can be used to fight the expert problem. ASR Chiang Mai University Journal of Social Sciences and Humanities. Vol. 5(2). (2019) Politics and ideology in applied linguistics. 16th International Conference on Language, Education, Humanities and Innovation. pp. 1-9. (2019) Anagnorisis and narrative incorporation: How significant incidents affect language-learning behavior. Studies in Second Language Learning and Teaching. Vol. 9, No. 1: Special Issues on Language Learning Experience. pp. 179-200. (2019) Greeks versus Romans: A Talebian framing of immigration discourse in the WestBulletin of the Transilvania University of Brasov Vol. 11 (60) No. 2 - 2018. Series IV: Philology and Cultural Studies. pp. 213-228. (2018) A Zimbardo time perspective inventory (ZTPI) survey of Japanese university students. International Journal of Social Sciences and Interdisciplinary Studies. Volume 3, no. 1.

(2017) Anagnorisis and Regulation from Afar: The Effects of Significant Events on Learning Behavior. ICEPL-Fall November 7-9, 2017, Kitakyushu. Conference proceedings.

(2017) 自己達成の手段としての語学学習 ―学習行動を理解するための GT アプローチ―。龍谷紀要　第 39 巻　第 1 号

(2017) An Introduction to ELMS Theory and an Examination of Its Implications for Language Education in Japan and Taiwan. In foreign language education in the 21st century: Essays in English and Japanese. Feng Chia University, Feng Chia.

(2016) Self-fulfillment drives, cultural identity, and language learning: Selected findings from a doctoral thesis on second language motivation. Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism vol. 22 no. 1

(2014) English-as-Panacea: Untangling ideology from experience in compulsory English education in Japan. In D. Rivers (Ed.) Resistance to the Known in Foreign Language Education. Creating new dynamics, attitudes, possibilities and opportunities. Basingstoke: Palgrave. pp.216-234.

(2013) A call for a multifaceted approach to language learning motivation research: Combining complexity, humanistic, and critical perspectives Studies in Second Language Learning and Teaching, Vol. 2, no. 3 pp.349-366.

(2012) Motivation and Complex Systems Theory: An Exploratory view of the Motivation of Four Japanese University Students. OnCue, Vol. 6, no. 2 pp.27-47.

(2012) A humanistic approach to foreign language education in Japan. 立命館言語文化研究　Vol.23, no. 4 pp.249-266.

久松（ひさまつ）　英二（えいじ）

略　　歴	1957 年生まれ 1985 年　南山大学大学院文学研究科神学専攻博士前期課程修了（神学修士） 1993 年　ウィーン大学大学院神学専攻博士課程修了（神学博士） 1993 年　南山大学文学部講師就任 2000 年　南山大学総合政策学部助教授就任 2004 年　神戸海星女子学院大学文学部助教授就任 2006 年　神戸海星女子学院大学文学部教授就任 2010 年　龍谷大学国際文化学部教授着任
研究テーマ	東方キリスト教神秘思想、比較宗教思想
所属学会	日本カトリック神学会、日本宗教学会、日本基督教学会、キリスト教史学会、東方キリスト教学会、西洋中世学会
最近の研究業績	＜著　書＞ 『Gregorios Sinaites als Lehrer des Gebetes』Oros Verlag（Germany）1994 年（単著） 『宗教と宗教の＜あいだ＞』風媒社、2000 年（共著） 『キリスト教修道制―周縁性と社会性の狭間で』Sophia University Press、2003 年（共著） 『Prayer and Spirituality in the Early Church, vol. 4: The Spiritual Life』St. Pauls Publications（Strathfield NSW）2006 年（共著） 『中世と近世のあいだ　―　14 世紀におけるスコラ学と神秘思想』知泉書館、2007 年（共著） 『祈りの心身技法―14 世紀ビザンツのアトス静寂主義』京都大学学術出版会、2009 年（単著） 『ギリシア正教－東方の智』（講談社選書メチエ５２２）講談社、2012 年（単著） 『多文化時代の宗教論入門』ミネルヴァ書房、2017 年（共編） 『古代ギリシア教父の霊性　東方キリスト教修道制と神秘思想の成立』教文館、2018 年（単著） 『1 冊でわかるキリスト教史－古代から現代まで』日本キリスト教団出版局、2018 年（共著） 《訳書》『ユスティノス、ユダヤ人トリュフォンとの対話（Justinus, Dialogus cum Tryphone Judaeo）』上智大学中世思想研究所編「中世思想原典集成 1・初期ギリシア教父」平凡社、1995 年 《訳書》『カイサレイアのエウセビオス、福音の論証（Eusebius Caes., Demonstratio evangelica）』上智大学中世思想研究所編「中世思想原典集成 1・初期ギリシア教父」平凡社、1995 年 《訳書》『ルードルフ・オットー：聖なるもの』岩波文庫、2010 年（単著） ＜論　文＞ 「ビザンツのヨーガ行者―『ヨーガ・スートラ』と「イエスの祈り」」、『南山神学』第 24 号、2000 年（単著） 「静寂への執念―東方修道霊性の底流」、『キリスト教史学』第 55 集、2001 年（単著） 「Theoria und Energeia bei Gregorios Sinaites」、Studia Patristica 35、2001 年（単著） 「比喩と体験のはざま―ビザンティンの修道霊性における『カルディアの熱』」、『アカデミア人文・社会科学編』第 74 号、2002 年（単著） 「『いけにえの現在化』としての聖体祭儀―教理化に至るまでの議論」、『神戸海星女子学院大学研究紀要』第 43 号、2005 年（単著） 「The Significance of the Transfiguration for Hesychasm」、『神戸海星女子学院大学研究紀要』第 44 号、2006 年（単著）

「静寂主義者グレゴリオス・シナイテスにおける祈りの随伴現象　―　視覚体験、カルディア（心｛臓｝）の熱、喜悦」、『パトリスティカ』第 10 号、2006 年（単著）

「Der geistliche Aufstieg in der“Himmelsleiter”bei Johannes Klimakos」『Patristica, supplementary 2: Festschrift in Honour of Shinro Kato on His 80th Birthday』、2006 年（単著）.

「カッパドキア三教父の霊性（その一）― カエサレイアのバシレオスとナジアンゾスのグレゴリオス」、『神戸海星女子学院大学研究紀要』第 45 号、2007 年（単著）

「カッパドキア三教父の霊性（その二）― 神秘思想の父ニュッサのグレゴリオス」、『神戸海星女子学院大学研究紀要』第 46 号、2008 年（単著）

「Zur hesychastischen Übung – Übersetzung des griechischen Texts des Kallistos Telikoudes aus der Philokalia」,『神戸海星女子学院大学研究紀要』第 47 号、2009 年（単著）

「Der geistliche Aufstieg bei Evagrius Ponticus」、『神戸海星女子学院大学研究紀要』第 48 号、2010 年（単著）

「ヘシュカズム　―　14 世紀ビザンツの神秘主義運動」、『キリスト教史学』第 64 集、2010 年（単著）

「ビザンツ・ヘシュカズムの霊性」、『宗教研究』第 84 巻第 2 輯第 365 号、2010 年（単著）

平塚（ひらつか）　貴晶（たかあき）

略　　歴	2014 年　ニュージーランド国立オークランド大学大学院応用言語学博士課程修了　博士（Ph. D） 2020 年　龍谷大学国際学部に准教授として着任 2023 年　龍谷大学国際学部　教授
研究テーマ	Language Teacher Education, Qualitative Research Methods
所属学会	全国英語教育学会（JALT）、大学英語教育学会 (JACET)
最近の研究業績	2013 年以降

＜ Books ＞

Hiratsuka, T. (Ed.). (2023). *Team teachers in Japan: Beliefs, identities, and emotions*. Routledge.

Hiratsuka, T. (2022). Dreams cut short but heads held high: Study abroad in times of coronavirus. In G. Barkhuizen (Ed), *Language teachers studying abroad: Identities, emotions, and disruptions* (pp. 151-162). Multilingual Matters.

Hiratsuka, T. (in press). Dreams cut short but heads held high: Study abroad in times of coronavirus. In G. Barkhuizen (Ed), *Language teachers studying abroad: Identities, emotions and disruptions.* Multilingual Matters.

Hiratsuka, T. (2022). *Narrative inquiry into language teacher identity: ALTs in the JET program.* Routledge.

Hiratsuka, T. (2019). Gateway to second language learning: Pivotal roles Language Teacher Education (LTE) plays in primary and secondary schools. In G. Barkhuizen (Ed), *Qualitative research topics in language teacher education* (pp. 192-197). Routledge.

Fanselow, J., & Hiratsuka, T. (2019). Suggestions for teacher educators from a gentle iconoclast and a fellow explorer. In S. Walsh & S. Mann (Eds), *Routledge handbook of English language teacher education* (pp. 96-108). Routledge.

Hiratsuka, T. (2017). Pair discussions for reflecting on action: Stimulated recall. In B. Barnard& J. Ryan (Eds), *Reflective practice: Voices from the field* (pp. 89-97). Routledge.

＜ Papers ＞

Hiratsuka, T. (2022). Transformational experience during study abroad: The case of a Japanese pre-service teacher. *MEXTESOL Journal*, *46*(4), 1-9.

Castellano, J., & Hiratsuka, T. (2022). Iterations and evaluations of anecdote materials in second language (L2) lessons. *Intercultural Studies*, *26*, 21-34.

Nall, M., & Hiratsuka, T. (2022). Language teacher emotion research in Japan: A review from a post-structural and ecological perspective. *Miyagi University Research Journal*, *2*(1), 12-22.

Nall, M., & Hiratsuka, T. (2022). Teaching English in English: A duoethnography inquiry into beliefs, attitudes, and experiences in Japan. *Intercultural Studies*, *26*, 35-49.

Hiratsuka, T. (2021). A study into the pyramid discussion approach with pre-service English teachers in Japan. *Indonesian TESOL Journal*, *3*(2), 88-102.

Hiratsuka, T. (2021). Exploratory Practice (EP) and Fanselovian Premises (FP). *Explorations in Teacher Development*, *27*(2), 8-12.

Hiratsuka, T. (in press). A study into the pyramid discussion approach with pre-service English teachers in Japan. *Indonesian TESOL Journal, 3*(2).

Hiratsuka, T. (in press). Exploratory Practice (EP) and Fanselovian Premises (FP). *Explorations in Teacher Development, 27*(2).

Castellano, J., & Hiratsuka, T. (in press). Iterations and evaluations of anecdote materials in second language (L2) lessons. *Intercultural Studies, 26.*

Nall, M., & Hiratsuka, T. (in press). Teaching English in English: A duoethnography inquiry into beliefs, attitudes, and experiences in Japan. *Intercultural Studies, 26.*

Hiratsuka, T., & Okuma, K. (2021). "I can teach alone!" : Perceptions of pre-service teachers on team-teaching practices. *The Language Teacher, 45*(3).

Hiratsuka, T. (2021). An action research endeavor with international student teaching assistants for their development as teaching professionals. *Journal of Language Teaching and Research, 12*(1), 23-33.

Hiratsuka, T. (2021). An Exploratory Practice (EP) endeavor with Japanese university students. *JACET Kansai Journal, 23*, 31-46.

Hiratsuka, T. (2021). Talking to a comrade: Pair discussions between ALTs and between JTEs. *Intercultural Studies, 25*, 25-38.

Hiratsuka, T. (2020). Participation in ELT presentations for professional development. *Out of the Box, 10*(1), 7-15.

Hiratsuka, T. (2019). Assuring the quality of classroom life through Exploratory Practice (EP): Learners'experiences. *JACET International Convention Selected Papers, 6* , 101-117.

Hiratsuka, T. (2019). Possibilities of a sociocultural perspective in second language teacher education (SLTE). *The Annual Report of Tohoku University Center for Culture and Language Education, 3* , 5-14.

Hiratsuka, T. (2018). An inside look at the process of qualitative data analysis. *Studies in Japan Association for Language Education and Technology, Kansai Chapter, Methodology Special Interest Group, 11*, 1-22.

Hiratsuka, T. (2018). Narrative frames as a course evaluation instrument. *The Language Teacher, 42*(1), 3-7.

Hiratsuka, T. (2017). Capitalizing on the strengths and complementing the weaknesses of native and non-native English speaking teachers. *Out of the Box, 8*(1), 45-53.

Hiratsuka, T. (2017). What we gain from ELT professional presentations. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *Transformation in language education*, 10-16.

Hiratsuka, T. (2017). Give me a clue for innovative teaching! *The Bulletin of Graduate School of Education University of the Ryukyus, 1* , 25-33.

Hiratsuka, T. (2016). Transforming the practices of Japanese high school students: Empowerment arising from Exploratory Practice (EP). *Scripsimus, 25*, 1-23.

Hiratsuka, T. (2016). Actualizing Exploratory Practice (EP) principles with team teachers in Japan. *System, 57*, 109-119.

Hiratsuka, T. (2016). Employing narrative frames for needs analysis: The case of a newly-hired teacher. *Out of the Box, 7*(2), 57-63.

Barkhuizen, G., Hiratsuka, T., Khan, A., & Mendieta, J. (2015). Locating research methods within an applied linguistics narrative framework. *Te Reo, 56/57*, 109-126.

Hiratsuka, T. (2015). "Now I think what is good or bad teaching depends on teachers' humanity" : Effects of Exploratory Practice (EP) on students' perceptions. *Scripsimus, 24*, 23-52.

Hiratsuka, T. (2015). A case study into team teachers'perceptions of JTEs, ALTs, and L1 use. *SELT-Okinawa Review, 13*, 30-54.

Hiratsuka, T., & Barkhuizen, G. (2015). Effects of Exploratory Practice (EP) on team teachers'perceptions in Japanese high schools. *JALT Journal, 37*, 5-27.

Hiratsuka, T. (2015). Teachers'and students'perceptions of team-teaching practices in two Japanese high schools. *Accents Asia, 7*(2), 46-66.

Hiratsuka, T. (2015). An Exploratory Practice study in Japan: Focusing on language teachers'agency. *Ryudai Review of Euro-American Studies, 59*, 25-46.

Hiratsuka, T. (2015). The nuts and bolts of qualitative research. *Studies in Japan Association for Language Education and Technology, Kansai Chapter, Methodology Special Interest Group, 6*, 1-15.

Hiratsuka, T. (2014). Focus group discussions as a professional development opportunity for team teachers in Japan. *New Zealand Studies in Applied Linguistics, 20*(1), 38-52.

Hiratsuka, T. (2014). A study into how high school students learn using narrative frames. *ELT Journal, 68*(2), 169-178.

Hiratsuka, T. (2013). Beyond the rhetoric: Teachers'and students'perceptions of student learning in team-teaching classes. *The Language Teacher, 37*(6), 9-15.

Furmanovsky, Michael
（ファーマノフスキー　マイケル）

略　　歴	1956 年生まれ 1982 年　カルフォルニア大学ロサンゼルス校大学院・歴史学研究科博士課程満期退学 1986 年　ウェスト・レイク女子高校でアメリカ史の教師として勤務 1991 年　関西外国語大学で非常勤英語講師として勤務 1993 年　同志社女子大学・金蘭短期大学・龍谷大学の非常勤講師として勤務 1994 年　神戸大学国際文化学部　常勤外国人講師として勤務 1996 年　龍谷大学国際文化学部　助教授として就任 2014 年　龍谷大学国際文化学部　教授
研究テーマ	アメリカ史、Japanese Popular Music History, Content Teaching in EFL
所属学会	American Historical Association、全国語学教育学会（JALT）、関西アメリカ史研究会、Organization of American Historians
最近の研究業績	“New Thoughts on the Historical Image of Jews in the American Communist Movement：The Los Angeles Experience and the Meaning of ‘Un-American’” (Ryukoku University, *Intercultural Studies*（Vol. 6, 2002） Japanese Students’ Reflections on a short-term language program (JALT Publications 2005, pp. 3-9 *The Language Teacher* 29:12) "Towards “Identity Transcendence”：A Personal Reflection on Identity Formation and Dissoluton in the Context of the Arab-Israeli Conflict.” (*Proceedings of the 2nd AFC Conference*, Monash U., Melbourne, Afrasia Publications 2008) Reconciliation, Restitution and Healing: The Role of Vietnam Veterans in Facilitating a New Era in U.S-Vietnam Relations, 1985-2005. (*Afrasian Center Working Paper*, 2008) “American Country Music in Post-War Japan: Lost Piece in the Popular Music Puzzle” (*Popular Music and Society* July 2008) “Rokabiri”, Student Radicalism and the Japanization of American Pop Culture, 1955-60. (Ryukoku University *Intercultural Studies*, 2008) プレ・ビートルズ時代、日本とイギリスのテレビ音楽番組革命ポピュラー音楽発展の岐路『*メディアのカルチュラルスタディーズ*』佐々木英昭・松居竜五（2009 Minerva) “Outselling the Beatles: Assessing the Influence and Legacy of the Ventures on Japanese Musicians and Popular Music in the 1960s” (*Ryukoku University, Intercultural Studies*, 2009) “A Complex Fit: The Remaking of Japanese Femininity and Fashion, 1945-65”. 国際文化研究』(Intercultural Studies) Vol.16, pp.43-65 Crafting the Showa Dream in Popular Song” 2013 年 3 月比較文化研究 Ginza Shopping: Evaluating evidence for middle-class women’s adoption of a modern yōfuku-based nijū seikatsu identity in mid-1930s Japan 国際文化研究』*Ryukoku University Intercultural Studies* Vol. 19, pp. 3-17 “Electrifying the Japanese Teenage Boy Across the Generations: The Role of the Electric Guitar in Japan’s Popular Culture” in *Introducing Japanese Popular Culture* by Freedman A & Slade, T. (Eds) Routledge 2017 “Kitagawa Johnny: The Showa Returnee Who Re-imagined the American “Musical” as Idol Teen Culture for the Heisei Era and Beyond.” *Ryukoku University, Intercultural Studies*, 2019 “U.S Military Base Clubs and the Japanese Musicians and Vocalists Who Embraced the Romance of American Popular Music, 1945-1955”. *U.S.-Japan Women’s Journal*, Fall 2021

福山　泰子（ふくやま　やすこ）

略　　歴	1975 年 2 月生　香川県 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業　（1998 年 3 月） 名古屋大学大学院博士課程前期課程修了　修士［文学］（2001 年 3 月） 名古屋大学大学院博士課程後期課程満期修了　博士［文学］（2007 年 3 月） 中部大学全学共通教育室　講師（2008 年 4 月～ 2011 年 3 月） 中部大学人文学部共通教育科　准教授（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月） 龍谷大学国際文化学部　准教授（2012 年 4 月～ 2015 年 3 月） 龍谷大学国際学部　准教授（2015 年 4 月～ 2018 年 3 月） 龍谷大学国際学部　教授（2018 年 4 月～）
研究テーマ	東洋美術史（南アジア美術史）　アジャンター石窟研究　仏教説話美術研究
所属学会	美術史学会、密教図像学会、東海印度学仏教学会
最近の研究業績	＜単　著＞ 『アジャンター後期壁画の研究』　中央公論美術出版　2014 年 ＜論　文＞ 「アジャンター第 17 窟「シンハラ物語」圖について―場面解釈の再検討と物語表現の特徴」『國華』1316, 國華社 , 2005 年 , pp. 7-21. 「アジャンター石窟における「舎衛城の神変」図の図像的変遷」『國華』1347, 國華社, 2008 年 , pp. 5-19. 「アジャンター石窟寺院にみる授記説話図について―五、六世紀におけるガンダーラ美術の影響の一事例として」『仏教芸術』304, 毎日新聞社 , 2009 年 , pp. 3-6, 9-36. Japanese encounters with Ajanta, *Report for India-Japan Joint project for the Preservation of Ajanta Buddhist Caves in India* 2008 Archaeological Survey of India, National Institute of Cultural Properties, Tokyo, 2010, Chapter 2, pp.13-32. Fukuyama, Y (2012), Iconographic Development of the Miracle of Sravasti at the Ajanta Caves, in D. Dayalan (ed.): *Sivasri: Perspectives in Indian Archaeology, Art & Culture : Birth centenary volume of Padma Bushan Dr. C. Sivaramamurti and Padma Bushan Sh.K.R. Srinivasan*, Delhi, pp.149-165. ＜報告書＞ 文化遺産国際協力コンソーシアム編『スリランカ北部・東北部における文化財保存と活用調査報告書』　2015 年

古川（ふるかわ）　秀夫（ひでお）

略　　歴	1959 年生まれ 1986 年　大阪大学人間科学研究科博士課程前期修了　（学術修士） 1988 年　大阪大学人間科学研究科博士課程後期単位取得退学 1988 年　大阪大学人間科学部技官に就任 1990 年　大阪大学人間科学部助手に就任 1995 年　龍谷大学社会学部に助教授として着任 1996 年　龍谷大学国際文化学部に助教授として就任 2008 年　龍谷大学国際文化学部に教授として就任
研究テーマ	ボランティア、インターンシップ、ゆとりと余暇、労働意識、価値観　など
所属学会	日本社会心理学会、日本心理学会、日本社会学会、日本インターンシップ学会、産業・組織心理学会、日本国際文化学会、関西社会学会、Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action（ARNOVA）
最近の研究業績	＜著　書＞ 『現代日本のボランティア像』（編著）思文閣出版　2002 年 ＜論　文＞ 「国際ボランティア団体の組織と活動―序説―」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 3 号 23-30 龍谷大学国際社会文化研究所　2001 年 「The structure of yutori and its functions」『Japanese Psychological Research』Vol.43.No.4、225-234 日本心理学会　BLACKWELL 社　2001 年 「ボランティア団体のニーズと大学生の意識との間の乖離」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 6 号 132-145 龍谷大学国際社会文化研究所　2004 年 ＜その他＞ 「ゆとりとライフパタン（Ⅱ）―ボランティア活動の観点から―」日本心理学会第 65 回大会発表　2001 年 「ゆとりとライフパタン（Ⅳ）―第 3 領域：仕事と家庭以外の生活―」日本心理学会第 66 回大会 発表 2002 年 『インターンシップ:サクセスとリスク調査研究報告書』近畿経済産業局･(財）大学コンソーシアム京都　2003 年 『インターンシップ経験と職業意識』平成 13・14 年度科学研究費補助金（基盤 C2）研究成果報告書　2004 年 『産業技術人材育成事業普及啓発委託事業　報告書』近畿経済産業局・(財）大学コンソーシアム京都　2004 年

Bradley, William S.
（ブラドリー　ウィリアム）

略　　歴	1984 年　ウィスコンシン大学南アジア研究学科卒業 1993 年　コロンビア大学大学院英語教育学研究修士課程修了 1996 年　本学国際文化学部に助教授として着任 2001 年　アリゾナ大学大学院教育学研究科 Ph.D. 2005 年　本学国際文化学部教授に就任
研究テーマ	人類学、社会理論と教育
所属学会	American Anthropological Association（AAA）、Japan Anthropology Workshop（JAWS）、Anthropology of Japan in Japan（AJJ）、Comparative and International Education Society（CIES）
最近の研究業績	＜論　文＞ 「Japan As a Risk Society?：Higher Education as a Risk Institution」龍谷大学国際文化研究第 9 号　2005 年 3 月 「Beyond Orientalism:Historicizing the Geisha as Fetish and Spectacle」龍谷大学国際社会文化研究所紀要 9 号　2007 年 5 月 「A Preliminary Analysis of University Globalization Centers」龍谷大学国際社会文化研究所紀要 10 号　2008 年 「Administrative Work as Reform in Japanese Higher Education」 G.S.Poole and Y.C.Chen (Eds),「Ethnographies of Professorate in East Asia Faculty」, Rotterdam: Sense Publishers. 2009 年 「Education and the Risk Society: Theories, Discourse and Risk Foertities in education contexts」S.Biyalostok, R.C.Whitman and W.S.Bradley(Eds), Rotterdam: Sense Publishers. 2012 年 「Is there a Post-multiculturalism?」Working Paper 19, Afrasian Research Centre(Phase 2) Ryukoku University, 2013 年 「Multiculturalism and Conflict Reconcilation in the Asia-Pacific: Migration, language, and politics」K.Shimizu and W.S.Bradley (Eds), Houndsmill, Basingstoke, Hampshire: PalgraveMacmillan, 2014 年 「Empire Melancholia」Working Paper 34, Afrasian Research Centre (Phase 3) Ryukoku University, 2017 年

松居　竜五（まつい　りゅうご）

略　　歴	1964 年生まれ 1990 年 3 月　東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻修士課程修了 1991 年 3 月　東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻博士課程中退 （2016 年 3 月　博士号（学術）取得） 1991 年 4 月 -1994 年 9 月　東京大学教養学部留学生担当講師 1994 年 10 月 -1996 年 9 月　英国ケンブリッジ大学社会人類学科客員研究員 （ダーウィン・カレッジ所属） 1997 年 4 月 -2001 年 3 月　駿河台大学現代文化学部助教授 2001 年 4 月　龍谷大学国際文化学部助教授 2012 年 4 月　龍谷大学国際文化学部教授 2015 年 4 月　龍谷大学国際学部教授
研究テーマ	南方熊楠研究、近代日本思想史
所属学会	日本国際文化学会（The Japan Society for Intercultural Studies）
最近の研究業績	＜著　書＞ 『南方熊楠一切智の夢』1991 年、朝日選書 『達人たちの大英博物館』（共著）1996 年、講談社 『南方熊楠英文論考［ネイチャー］誌篇』（共訳）、集英社、2005 年 『クマグスの森――南方熊楠の見た宇宙』、新潮社、2007 年 『孫文と南方熊楠』（共著）、汲古堂書院、2007 年 『芸術・メディアのカルチュラル・スタディーズ』（共著）、ミネルヴァ書房、2009 年 『南方熊楠大事典』（共編共著）勉誠出版、2011 年 『南方熊楠とアジア』（共著）、勉誠出版、2011 年 『南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』（共訳）、集英社、2014 年 『南方熊楠　複眼の学問構想』、慶應義塾大学出版会、2016 年 ＜論　文＞ 「ロンドン抜書考」1999 年、南方熊楠資料研究会編『熊楠研究』第 1 号 pp.84-108 「ロンドン抜書考二」2000 年、南方熊楠資料研究会編『熊楠研究』第 2 号 pp.58-87 「南方熊楠とフォークロアの伝播説　――「さまよえるユダヤ人」解題――」2001 年、南方熊楠資料研究会編『熊楠研究』第 3 号 pp.161-175 「日韓サブカルチャー交流の現在　――漫画（Manga/Manhwa）の比較研究」2001 年、駿河台大学共同研究　韓国と日本―比較文化史的考察 pp.85-108 「勝浦・那智における南方熊楠」2003 年、ノートルダム清心女子大学生活文化研究所『生活文化研究所年報』第 16 輯 pp. 3-33 「サンフランシスコにおける南方熊楠」2004 年、南方熊楠資料研究会編『熊楠研究』第 6 号 pp.296-306 「熊楠のロンドン、漱石のロンドン」、『國文学』、2005 年 8 月号、47-53 頁 “Mandala as a synthetic theory of sciences, Minakata Kumagusu’s philosophy in his letters to Dogi”,『龍谷大学国際文化研究』第 11 号、2007 年 3 月、pp.29-41 「柳田国男と南方熊楠の協力について」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 10 号、2008 年 6 月、226-233 頁

「ジャクソンヴィルにおける南方熊楠」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 11 号、2009 年、210-228 頁
「戦場のメリークリスマスとヴァン・デル・ポストの捕虜体験」『アフラシア叢書紛争解決暴力と非暴力』、ミネルヴァ書房、368-390 頁、2010 年
“Minakata Kumagusu and the British Museum” 科学研究費基盤研究Ｂ「南方熊楠資料の基礎研究と学際展開」報告書、2011 年
「南方熊楠と『方丈記』」『季刊文学』第 13 巻第 2 号、岩波書店、2012 年、77 ～ 93 頁
「南方熊楠の海外での活動に関する資料の収集と分析」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』13 号、147-160 頁、2012 年
「英国の新聞記事から見る南方熊楠のロンドン時代」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』14 号、155-163 頁、2013 年
「南方熊楠と科学」『科学』第 83 巻第 8 号、岩波書店、2013 年、887-893 頁
「学者熊楠、誕生の軌跡」慶應義塾大学出版会ウェブサイト、http://www.keio-up.co.jp/kup/gift/kumagusu1.html　2017 年

松村　省一（まつむら　しょういち）

略　　歴	1995 年　神戸大学大学院教育学研究科英語教育専攻修士課程修了（教育学修士） 2000 年　ブリティッシュコロンビア大学大学院言語教育学研究科博士課程修了（Ph.D. in Language Education） 2000 年　立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部に英語科常勤講師として着任 2001 年　関西外国語大学国際言語学部に専任講師として着任 2003 年　本学国際文化学部に助教授として着任 2011 年　本学国際文化学部教授 2015 年　本学国際学部教授
研究テーマ	第 2 言語・外国語習得研究、教員養成、外国語教育政策
所属学会	国際語用論学会、日本教育心理学会、IATEFL、AAAL
最近の研究業績	＜論　文＞ Matsumura, S. (2022). The impact of predeparture instruction on pragmatic development during study abroad: A learning strategies perspective. *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education,* https://doi.org/10.1075/sar.21006.mat, John Benjamins. Matsumura, S. (2021). Self-efficacy beliefs among non-specialist teachers in primary English education. *Language Teaching for Young Learners,* https://doi.org/10.1075/ltyl.21010.mat, John Benjamins. ＜学会発表＞ Matsumura, S., & Chapple, J. (December 10, 2022). *The effects of professional development on non-specialist EFL teachers' self-efficacy.* Paper presented at the International TESOL Conference 2022, Ton Duc Thang University, Ho Chi Minh City, Vietnam. Matsumura, S., Chapple, J., & Nagamine, T. (November 19, 2022). *Student perceptions of native vs. non-native English teachers in Japanese classrooms.* Paper presented (online) at the 13th International Conference of English as a Lingua Franca, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan. Matsumura, S., & Gunderson, L. (August 22, 2019). *Examining the relationships among teachers' self-efficacy, English proficiency, and instructional strategies: A study of EFL teachers in Japan.* Paper presented at the Multidisciplinary Approaches in Language Policy and Planning Conference, OISE at the University of Toronto, ON, Canada. Matsumura, S., & Nagamine, T. (June 28, 2019). *Teachers' self-efficacy beliefs as determinants of instructional strategy choice: A study of non-specialist EFL teachers in Japan.* Paper presented at the 2019Asia TEFL Conference, Ambassador Hotel, Bangkok, Thailand. Matsumura, S., & Chapple, J. (March 9, 2019). *Challenging the "Global" order: Should English really be the priority foreign language in Japanese elementary schools?* Paper presented at the 2019 American Association for Applied Linguistics (AAAL), Sheraton Atlanta Hotel, GA, USA.

八幡（やわた）　耕一（こういち）

略　　歴	1974 年生 1998 年　中央大学法学部国際企業関係法学科卒業 1998 年　日本放送協会（～ 2000 年） 2002 年　カールトン大学（カナダ）大学院公共行政研究科修士課程修了 2002 年　国際協力銀行専門調査員（～ 2004 年） 2005 年　日本学術振興会特別研究員（DC２） 2005 年　ヴィクトリア大学（カナダ）客員研究員 2007 年　北海道大学大学院国際広報メディア研究科博士後期課程修了 2007 年　名古屋大学大学院国際言語文化研究科メディアプロフェッショナルコース准教授（～ 2011 年） 2011 年　龍谷大学国際文化学部准教授（2015 年～国際学部准教授） 2021 年　龍谷大学国際学部教授
研究テーマ	情報文化論、メディア研究、ジャーナリズム論
所属学会	情報文化学会、日本マス・コミュニケーション学会、日本広報学会、多文化関係学会
最近の研究業績	＜論　文＞ 「メディア･アジェンダとしての『多文化共生』の変遷:毎日新聞における記事数の分析から」『多文化関係学』Vol.17 、pp. 3 -17（2021） 「テレビ放送の『多文化仕様化』に関する国際比較 : 多文化共生社会の費用計算に向けた試論」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 17 号、pp.173-186（2015） 「企業の経済活動と国家の干渉：思考モデルとしての情報文化空間の可能性」『情報文化学会誌』第 21 巻第 1 号、pp.13-20（2014） 「ハクティビズムと情報文化空間の公益性に関する考察：ミシェル・ド・セルトーの『戦術』概念の観点から」『情報文化学会誌』第 20 巻第 2 号、pp. 3 -10（2013） 「情報文化の空間構造に関する試論：『個』に焦点化した空間モデルを求めて」『情報文化学会誌』第 19 巻第 2 号、pp.11-17（2012） 「情報文化の主体を眺める視座：オルタナティブとアノニマス」『情報文化学会誌』第 17 巻第 2 号、pp. 7 -13（2010） 「情報文化における理念系・施設系・人間系の関係性：ニュース番組の比較内容分析に基づく考察」『情報文化学会誌』第 16 巻第 1 号、pp.14-22（2009） ＜著　書＞ 『台湾メディアと日本　―「日本へのまなざし」はどのように生み出されているのか―』（共編著、晃洋書房、2020）

劉（りゅう）　虹（こう）

略　歴	1985 年 9 月　中国復旦大学文学から修士号取得（M.A.） 1984 年 9 月　中国遼寧師範大学国際文化交流学院助手、講師に就任 1991 年 7 月　中国上海外国語大学部言語学専攻博士後期課程修了（Ph.D） 1991 年 7 月　博士号（文学）取得（上海外国語大学） 1993 年 3 月　中国北京大学対外中国語教育学院講師、助教授に就任 1996 年 4 月　本学国際文化学部助教授に就任 2005 年 4 月　本学国際文化学部教授に就任
研究テーマ	中国言語学　日中文化の比較 社会言語学　会話分析
所属学会	中国対外中国語教育学会、The International Association of Chinese Linguistics、日本中国語学会、日本中国語教育学会　The International Society of Teaching Chinese Language
最近の研究業績	＜著　書＞ 『会話結構分析』北京大学出版社　2004 年 『中国語言語学』北京語言大学出版社　1995 年 『大連方言語彙』中華書局　1999 年 ＜論　文＞ 「中国語会話の結びのパターン」龍谷大学国際文化学会『国際文化研究』第 4 号　2000 年 「“很”等程度副詞の意味と用法」The 12th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics『国際中国語学会第 12 回会議論文集』2004 年 「副詞“可”の強調意味指向と用法」龍谷大学国際文化学会『国際文化研究』第 8 号　2004 年 「談話分析と会話分析の理論について」龍谷大学国際文化学会『国際文化研究』第 9 号 2005 年 「日・中・韓漢字語の比較研究」龍谷大学国際社会文化研究所『国際社会文化研究所紀要』第 8 号　2006 年 「語用の省略と修飾手法について」中国修辞学会『中国修辞学会 2006 年国際会議論文種』2006 年 「会話分析の方法論について」龍谷大学国際社会文化研究所『国際社会文化研究所紀要』第 8 号　2006 年 「会話の分析の観点からみた語気詞のはたらき」The 16th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics『国際中国語学会第 16 回会議論文集』2008 年 「語気詞の新しいはたらき」北京大学対外中国語教育学院『汉语教学学刊』第 4 号　2009 年 「大連方言の音声系統」龍谷大学国際文化学会『国際文化研究』第 15 号 2011 年 「良好な人間関係をつくる中国式方法について」龍谷大学国際文化学会『国際文化研究』第 16 号 2012 年

学　修　生　活

学修生活

Ⅰ．窓口事務・保健管理センター・障がい学生支援室

1．窓口事務

各学部教務課の窓口事務については、履修要項 WEB サイトに掲載していますので、確認してください。
（https://monkey.fks.ryukoku.ac.jp/~kyoga/rishu/）
主に次の情報を掲載しています。

（1）窓口取扱時間
（2）届出書・願書および各種証明書
（3）各種証明書の交付について
（4）裁判員制度に伴い裁判員（候補者）に選任された場合の手続きについて

2．保健管理センター

保健管理センターの利用については、本学『保健管理センター』に掲載しています。
（https://www.ryukoku.ac.jp/hoken/index.php）
毎年、4 月には学生の定期健康診断が実施されますので、日程を HP で確認するようにしてください。
その他、主に次の情報を掲載しています。

（1）緊急時には
（2）学校感染症に罹患した場合には
（3）カウンセラーに相談したい
（4）保健師・看護師に相談したい
（5）医師の診療を受けたい
（6）急な怪我をした
（7）タバコをやめたい
（8）健康チェックをしたい
（9）健康診断
（10）健康診断証明書・健康診断書発行について
（11）AED について知りたい

3．障がい学生支援室

障がい学生支援室は、すべての学生が社会参加に向けて主体的に取り組むことを支援するという視点に立ち、障がいのある学生の学修や学生生活上の困難に対し、様々な相談、支援を行っています。また、障がいのある学生とサポートをする学生、その他すべての学生や教職員が互いに理解し、尊重し合える関係づくりを目指し、サポーター養成や研修会、交流会などにも取り組んでいます。詳しくは、本学 HP『障がい学生支援』に掲載しています。（https://www.ryukoku.ac.jp/support/index.php）

HP では主に次の情報を掲載しています。

（1）障がい学生支援室について
（2）支援を希望される方へ（支援の内容、支援の申し出方法、障がい学生支援室の紹介）
（3）支援をしたい方へ（学生スタッフ募集）
（4）よくある質問（Q&A）

Ⅱ．授業等の休講措置に関する取扱基準

（自然災害及び交通機関不通時の授業及び定期試験の取扱について）

自然災害及び交通機関不通時の授業及び定期試験の取扱については、「授業等の休講措置に関する取扱基準」によります。

○　授業等の休講措置に関する取扱基準：
https://www.ryukoku.ac.jp/campus_career/support/classinfo/disaster.html

「授業等の休講措置に関する取扱基準」に定める自然災害及び交通機関不通時の授業等の実施有無については、以下の方法で確認することができます。

確認方法	説明
（１）龍谷大学ホームページ https://www.ryukoku.ac.jp/	トップページに「重要なお知らせ」として授業実施の有無を記載します。
（２）ポータルサイト https://portal.ryukoku.ac.jp	ポータルサイトのログイン画面に、ホームページと同様の情報を記載します。
（３）公式 Twitter「龍谷大学（緊急連絡用）」 https://twitter.com/Ryukoku_univ （@ Ryukoku_univ）	大学全体に関わる緊急情報の速報発信を目的として、本学公式 Twitter アカウントを開設しています。ここからホームページと同様の情報を発信します。

※緊急時は、大学ホームページおよびポータルサイトへのアクセスが集中し、サイトを閲覧できなくなる可能性がありますので、公式 Twitter「龍谷大学（緊急連絡用）」の利用を推奨します。

III．学籍の取り扱い

1．学籍とは

「学籍」とはその学校の在学者としての身分を意味する用語です。学籍は入学によって発生し、入学は大学が行った入学許可に対して学生の入学諸手続きが完了することにより成立します。学籍は修了により消滅します。

2．学籍簿

（1）学籍番号

入学と同時に、各個人に記号と数字を組み合わせた 7 桁の**学籍番号**が与えられます。在学中の学内における事務取扱は、すべてこの学籍番号により処理されます。学籍番号は修了後も変わらない当人固有の番号であり、本学在学中は身分証明証（学生証）の番号でもありますから、正確に記憶し、記入が必要な場合は省略せずに記入してください。

学籍番号の仕組み

U	2 3	M	0 0 1
L：文学部 E：経済学部 B：経営学部 J：法学部 T：理工学部 C：社会学部 W：国際文化学部 H：政策学部 U：国際学部 N：農学部 Y：先端理工学部 V：心理学部 S：短期大学部 M：実践真宗学研究科 R：留学生別科	入学年度(西暦) の下2桁	学生区分(主たる学生区分を記す) 学部生：0～7 編転入生：8 再入学生：9 修士課程：M 博士後期課程：D 短大専攻科生：A 専門職学位課程生：F 研究生：R 特別専攻生：S 科目等特別履修生：U 科目等履修生：V 外国人特別留学生・交換留学生：Y	学部内における 個人番号

このような仕組みになっているので、同姓同名者がいたとしても混同を防ぐ機能を持っています。

頭のアルファベット (学部等をあらわす) が記入されないと、他学部の学生と区別ができませんので注意してください。

（2）学籍簿

学籍取得により、大学における在学関係を明確にするものとして、**学籍簿**（入学手続き時に各自が Web 入学手続にて登録）が編成されます。学籍簿に登録される事項（本人の現住所、保証人の現住所、学費の請求先等）は、基本的には本人であることの確認に必要な事項に限定されています。これら記載事項に変更が生じたときには直ちに国際学部教務課窓口に届け出てください。

3．学生証

学生証は、本学の学生であるという身分を証明するとともに、学生生活での諸手続きに際して本人であることを証明する大切なものです。

（1）学生証は常に携帯し、次の場合はこれを提示しなければなりません。

① 試験を受けるとき。
② 各種証明書の発行を受けるとき。
③ 通学定期乗車券の購入および学割証の交付を受けるとき。
④ 龍谷大学保健管理センターを利用するとき。
⑤ 図書館を利用するとき。
⑥ その他、本人であることを確認することが必要なとき。

（2）入学時に交付した学生証は、卒業するまで使用しますので大切に扱ってください。ただし、在籍を証明する「在籍確認シール」（学生証裏面に貼付）は、毎年学年初めに配付します。新しい「在籍確認シール」を受け取ったら（在学生は、必ず前年度のシールをはがしたうえで）、速やかに新しいシールを貼ってください。

シールを重ねて貼ると、カードに登録されている情報が認識されず、図書館に入館できないなどのトラブルが発生することがあります。

なお、当該年度の「在籍確認シール」が貼られていない学生証は、無効として取り扱いますので注意してください。

（3）学生証の記載事項に変更が生じた場合は、速やかに国際学部教務課窓口にその内容を届け出てください。ただし、「在籍確認シール」に記載されている“通学区間情報”を変更する場合は、ポータルサイトの“連絡先・通学情報登録”画面にて変更のうえ、国際学部教務課窓口で「在籍確認シール」の交付を受けてください。

（4）学生証を破損または紛失した場合は、直ちに国際学部教務課窓口へ届け出てください。届け出は所定の「学生証再発行願」（紛失・破損届）に必要事項を記入・捺印のうえ提出してください。なお、紛失した場合は、直ちに最寄りの警察署（交番）・生協事務室に紛失届等の提出をしてください。

（5）学生証の再発行については、1,000 円の手数料が必要です。証明書自動発行機より学生証再発行願を出力できますので、所定の手続きを国際学部教務課窓口にて行ってください。また、学生証の再発行には、2 日以上を要するので注意してください。

（6）学生証を折り曲げたり汚したり磁気に近づけたりしないでください。

（7）学生証は他人に貸与または譲渡してはいけません。

（8）修了・退学の場合または有効期限が過ぎた学生証は、速やかに国際学部教務課窓口に返納してください。

4．学籍の喪失

修了以外の事由で学籍を喪失（本学の学生でなくなること）する場合としては、退学と除籍の 2 種類があり、さらに退学はその内容により依願退学と懲戒退学に区分されます。

（1）退学

① 依願退学

依願退学は、学生自身の意志により学籍を喪失（本学の学生でなくなること）することです。

依願退学は、学生の意志によるものであることから、いつでも願い出ることはできますが、次の諸手続きが必要です。

ア 大学所定の書式により、退学理由を明記し、保証人と連署により願い出てください。

イ 当該学期分の学費を納入していること（学費の納入と学籍の取得は対価関係にあり、学費の納入の無い者は本学学生と見なすことができず、したがって退学を願い出る資格もありません。なお、学期当初に退学をする場合は、学部で個別に対応しますので相談してください）。

また、休学期間中の者も退学を願い出ることができますが、除籍となった者は、退学を願い出ることはできません。

② 懲戒退学

懲戒退学は、学生が本学の秩序を乱し、その他学生の本分に反した場合、その内容、軽重等を考慮し、別に定める学生懲戒規程により、在学契約を解消することです。

（2）除籍

「懲戒」という概念になじまない事由であっても、大学が一方的に在学契約を解消する必要のある場合があります。このため本学ではこれを**除籍**として処理しています。しかし、除籍といえども本学学生としての身分を失う点では、退学と同じ結果となるので、その事由は学則により明記されています。

本学学則において定められている除籍の事由は、次のとおりです。

① 定められた期間に所定の学費を納入しないとき。

② 在学し得る年数(通常の場合は修士課程：4 年間、博士後期課程：6 年間)以内に修了できないとき。

③ 休学期間を終えても復学できないとき。

なお、死亡の場合も除籍とします。

5．休学と復学

学生が疾病またはその他の事情により、3 ヶ月以上修学を中断しようとするときは、**休学**を願い出ることができます。

（1）休学の願出

休学には、次の諸手続きが必要です。

① 大学所定の書式により願い出ること。

② 休学の必要性を証明する書類（診断書等）を添付すること。

③ 保証人と連署で願い出ること。

（2）休学期間

① 休学期間は、1 学年間または 1 学期間のいずれかです。

1 年間あるいは第 1 学期（前期）休学希望者は 6 月 30 日まで、第 2 学期（後期）休学希望者は

12 月 31 日までに国際学部教務課窓口に大学所定の書類を提出してください。なお、受付は窓口の開室日に限ります。

② 休学期間の延長の必要がある場合は、さらに 1 学年間または 1 学期間の休学期間の延長を願い出ることができます。

課　　程	休学期間（連続・通算）について
修 士 課 程	連続して 2 年、通算して 2 年を超えることができない。
博士後期課程	連続して 2 年、通算して 3 年を超えることができない。

（3）休学中の学費

休学者は、学費として休学する学期の休学在籍料（50,000 円 (年間）) を納入しなければなりません。

（4）復学の願い出

休学者の休学事由が消滅したときは、願い出により復学することができます。復学できる時期は、教育課程編成との関係で、学期の始め（第 1 学期（前期）または第 2 学期（後期）の開始日）に限定されています。復学の願い出は、学期開始日の前 1 ヶ月以内にしなければなりません。

（5）休学による学年進行

学年進行するためには、各年度末の時点で当該学年における 1 年以上の在学歴が必要となります。例えば 1 年生の時に第 1 学期もしくは第 2 学期のいずれか 1 学期間の休学をした場合、在籍 2 年目となる翌年度の一年間も 1 年生の扱いとなります。このことにより、在籍 2 年目も 1 年生対象の科目しか受講できない可能性がありますので、休学する場合は履修計画に注意してください。

6．再入学

（1）学則第 19 条により退学した者が再び入学を願い出たときは、その事情を調査の上、原年次またはそれ以下の年次に、入学を許可することがあります（学則第 14 条)。ただし、再入学を願い出たときが、退学した年度を含めて 4 年以上の場合は学科試験を課します。

（2）学則第 20 条第 1 項第 1 号により除籍された者が再び入学を願い出たときは、原年次に入学を許可することがあります（学則第 14 条第 2 項)。ただし、再入学を願い出たときが除籍された年度を含めて 4 年以上の場合は学科試験を課します。

（3）休学期間の満了するまでに退学を願い出て許可された者は、再入学を願い出ることができます。

（4）再入学を願い出る時は、学費等納入規程に定める受験料を納め、所定の期間内に手続きをしなければなりません。なお、出願期間、出願書類等については入試部に問い合わせてください。

7．9 月卒業

第 1 学期（前期）末（9 月 30 日）で修了要件（修得単位・在学期間）を充足することとなる学生が、届出期間内に 9 月修了の希望申込をした場合には、9 月 30 日付で修了の認定を受けることができます（要件充足者について、自動的に修了認定を行うことはありません)。詳細については国際学部教務課窓口で相談してください。

Ⅳ．留学

龍谷大学では、国際的な社会に貢献できる人材の育成を目的として、学生の海外派遣を積極的に推進するため、以下のような留学制度があります。

経済、社会、文化、政治などあらゆる局面で国際的な相互依存関係が深まっている現在、海外の大学での学修、文化交流を通して広い視野と柔軟な発想を学ぶことは、みなさんにとって有意義な経験となることでしょう。

詳しくは、グローバル教育推進センター（深草学舎 和顔館）で配布している最新の「留学ガイド」やグローバル教育推進センターホームページ（URL　https://intl.ryukoku.ac.jp）を参考にしてください。

1　交換留学

交換留学とは、学術研究および国際理解の発展のために海外の大学と学生交換協定を締結し、学費の免除や奨学金を受けて留学する制度です。この協定に基づき、原則として毎年同じ人数の学生を派遣・受入しています。

留学期間は原則 1 年間で、その期間、龍谷大学の学費免除（ただし、留学在籍料は必要）、留学先大学の学費免除が受けられます。

募集案内、交換協定校、応募方法などは、グローバル教育推進センター、国際学部教務課で配布している「留学ガイド」やグローバル教育推進センターホームページを参照ください。

※　留学先大学の都合により条件が変更になる場合や募集を行わない場合がありますので、グローバル教育推進センターホームページ（URL　https://intl.ryukoku.ac.jp）の情報を確認してください。

2　私費留学

各自で留学したい大学を探し、大学から承認を得て留学する方法で、毎年多くの学生が私費留学をしています。

この留学は交換留学と同じく、留学期間は在学期間に算入され、取得した単位は単位認定の対象となります。

交換留学と大きく異なる点は、留学先大学の学費や寮費等が自己負担であること。また、留学手続き等は各自で行うことです。手続前に各学部教務課や指導教員と相談して下さい。

3　短期留学

カリキュラムやクラブ活動等の関係で長期間、大学を離れることができない学生には、夏期休暇や冬期休暇を利用した短期留学がお勧めです。

龍谷大学では、これら長期休暇を利用した語学研修や異文化体験等のプログラムを設けています。（各プログラムの開講は年度によって異なります。）詳細はグローバル教育推進センター、所属学部教務課に問い合わせて下さい。

4　個人留学（休学して留学する）

大学を休学した場合、留学先で勉強した期間は在学期間に算入されません。また、単位の認定も行われません。1 年間（ないし半年間）海外の専門語学学校で語学をみっちり勉強したいという学生や、ワーキングホリデーをしてみたい、海外でボランティアをしてみたいという学生がよく利用する方法です。

Ⅴ．通学について（自転車・バイク・自動車）

1 自動車通学の禁止

本学では、自動車による通学を全面的に禁止しています。これは交通事故の防止、大学周辺環境の維持などの理由からです。

しかし、禁止しているにも関わらず、キャンパス近隣の公共施設駐車場等に駐車し、自動車通学する学生が後を絶ちません。これらは社会のルールに反するもので、大学の名誉を著しく傷つける行為です。

迷惑駐車により、地域住民や近隣施設からの苦情も受けています。

この様な自動車通学が判明した場合には、保護者への連絡、ゼミ担当教員等からの指導の上、厳しく処分することとしています。学生諸君の節度ある行動を強く求めます。

2 バイク・自転車通学

バイク・自転車は、多くの学生が利用しています。しかし、最近通学途上でバイクによる交通事故や自転車の接触事故等が多発しています。

また、「バイク・自転車が、狭い生活道路を、スピードを出して通行して危険である」等の苦情が近隣住民から寄せられています。大学までの通学途中には、小学校や保育園等があり、その保護者からも心配する声が寄せられています。

加害者・被害者の如何を問わず、交通事故による悲劇や地域住民への迷惑を回避するためにも交通ルール・マナーを遵守し、安全運転を心がけてください。

3 バイク・自転車の駐輪

バイク・自転車は必ず構内の指定された場所に駐輪してください。構内の建物周辺や路上等に長時間放置しているバイク・自転車は、「駐輪場利用要領」に基づき、一定期間保管の後、処分します。

また、「駐輪場利用要領」に定めるとおり、駐輪場内での事故・盗難および破損等について大学は一切関与致しませんので、各自の責任で被害に遭わないよう十分注意してください。

4 交通安全教育講習会について

学生の安全確保と交通マナー向上を促進するため、毎年定期的に「交通安全教育講習会」を実施しています。この様な機会を積極的に利用して、皆さんが安全な学生生活を心がけることを望んでいます。

5 自動車の臨時入構許可について

自動車による通学を全面的に禁止していますが、以下のような理由がある時は、例外として許可することがありますので、必要な場合は必ず事前に相談してください。

① 夜間にまで及ぶ研究等で、公共交通機関の利用が困難な場合　→　所属学部
② 長期間の疾病や障がいなどにより、公共交通機関の利用が困難な場合　→　所属学部
③ 大学行事やクラブ活動のため、資材等を運搬するのに必要な場合　→　学生部

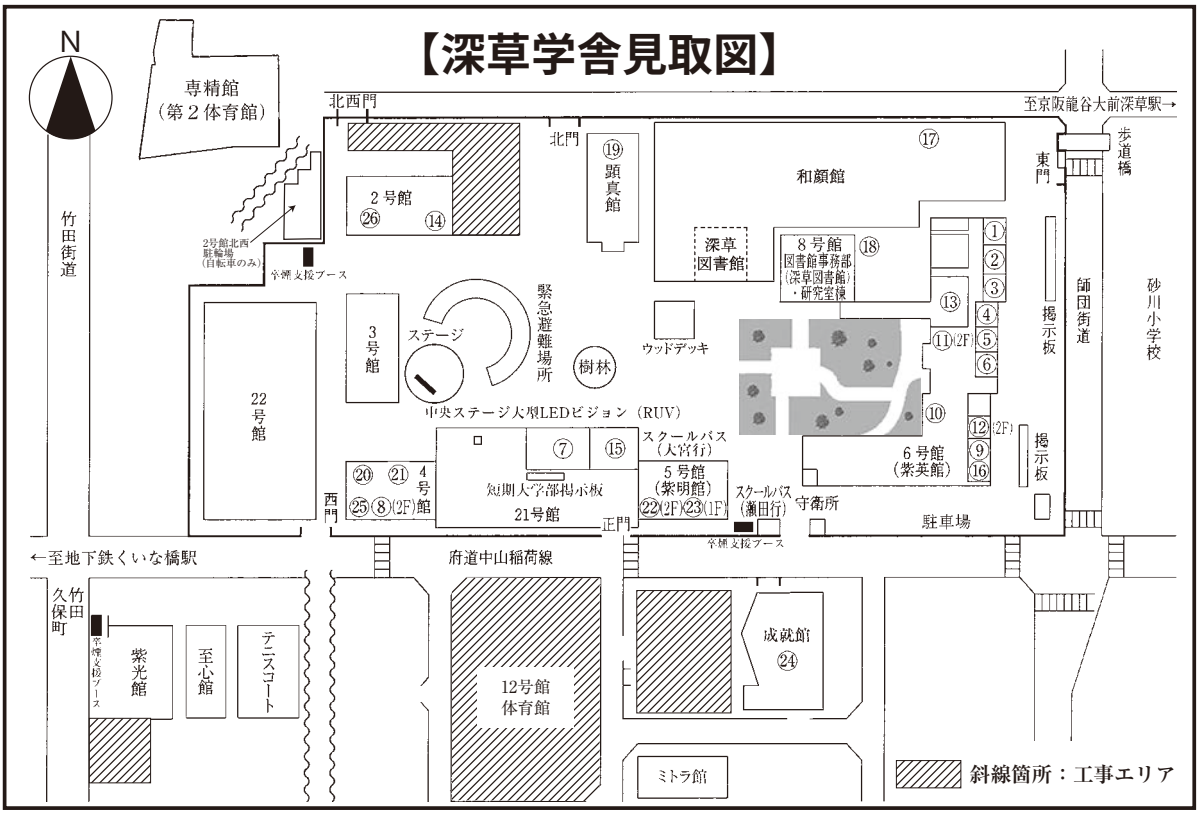
許可なく入構した場合は、厳重に処分する対象となりますので、必要な事情がある場合には、必ず事前に相談してください。

Ⅵ．こんな場合には？　Q＆A

こんなとき			ここで	こうする
講義関係で	短期間欠席する		国際学部教務課	事前または事後ただちに届け出る。（印鑑必要）
	3ヵ月以上欠席する		国際学部教務課	保証人と連署で、休学を願い出、許可を受ける。（印鑑必要）
	休講・教室等講義に関係することが知りたい		国際学部教務課	ポータルサイトの「MY 時間割」等で確認する。
	教員と面談したい		国際学部教務課	manaba（国際学研究科・共通コース）のコースコンテンツにアップしている教員のオフィスアワーを確認する。
	登録に際し、不明な点がある		国際学部教務課	履修要項熟読の上、登録日までに照会・相談する。
	成績に疑義・質問がある		国際学部教務課	所定の期間に申し出る。（印鑑必要）
学業・修学についてわからないこと・知りたいことがある			国際学部教務課	随時、照会・相談する。
試験関係で	突発事由で試験に欠席して追試を願い出たい		国際学部教務課	欠席後その科目の試験日を含め 4 日以内（土・日・祝日は含めない。ただし土曜日が試験日の場合は試験当日を含む 4 日以内）に届け出る。（診断書等理由を証明できるもの、印鑑必要）
	試験の日時を知りたい		国際学部教務課	試験実施日の 14 日前にポータルサイトで発表される。
	受験に際し、学生証の不携帯に気がづいた		国際学部教務課	試験用臨時学生証の交付を受けて受験し、受験後ただちに国際学部教務課に返却する。
自然災害時及び交通機関不通時			国際学部教務課	授業休止の取扱基準の欄を参照のこと。
学籍関係で	現住所を変更した	本　人	国際学部教務課	変更後ただちに届け出、学生証の住所を変更する。（印鑑必要）
		保証人	国際学部教務課	変更後ただちに届け出る。（印鑑必要）
	氏名を変更した	本　人	国際学部教務課	変更後ただちに届け出、学生証の氏名を変更する。（住民票記載事項証明書・印鑑必要）
		保証人	国際学部教務課	変更後ただちに届け出る。（印鑑必要）
	保証人を変更するとき		国際学部教務課	変更後ただちに届け出る。（印鑑必要）
	休学したい		国際学部教務課	保証人と連署で休学を願い出、許可を受ける。（理由書又は診断書添付・印鑑必要）
	復学したい		国際学部教務課	保証人と連署で学期開始日 1 ヵ月前までに復学を願い出、許可を受ける。（印鑑必要）
	退学したい		国際学部教務課	保証人と連署で退学を願い出、許可を受ける。（理由書又は診断書と学生証添付・印鑑必要）
	再入学したい		国際学部教務課	国際学部教務課で相談の上、入試部に問い合わせる。

こんなとき		ここで	こうする
証明書関係で	学生証の交付を受ける	国際学部教務課	入学時に交付を受け、修了まで使用する。但し、「在籍確認シール」は毎年学年始めに配付する。
	学生証を紛失した	国際学部教務課	紛失後ただちに届け出る。最寄りの警察へも届け出る。
	学生証の再交付を受ける	国際学部教務課	発行機にて「学生証再交付願」(再交付手数料 1,000円)の交付を受け、提出する。（印鑑必要）
	通学定期券を購入したい	各交通機関	学生証を各交通機関の窓口に提出した上、購入する。
	通学証明書がほしい	国際学部教務課	必要時に申し込む。無料・即日交付。
	学割証がほしい	証明書自動発行機	各種証明書の交付の欄を参照。
	団体旅行割引証がほしい	国際学部教務課	クラス・ゼミの場合、必要時に申し込む。即日交付。
		学生部	課外活動サークルの場合、必要時に申し込む。即日交付。
	各種証明書がほしい	発行機	窓口事務各種証明書の交付の欄を参照。
経済生活の面で	アルバイトの紹介	学生部	紹介物件をホームページ等で確認し、各自窓口に申し込む。
	奨学金を希望するとき	学生部	学生手帳「奨学金」の欄を参照。
	授業料の納入がおくれるとき	学生部	延納一括・分納最高 3 回分割の制度があるので、保護者ポータルサイトから所定の期間内に申し込む。
	生活費の支弁が困難なとき	学生部	学生手帳「短期貸付制度」の欄を参照。
課外活動のこと	団体を結成するとき（同好会・県人会など）	学生部	前もって課外活動担当者の相談を受け、所定用紙に必要事項を記入し、提出する。（印鑑が必要）
	課外活動諸団体への入部	各団体	直接各団体に申し込む。学生手帳「課外活動のすすめ」の欄を参照。
	課外活動でのいろいろな問題	学生部 学生相談室	各団体の長や先輩に相談する。相談できない時は、部長・顧問の先生または学生部・学生相談室で相談する。
	集会をするとき	学生部	前もって学生部で所定の手続をして、会場等の調整を計ること。
	合宿をするとき	学生部	所定の用紙で合宿の 10 日前までに届け出る。
施設の利用	大学指定合宿施設を利用するとき	学生部	学生手帳「大学指定合宿施設」の欄を参照。
	教室を借用したいとき	学生部	所定の用紙で願い出ること。
	学友会館のホール・会議室等を利用したいとき	学友会館事務室	所定の用紙で願い出ること。学生手帳「学友会館」の欄を参照。
ものを紛失・拾得または盗難にあったとき		学生部 国際学部教務課	ただちに学生部または、国際学部教務課に申し出る。
種々の問題で悩んでいるとき		「何でも相談室」 「こころの相談室」 国際学部教務課	学生手帳「何でも相談室」「こころの相談室」の欄を参照。悩んでいること、困っていることは遠慮せずに早目に相談すること。
正課または正課外において災害事故にあったとき		学生部	学生手帳「学生災害事故療養費等給付」の欄を参照。
健康相談、診療および応急処置をうけたいとき		保健管理センター	学生手帳「保健管理センター」の欄を参照。

付　　録



深草学舎　〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL　075－642－1111（代表）

◆主な事務室連絡先

市外局番は「075」です。

	部　署　名	事　　例	ダイヤルイン	FAX
①	政策学部教務課	政策学部の科目に関すること	645-2285	645-2101
②	法学部教務課	法学部の科目に関すること	645-7896	643-9901
③	経営学部教務課	経営学部の科目に関すること	645-7895	643-9901
④	国際学部教務課	国際学部の科目に関すること	645-5645	645-6444
⑤	経済学部教務課	経済学部の科目に関すること	645-7894	645-6444
⑥	文学部教務課 心理学部教務課	文学部の科目に関すること 心理学部の科目に関すること	645-7893	645-5639
⑦	短期大学部教務課 短期大学部実習指導室 短期大学部社会活動センター	短期大学部の科目・実習・社会活動に関すること	645-7897 645-7906	645-2825
⑧	矯正・保護総合センター事務部［２階］	矯正・保護の教育・研究・社会貢献活動に関すること	645-2040	645-2632
⑨	教学部 教養教育センター事務部	深草・大宮学舎の教養教育科目に関すること 教室に関すること	645-7891	643-5021
	教職センター（深草）	教職課程に関すること	645-3749	643-5021
⑩	教材作成室	印刷が必要な教材作成に関すること	645-7891	643-5021
⑪	研究部（深草）［２階］	各種研究支援に関すること	645-7922	645-2033
⑫	総務部人事課［２階］	人事・給与に関すること	645-7874	645-8685
⑬	講師控室（６号館）	大学からの通知・連絡		
⑭	講師控室（２号館）			
⑮	障がい学生支援室	障がい学生支援に関すること	645-5685	645-2825
⑯	学修支援・教育開発センター	教育活動の支援に関すること	645-2163	645-2190
⑰	グローバル教育 推進センター事務部	留学・国際交流に関すること	645-7898	645-2020
⑱	図書館事務部（深草）	図書館利用に関すること	645-7885	645-8691
⑲	宗教部	宗教教育・宗教行事に関すること	645-7880	645-7939
⑳	学生部（深草） スポーツ・文化活動 強化センター	学生生活に関すること	645-7889	644-2988
㉑	保健管理センター	診察、健康診断、健康相談に関すること	645-7879	643-9909
㉒	情報メディアセンター［２階］	情報実習室、メディア機器の利用に関すること メディア教材作成に関すること	645-2108	645-2109
㉓	キャリアセンター	学生の就職支援及びキャリア開発に関すること	645-7878	645-5556
㉔	龍谷大学ボランティア・NPO活動センター	教育研究活動とボランティア・NPO活動との連携に関すること	645-2047	645-2064
㉕	REC事務部（京都）［２階］	地域社会との交流、「産・官・学」連携による教育・研究活動の推進に関すること	645-7892	645-9222
㉖	生活協同組合	購買（書籍・文具・チケット等）	642-0213	643-7774

時間割控

		1講時 (9:15～10:45)	2講時 (11:00～12:30)	3講時 (13:30～15:00)	4講時 (15:15～16:45)	5講時 (16:55～18:25)	6講時 (18:35～20:05)	7講時 (20:10～21:40)
月	科目名							
	担当者							
	教　室							
火	科目名							
	担当者							
	教　室							
水	科目名							
	担当者							
	教　室							
木	科目名							
	担当者							
	教　室							
金	科目名							
	担当者							
	教　室							
土	科目名							
	担当者							
	教　室							

www.world.ryukoku.ac.jp/graduate